

第Ⅱ部 2022-2023 年度における各研究室等の活動

01 言語学

1. 研究室活動の概要

(1) 研究分野の概要

言語学は、世界の言語を実証的かつ理論的に研究する学問である。本研究室では、特定の理論・言語に偏ることなく、過去の文献資料も含めた世界の多種多様な言語を自分の手で調査・研究し、その一次資料から一般化を図るという基本姿勢を貫いている。

言語を教科書から学ぶのと、自分で未知の言語を調査し分析するのは全く別のことである。後者の方法を身につけるには、学部段階から教育・訓練が不可欠である。当専修課程は、言語学の基礎的な考え方を学ぶだけでなく、音声学を修得し、言語の調査・分析を行なう能力も身につけることのできる国内でも数少ない課程の一つである。

(2) 大学院の専攻・コースとしての活動

2023 年度現在の教員数は、教授 2 名、准教授 1 名、専任講師 1 名、助教 1 名である。この他、学部・大学院の共通講義として毎年異なる非常勤講師を他大学から迎えている。加えて大学院教育では、韓国朝鮮文化研究室をはじめ、本学の情報理工学系研究科（音響音声学）および附属図書館アジア研究図書館（エジプト語）の教員による講義も開講している。

教養学部からの言語学専修課程への進学者数は最近 18 名前後である。大学院修士課程へは最近 4 名前後で、本専修課程卒業者のほか、他大学出身者や外国人留学生も入学している。博士課程へはそのうちの約半数が進学するが、外部にも門戸を開いている。

教養学部前期課程には、毎年総合科目を出講することにより協力している。

(3) 学会・研究誌・ホームページなどに関する研究室としての活動

教員と大学院生の研究発表の場として、1979 年以降『東京大学言語学論集』を毎年刊行している。同誌は東京大学学術機関リポジトリにより全文がワールド・ワイド・ウェブ上で公開されている。最も関係の深い学会は日本言語学会であり、教員全員が常任委員会、評議員会、編集委員会等の委員を務めている。学会大会では、博士課程の大学院生が大会で活発に研究発表をしている。その他、研究テーマによっては日本語学会や日本音声学会などで発表することもある。

また、1998 年度以来、京都大学の言語学研究室と交流演習を実施して成果をあげている。院生が毎年 1 人ずつ相手校で発表をし、教員・院生の批評を受けるというものである。近年は、東京大学総合文化研究科・言語情報科学専攻とも交流演習を実施している。

当研究室では、1998 年以來、ホームページを立ち上げ、これらの研究室活動の情報を日本語と英語で広く提供している。その URL は次のとおり：<http://www.gengo.l.u-tokyo.ac.jp>

(4) 国際交流の状況

本研究室は外国人留学生が多く、韓国、中国、ポーランド、トルコ、ロシアなどの学生が日本語や自分の母語の研究を進めている。日本人学生にとっても良い刺激となっている。

逆に、日本人の大学院生が、現地調査ないし留学のために長期に渡って海外に出ているケースも少なくない。研究室としてもこれを積極的に勧めている。

また、外国人研究員も随時迎え入れている。さらに、科学研究費などで海外の研究者を招待した時には、院生・学生に向けての講演会も開催している。

2011 年から発足した香港中文大学との部局間交流協定においては、担当研究室として交流事業に貢献している。この交流協定の枠組みで、2011 年 5 月 22 日に“Sign Language Research in Asia”を開催し、150 名を超える参加者があった。また、同時に締結された学生交流の覚え書きに従い、2012 年に大学院生 1 名が 1 学期間香港中文大学に留学した。2013 年にも、夏期講座に大学院生 1 名が参加している。さらに、イギリス・カーディフ大学とも交流協定を締結し、2020 年度から提携している。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

西村 義樹（教授）	： 認知言語学	2004 年 4 月～現在
小林 正人（教授）	： 歴史言語学	2010 年 4 月～現在
長屋 尚典（准教授）	： 言語類型論	2019 年 4 月～現在

(2) 講師の活動

白井 聡子

在職期間 2021 年度～現在

研究領域 言語学、記述言語学、チベット＝ビルマ諸語、チアン諸語、ダバ語

主要業績

(書籍等出版物) [共編者] 『Linguistic Atlas of Asia and Africa Volume 3』、Chitsuko FUKUSHIMA, Satoko SHIRAI, Mika FUKAZAWA, Hiroyuki SUZUKI, and Mitsuaki ENDO (編)、日本地理言語学会、2023.11

(論文) [学術雑誌] 「Classifiers in nDrapa: Definition and categorization」、白井聡子、『言語研究』162 号、pp.25-46、2022.9

[論文集 (書籍) 内論文] 「Subgrouping of Tibeto-Burman」、Suzuki, Hiroyuki, Shiho Ebihara, Kazue Iwasa, Keita Kurabe, and Satoko Shirai、『Linguistic Atlas of Asia and Africa Vol. 1』、2022.9

[論文集 (書籍) 内論文] 「‘Mouse/rat’ in Tibeto-Burman; ‘Chicken’ in Tibeto-Burman; ‘Horse’ in Tibeto-Burman; ‘Wolf’ in Tibeto-Burman; ‘Dog’ in Tibeto-Burman; ‘Bear’ in Tibeto-Burman.」、Ebihara, Shiho, Kazue Iwasa, Keita Kurabe, Satoko Shirai, and Hiroyuki Suzuki、『Linguistic Atlas of Asia and Africa Vol. 1』、2022.9

[国際会議プロシーディングス] 「Variation in basic roots across dialects in nDrapa: Geolinguistic analysis in the Qiangic context」、Satoko SHIRAI、『Proceedings of the fifth International Conference on Asian Geolinguistics』、pp.21-33、2023.9

[学術雑誌] 「Geolinguistics and Sino-Tibetan: An introduction」、Satoko SHIRAI、『地理言語学研究』3 巻、pp.146-151、2023.10

[大学、研究機関紀要] 「A geolinguistic approach to nDrapa dialectology」、Shirai, Satoko [白井聡子] and Yang Huang [黄陽]、『Grammatical Phenomena of Sino-Tibetan Languages 6: Typology and Historical Change』、pp.109-124、2024.2

(講演・口頭発表等) [シンポジウム・ワークショップ パネル (指名)] 「Can we find traces of the development of Qiangic classifiers in Tangut?」、SHIRAI, Satoko, International Workshop: Studies of the Tangut from the viewpoints of researches on TB minority languages、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2022.9.9

[シンポジウム・ワークショップ パネル (指名)] 「Geolinguistic approach to Sino-Tibetan: An introduction」、SHIRAI Satoko、Pre-conference workshops of the 55th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics、京都大学、2022.9.14

[口頭発表 (一般)] 「A Geolinguistic Approach to nDrapa Dialectology」、SHIRAI Satoko and HUANG Yang、The 55th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics、京都大学、2022.9.15

[その他] 「Numeral systems in Tibeto-Burman」、SHIRAI Satoko, EBIHARA Shiho, IWASA Kazue, KURABE Keita, and SUZUKI Hiroyuki、The 6th meeting of ILCAA Joint Research Project “Studies in Asian and African Geolinguistics”、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (オンライン)、2023.3.26

[口頭発表 (一般)] 「Basic roots varying among dialects in nDrapa: A geolinguistic analysis in the Qiangic context」、SHIRAI Satoko、The Fifth International Conference on Asian Geolinguistics、University of Social Sciences and Humanities, VNU, Hanoi、2023.5.4

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等] 「ダバ語類別詞の機能拡張」、白井聡子、京都大学言語学懇話会第 121 回例会、京都大学言語学懇話会、2023.7.8

[シンポジウム・ワークショップ パネル (指名)] 「チアン言語圏への地理言語学アプローチ」、白井聡子、「国際シンポジウム：GIS を用いて言語情報と非言語情報をつなぐ」、国立民族学博物館、2023.9.23

[口頭発表 (一般)] 「ダバ語方言地図からの知見」、白井聡子、2023 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会、東京外国語大学本郷サテライト、2024.3.24

(共同研究) [科学研究費助成事業 (研究分担者)] 「類別詞と文法的性を中心にした文法的体言化に関する類型的研究」、河内一博 PARDESHI P.V. 仲尾周一郎 古本真 宮岸哲也 桐生和幸 稲垣和也 白井聡子、基盤研究 (B) : 22H00659、日本学術振興会、慶應義塾大学、2022.4～2027.3

[科学研究費助成事業 (研究代表者)] 「ダバ語形態統語法の総合的研究」、白井聡子、基盤研究 (C) : 23K00476、日本学術振興会、東京大学、2023.4～2026.3

(学会・委員活動) [所属学協会] 日本言語学会、日本地理言語学会、言語処理学会、日本音声学会、日本チベット学会、日本中国語学会

[学会委員] 日本言語学会大会運営委員 2021～2024、日本地理言語学会世話人 2019～現在、チベット＝ビルマ言語学研究会世話人 2003～現在

(3) 助教の活動

石塚 政行

在職期間 2019 年度～2022 年度

研究領域 バスク語

主要業績

(論文) Ishizuka, Masayuki, 「Configurational entities and locative genitive in Basque」、『日本エドワード・サピア協会研究年報』、2021

石塚政行、「変則的二項述語文としての所有文：バスク語の所有コピュラ文」、『日本エドワード・サピア協会研究年報』、2022

(学会発表) [その他] 松本曜 石塚政行 カフンブル モニカ、「Manner and deixis contingency of path coding: Evidence from French Basque and Mombasa Swahili」、『The 14th International Conference of the Association for Linguistic Typology』、2022

田中太一 浅岡健志朗 石塚政行 松田俊介、「ブロックの比喩の功罪と動的言語観」、日本言語学会第 165 回大会、2022.11.13

石塚政行 田中太一、「グロス実践における問題点の回避と素朴知識」、日本言語学会第 165 回大会、2022.11.13

(学会) 国内、日本言語学会、一般会員、2019.4～

国内、日本エドワード・サピア協会、一般会員、2019.4～

田中 太一

在職期間 2023 年度

研究領域 日本語学

主要業績

(論文) [大学, 研究機関紀要] 「言語の「かのように」性について：能力としての代換」、田中太一、『東京大学言語学論集』44 巻、pp.279-293、2022.10

[大学, 研究機関紀要] 「認知文法の品詞論」、田中太一、『日本語・日本文化研究』32 巻、pp.82-93、2022.12

[その他] 「(私) の意味論へ向けて」、田中太一、『The Basis: 武蔵野大学教養教育リサーチセンター紀要』13 巻、pp.103-119、2023.3

[大学, 研究機関紀要] 「「知ること」と「すること」：Langacker (2010) “Control and the mind/body duality” を深読みする」、佐藤らな 氏家啓吾 萩澤大輝 田中太一、『東京大学言語学論集』45 巻、pp.223-252、2023.10.31

(講演・口頭発表等) [その他] 「ブロックの比喩の功罪と動的言語観」、田中太一 浅岡健志朗 石塚政行 松田俊介、日本言語学会第 165 回大会、2022.11.13

[その他] 「表示は何を表示するか：グロス・ラベル・図」、松田俊介 田中太一、日本言語学会第 165 回大会、2022.11.13

[その他] 「グロス実践における問題点の回避と素朴知識」、石塚政行 田中太一、日本言語学会第 165 回大会、2022.11.13

[その他] 「認知言語学において個別言語志向的類型論は可能か」、田中太一 長谷川明香、日本エドワード・サピア協会 第 38 回研究発表会、2023.10.7

(非常勤講師) 東京農工大学工学部、2022.4～、大阪大学外国語学部、2022.4～、成蹊大学文学部、2022.9～2023.3、東京造形大学 人間形成科目、2023.4～

(4) 外国人研究員・内地研究員

	2022 年度	2023 年度
内地研究員	0 名	0 名
外国人研究員	1 名	0 名
大学院人文社会系研究科研究員	1 名	2 名

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2022 年度

「開閉の動詞に関する意味的分析」
「真の情報を導く「N ノトコロ」表現について」
「日本語の場所格交替の下位分類について—大鎖構文を中心に—」
「村上春樹の比喩表現の分析 ——名詞対応の直喩を中心に——」
「「N してる」構文についての考察」
「肥筑方言アスペクト形式「V+ヨク」の福岡県内における使用状況の分析と考察」
「ニュースの「やさしい日本語」化における情報量の変化」
「富山県滑川市方言における名詞アクセントの動態」
「スペイン語諸方言における完了形と過去形の競合についての分析」
「ロシア語における sja 動詞の受影性について」
「副詞「無事」の新用法—ネットスラング「無事死亡」から考える—」
「日本語の接尾辞「ぶり/っぶり」の使い分けについての分析」
「日本語における「〇〇ゲー」表現の文法化による分析」
「ラテン語聖書ウルガータにおける関係節の用法について」
「宮崎弁の文末助詞について」
「連濁の地域的傾向と音韻条件：複合語地名を手掛かりに」
「日本語とフランス語における時点を表す表現と接置詞との共起に関わる要因 ——「{c}」と「à」の比較を中心に——」
「台湾華語における「有+VP」構文の機能の分析」

他、特別演習 4 名

2023 年度

「日本語ラップの韻に関する考察」
「補助動詞「イタダク」とガ格の共起について」
「インフォーマルな書き言葉における仮名の送られ方」
「スペイン語の叙述補語構文について、前置詞選択を中心に」
「家庭内の会話における日本語と英語のコードスイッチング研究」
「Omission of Subjective Case Particle in Spoken Language of Modern Korean: Focusing on Nouns muo/mwo, got/go, sigan」
「現代語における動詞「終わる」「死ぬ」の意味拡張」
「韓国語の語尾-essessess-に関する分析 ——語尾-essess-との比較を中心に——」
「現代文学と比較した近代文学らしさ ——受動文の計量的比較から——」
「コーパスから量的に捉えるペルシア語の軽動詞構文における前部要素の並列と分離可能性」
「会話分析を用いた 制度的場面『漫才』の質的研究 ——オズワルド「友達」を事例として——」
「富山県射水市方言における「が」の発音について」
「古代ギリシア語諸方言における R 音化について」
「イロカノ語重複法の音韻的分析—最適性理論と競合による包括的分析—」
「辞書の空き間になっている表現“有無を言わず”の研究」
「所謂「覚え書き」に代表されるソシユールの前半生における印欧祖語研究が「一般言語学講義」に対して及ぼした影響について」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

福田樹生 「現代英語における[期間 of 行為/状態] 構文の記述」(指導教員) 西村義樹
北村萌 「ドマリ語に見られる西イラン諸語の人称代名詞接語の借用」(指導教員) 小林正人
竹内晶 「母語に関するバイアスがマガーク効果に及ぼす影響」(指導教員) 小林正人
吉田樹生 「Multiple Morphosyntactic Integration Strategies for Loan Nouns in Sinhala: Effects of Language Attitude on Language Structure (シンハラ語における形態統語的借用語統合：言語態度の言語構造に対する作用)」(指導教員) 長屋尚典

2023 年度

- 中野智宏 「A Systematic Phonological Reconstruction of Proto-Brythonic (ブリソン祖語の体系的再構)」〈指導教員〉
小林正人
- 川浪拓也・ティモスィー 「A Diachronic Study on Hittite Adnominal Possessive Constructions (ヒッタイト語の名詞句所有構文の通時的的研究)」〈指導教員〉小林正人
- 林真衣 「Linker Complex Predicate Constructions in Pangasinan Ilokano: Description and typology (イロカノ語パンガシナン方言のリンカー複雑述語構文：記述と類型)」〈指導教員〉長屋尚典

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

(甲)

- 塚越柚季 「印欧語比較言語学による喉音を想定した韻律復元に基づく『リグ・ヴェーダ』の詩人家系間の言語変種同定」
〈主査〉小林正人 〈副査〉長屋尚典・白井聡子・梶原三恵子・大向一輝
- 諸隈夕子 「ケチュア語アヤクーチョ方言における移動表現の類型論的研究」
〈主査〉長屋尚典 〈副査〉西村義樹・小林正人・白井聡子・松本曜

(乙)

なし

2023 年度

(甲)

- 田中太一 「文法の哲学的基盤—認知文法の観点から—」
〈主査〉西村義樹 〈副査〉小林正人・長屋尚典・古田徹也・山泉実
- 鈴木唯 「トルコ語の従属節における従属節標識と主語標示の選択：コーパス調査に基づく量的研究」
〈主査〉長屋尚典 〈副査〉西村義樹・小林正人・白井聡子・菅原睦
- 張倩倩 ZHANG Qianqian 「Diachronic Changes of Sanskrit Correlative Structure (サンスクリットにおける相関構造の通時的変化)」
〈主査〉小林正人 〈副査〉西村義樹・長屋尚典・白井聡子・梶原三恵子

(乙)

なし

02 考古学

1. 研究室活動の概要

(1) 研究分野の概要

東大考古学研究室では、伝統的に「東アジアのなかの日本」という視点を重視してきた。研究科内の北海文化研究常呂実習施設、あるいは学内の総合研究博物館、埋蔵文化財調査室等に所属する、日本近世、北アジア、西アジア等の考古学分野や年代測定学等の関連分野の教員と協力し、幅広く教育研究活動を展開している。

(2) 大学院の専攻・コースとしての活動

北海道における調査活動は60年以上に及ぶ。北海文化研究常呂実習施設と共同で、2009年度より大島2遺跡の調査をおこなっている。

福田を代表として、2021年度から「日露共同調査によるサハリン新石器時代社会形成過程の解明」（科学研究費国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））を開始し、2022～2023年度は韓国・スウェーデン等での現地調査を実施、スウェーデン・ルンド大学では国際ワークショップを共同開催した。また2022年度からは、「宗谷海峡域における新石器縄文時代生活史の実態解明」（科学研究費基盤研究（B））に取り組み、北海道稚内市内における縄文時代遺跡群の探査及び発掘調査を実施した。

根岸を代表として、2023年度から「縄文時代前半期における火山災害・古環境変動への地域適応史の解明」（科学研究費基盤研究（B））を開始した。また、同年度から東京大学卓越研究員となり、縄文／弥生移行期における漆製品・赤色顔料・玉類・布製品の産地推定と製作技術の研究を実施している。ほかに研究分担者として、学術変革領域研究（A）「土器を掘る：22世紀型考古資科学の構築と社会実装をめざした技術開発型研究」（2020～2024年度）にて東日本における栽培植物出現の年代と文化変容の時期を解明する研究を進め、「北限の水稻農耕文化は海峡を越えたか—水稻農耕文化の拡散過程の研究—」（科学研究費基盤研究（A））にて土器編年構築と発掘調査を担当している。

森先を代表として、「日本列島における現生人類移住初期の環境適応史研究」（科学研究費基盤研究（B））により日本列島の後期旧石器時代前葉の文化研究を継続し、東北、関東、東海、北海道にて現地調査・発掘調査を実施した。また2022年度からは、「海と陸からの統合的アプローチによる日本列島旧石器研究の革新」（科研費挑戦的研究（開拓））を開始し、瀬戸内地方の海底地形測量・潜水調査による景観復元、動物化石研究、人類の生業研究を進めている。ほかに研究分担者として、2023年度から「日本列島域にいたる先史人類形成過程の解明」（科学研究費学術変革領域研究（A））にて旧石器人口動態解析とモンゴルでの発掘調査、「古本州島中央部における先史狩猟採集民の総合的研究」（科学研究費基盤研究（A））で瀬戸内地方旧石器の蛍光X線石材産地推定、「蛍光X線分析と鉱物組成分析による大和の古代寺院・宮都出土瓦の生産・供給体制の研究」（科学研究費基盤研究（B））で胎土分析を担当している。

(3) 学会・研究誌・ホームページなどに関する研究室としての活動

2023年度3月2日・3日に本郷キャンパス法文1号館113教室で第23回北アジア調査研究報告会を開催した。また東京大学埋蔵文化財調査室と共催で、調査研究プロジェクト8（「大名屋敷遺跡研究の新潮流」2023年3月11日）および調査研究プロジェクト9（「近・現代遺跡と東京の考古学」2024年3月17日）等を、本郷キャンパス国際学術総合研究棟文学部3番大教室にて開催した。

『東京大学考古学研究室研究紀要』は、2022年度は36号、2023年度は37号と順調に刊行された。すべて考古学研究室HP上にて公開している。考古学研究室のホームページのURLは<https://www.lu-tokyo.ac.jp/archaeology/>である。

(4) 国際交流の状況

アメリカ・ミズーリ大学、モンゴル・モンゴル科学アカデミー、台湾・国立史前文化博物館を訪問して旧石器時代研究に関する国際学術交流、韓国・釜山大学校、韓国・嶺南大学校、スウェーデン・ルンド大学を訪問して東北アジア及び北欧の新石器時代研究に関する国際学術交流、パプアニューギニア・国立博物館美術館、フィリピン・国立人類学博物館を訪問して民族考古学に関する国際学術交流を行った。ほかに、イギリス・セインズベリー日本藝術研究所を訪問し、新たな共同研究に関する研究環境の視察を行った。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

福田正宏 東北アジア考古学（現在に至る）

根岸洋 縄文・弥生時代の考古学、民族考古学（現在に至る）

森先一貴 東アジア旧石器時代の考古学（現在に至る）

(2) 助教の活動

新井才二

在職期間 2022 年度～

研究領域 西アジア・中央アジアの動物考古学

主要業績

（書籍出版物）[分担執筆] 『Hacı Elamxanlı Tepe: The Archaeological Excavations of An Early Neolithic Settlement in West Azerbaijan』, Saiji Arai, 『Neolithic Bone Tools And Ornaments From Hacı Elamxanlı Tepe; Neolithic Animal Remains From Hacı Elamxanlı Tepe』, ex Oriente, 2022

[共著] 『家畜の考古学 古代アジアの東西交流』, 新井才二, 「西アジア・中央アジアにおける牧畜のはじまり」, 雄山閣, 2022.10

[共著] 『中央アジア牧畜社会 人・動物・交錯・移動』, 久米正吾 新井才二, 「天山山脈の最初の牧畜民」, 京都大学学術出版会, 2023.3

（論文）[国際会議プロシーディングス] 'Returning to Hunting and Re-microlithisation during the Mushki Phase in Fars, southwest Iran', Masashi Abe Saiji Arai Morteza Khanipour, *Tracking the Neolithic in the Near East*, 2022.5, pp.575-587

[学術雑誌] 'Neolithization during the 6th millennium BCE in western Central Asia: New evidence from Kaynar Kamar Rockshelter, Hissar Mountains, Southeast Uzbekistan', Yoshihiro Nishiaki Otabek Aripdjanov Saiji Arai Chie Akashi Hiroto Nakata Bakhtiyor Sayfullayev Odil Ergashev Rustam Suleimanov, *Archaeological Research in Asia*, 30 巻, 2022.6, p.100352

[論文集（書籍）内論文] 'Faunal remains from Salat Cami Yanı: An Early Pottery Neolithic site in the Upper Tigris Valley', Hongo H.S. Arai C. Y. Gündem B. Öksüz Y. Miyake, *Animals and Humans through Time and Space: Investigating Diverse Relationships. Essays in Honour of Joris Peters*, 2023, pp.201-211

（講演・口頭発表等）[口頭発表（一般）] 'Early dispersal of domestic ungulates into the Central Asian mountain region: a view from Southern Uzbekistan', Saiji Arai Otabek Aripdjanov Chie Akashi Yoshihiro Nishiaki, *Archaeozoology of Southwest Asia and Adjacent Areas 15th Meeting*, 2022.12.2, 2022.11.28-12.2

[シンポジウム・ワークショップ パネル（指名）] 「中央アジア東部への家畜の波及とダルヴェルジン遺跡での家畜飼育」, 新井才二, 中央アジア東部地域での定住集落の出現, 2023.2.14

[口頭発表（一般）] 'The Emergence of Animal Husbandry in Pamir-Alay Range and Problem of Early Domesticates in Ferghana Valley', Saiji Arai, Ўзбекистон Республикаси ҳудудида 2022 йилда олиб борилган археологик тадқиқот-лар натижаларига бағишланган ҳисобот сессиясининг, 2023.3.16, 2023.3.16-17

[シンポジウム・ワークショップ パネル（指名）] 「ブタと西アジア」, 新井才二, 古代オリエント博物館 公開シンポジウム「西アジアのいきものをめぐる歴史と文化」, 2023.7.22

[ポスター発表] 「突厥馬の動物考古学的研究」, 植月学 新井才二 Aida ABDYKANOV Kubatbek TABALDIEV, 日本文化財科学会第40回記念大会, 2023.10.22

[口頭発表（一般）] 「ウマの古病理からみた都市の馬と牧畜民の馬—キルギス中世の事例—」, 植月学 新井才二 Aida ABDYKANOV Kubatbek TABALDIEV, 日本古病理学研究会第8回大会, 2023.12.9

（共同研究）[科学研究費助成事業] 「アジア東西の農耕文化圏における先史時代ブタ飼育の比較」, 板橋悠 大稔哲也 丸山真史 菊地大樹 新井才二 覚張隆史, 基盤研究（B）: 22H00734, 日本学術振興会, 筑波大学, 2022.4～2025.3

（兼任講師）明治大学総合数理学部, 2023.4～, 立教大学文学部史学科, 2023.9～2024.3

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2022 年度

- 「下宅部遺跡を中心とした南関東における縄文時代の漆工に関する研究」
- 「古墳時代の兵庫県南部における石製模造品について」
- 「縄文時代のイルカ漁について」
- 「東北地方南部における縄文時代晩期の遺跡動態とその地域性」
- 「三浦半島南部の海蝕洞穴で出土するアワビオコシについての考察」
- 「宮古島市浦底遺跡のイノシシ骨から見る遺跡内部環境の考察」
- 「弥生二丁目遺跡出土土器の編年的位置付け」
- 「青森県内における環状列石成立に関する考察」

2023 年度

- 「貝塚から見る霞ヶ浦周辺の縄文時代人の環境利用」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

- 田邊幹太郎 「前期青銅器時代のユーフラテス河中流域における集落とステップの関係性—テル・ガーネム・アル・アリ遺跡近傍墓域群の空間分析から—」〈指導教員〉西秋良宏
- 橋本渚 「北メソポタミア新石器時代における小形土製品研究の考古学的意義—シリア、テル・セクル・アル・アヘイマル遺跡出土品を中心に—」〈指導教員〉西秋良宏

2023 年度

- 小久保竜也 「東北地方中・南部における縄文時代晩期後半土器型式間の影響関係」〈指導教員〉根岸洋
- 原口雅隆 「刳拔式石棺を対象とした古墳時代の石材加工技術に関する研究」〈指導教員〉根岸洋
- 宮井しづか 「南コーカサス地方新石器時代前期から中期における世帯活動の変化—ハッジ・エラムハンル・テペとギョイトペの比較を中心に—」〈指導教員〉西秋良宏
- 宮原千波 「弥生・古墳時代における準構造船の基礎的研究」〈指導教員〉根岸洋

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

- (甲) (乙)
- なし

2023 年度

- (甲)
 - 中村雄紀 「愛鷹・箱根山麓における後期旧石器時代の研究」
 - 〈主査〉森先一貴 〈副査〉福田正宏・根岸洋・佐藤宏之・池谷信之
- (乙)
 - なし

03 美術史学

1. 研究室活動の概要

1910年、「美学」の講座が創設されて以来、その主要研究分野のひとつが美術史であったため、1917年、「美学美術史」と改められた。1963年、組織拡充に伴い「美術史学」として独立し、第一類（文化学）に属することになった。5年後に、第二類（史学）へと移る。1994年、文学部の改組によって、歴史文化学科の専修課程となる。1995年、大学院重点化に伴う改組により、美術史学の大学院課程は、ディシプリンの独立は保持しながらも、最近の専門研究の動向とインターディシプリナリーな要求に応えるため、考古学とともに人文社会系研究科基礎文化研究専攻の中で形象文化コースを形成することになった。

研究の対象は、あらゆる美術作品や形象表現である。時代は原始から現代まで、地域もまったく限定されない。もとより、教員の専攻分野にしたがって、現在のところ、日本、中国、西洋、イスラームの美術、特に二次元芸術である絵画が主たる研究対象になっているが、決してこれに局限されるものでない。

2022・2023年度の教員は、教授2名、准教授1名である。それぞれ自己の専門分野を中心に研究および教育に最大の努力を重ねているが、上述のような美術史学専修および大学院課程の基本的性格から充分であると言いきれない。そこで、東洋文化研究所および総合文化研究科から教員4名（このうち総合文化研究科の三浦篤教授は2022年度末で定年退職）のほか、多くの非常勤講師に出講を依頼し、さらに次世代人文学開発センターの教員1名の協力を得て、可能な限り完璧なカリキュラムが編成できるよう努めている。

教養学部からの進学はこのところ定員枠ほぼ一杯に近い。修士および博士課程進学者は、学内外から受験者が多い。この他、学士入学者の採用も行ない、優秀な学生の発掘にも心掛けている。

研究室の活動としては、この期間も各教員が美術史学会の常任委員を務め、2022年5月にはその全国大会を主催するなど学会活動を主導した。1985年以来、研究室紀要『美術史論叢』を毎年1冊発行し、既に40号（2023年度）に至っている。特色ある教育活動としては、毎年実施される古美術見学旅行（演習）があり、学生にとって美術作品調査研究の最初の訓練の役割を果たしている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

秋山聡教授	(西洋美術史)
高岸輝教授	(日本美術史)
増記隆介准教授	(日本美術史)

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2022年度

- 「『六道絵』人道の図像について―聖衆来迎寺本を中心に―
- 「ラファエロ作《キリストの変容》研究」
- 「ドービニーの絵画に見られる『劇的な変化点』に関する考察」
- 「運慶の写実と美術史における写実の再定義」
- 「NFTアートの美術史における位置付け。―ダミアン・ハースト『THE CURRENCY』の提示する価値についての研究―
- 「鈴木其一『夏秋溪流図屏風』の成立に関する考察」
- 「ジョシュア・レノルズの女性肖像画における歴史画との妥協」
- 「パウル・クレーの初期作品の検討―《インヴェンション》を中心に―
- 「観心寺如意輪観音菩薩坐像の造像背景について」
- 「正倉院所蔵唐大刀と唐制横刀の比較分析―武器の生産・使用を中心に―

2023年度

- 「ポール・ゴーギャン《我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか》について―ブルターニュ滞在時の制作活動との関連性を中心に―

「琉球漆工史の再検討—十五～十七世紀の沈金器の文様表現の分析から—」
「シュテファン・ロッホナー《薔薇垣の聖母》の植物表現について」
「古田織部の茶陶 一意匠の形成と「織部好み」の展開—」
「春日曼茶羅における実景と理想化—大和文華館本を中心に—」
「ジョン・エヴァレット・ミレイのファンシー・ピクチャー —《狼の巣窟》を中心とした考察—」
「雪舟の入明と山水画の受容—四季山水図の構図・彩色・樹法に注目して—」
「獅子窟寺薬師如来坐像と九世紀南都の造仏工房」
「狩野芳崖の幕末維新时期における画風展開」
「イギリス猫絵画研究」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

遠藤陸 「鎌倉時代の生身仏信仰と仏師善円の研究」〈指導教員〉高岸輝
堀千晶 「ワシリー・カンディンスキーの版画詩集『響き』における詩と木版画の関連について」〈指導教員〉秋山聰
飯岡遼 「ヴィクトリア朝イギリスにおける画家と複製版画—1862 年コピーライト法を中心に—」〈指導教員〉秋山聰
マリノヴァ マリア アレクサンドロヴァ 「20 世紀初頭のロシアにおけるジャポニスム—アンナ・オストロウモヴァ＝レベジェヴァを中心に—」〈指導教員〉芳賀京子

2023 年度

張天石 「文伯仁『四万山水図』考察 —北京滞在期が画業へ及ぼした影響—」〈指導教員〉板倉聖哲
大島一武輝 「藤田嗣治「秋田の行事」における洋画と日本画の接近」〈指導教員〉増記隆介
鎌田満希 「南蛮漆器の制作環境と国際的受容—イギリス東インド会社史料および日本二十六聖人記念館蔵「漆塗り大傘」の検討を起点に—」〈指導教員〉高岸輝

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

(甲)

なし

(乙)

佐藤康宏 「若冲の世紀 十八世紀日本絵画史研究」
〈主査〉高岸輝 〈副査〉増記隆介・板倉聖哲・塚本鷹充・大久保純一

2023 年度

(甲)

野田麻美 「江戸狩野派研究—古典の再生と変容」
〈主査〉高岸輝 〈副査〉増記隆介・板倉聖哲・塚本鷹充・門脇むつみ

(乙)

なし

04 哲学

1. 研究室活動の概要

1877年の東京大学設立以来、一貫した歴史をもつ哲学科は、1910年、「哲学」、「史学」、「文学」の3学科中「哲学科」に属する哲学専修学科として今日に至る基礎をかためた。本研究室は、井上哲次郎、ラファエル・フォン・ケーベルといった最初期の教授陣のもと、西田幾多郎、桑木厳翼、田辺元、九鬼周造といった日本の哲学草創期の哲学者たちを輩出してきた伝統を持つ。1963年の類制度創設以降は、第一類（文化学）中の、そして1995年から2015年までは、思想文化学科中の、さらに現在では人文学科中の「哲学専修課程」として、文学部の研究・教育組織の一角を占める。また、哲学専修課程は、大学院の組織としては、1953年、人文科学研究科の中の哲学専攻課程として発足し、1995年からは、人文社会系研究科における基礎文化研究専攻内の思想文化コースに属する哲学専門分野となり、西洋哲学の歴史的探究に基づきつつ、哲学の体系的研究および個別テーマ研究をその任務として活動を続けている。

2024年3月現在の所属教員は、教授3名、准教授1名、助教1名であり、哲学史の時代区分的には古代ギリシャ哲学から現代哲学まで、そして内容的には論理学から、存在論、形而上学、社会哲学、応用倫理に至るまでの広い領域をカバーするべく、非常勤講師も含め、多方面にわたる研究者を偏りなくそろえることに留意してスタッフを構成している（なお、外国人専任講師1名が2016年度前期まで在職）。また、不定期的ではあるが、フルブライト講師など外国人数員が一定期間在籍することもしばしばであり、その際は英語による講義が開講される。ちなみに、2008年度から2009年度は、米国のメアリマウント・コレッジのRoger Robins教授がフルブライト講師として哲学研究室に在籍し、哲学特殊講義を英語にて講じていた。2010年度以降は、グローバル化の現状に対応するために、日本人専任教授による英語の授業も開講され、さらに2011年10月からは、ドイツ人専任講師を迎えて英語による授業が増加し、グローバル化に対応する方向性が強化された。また、毎年、他大学から3名程度の非常勤講師の協力をあおぎ、今日の哲学研究の多様化の情勢に対応するべく多彩なカリキュラムの編成にたえず留意している。

教養学部から進学する学生数は、近年、少数の学士入学者を含めて、毎年20名程度である。また、大学院も、修士課程、博士課程それぞれの枠について、多くの応募者の中から選抜された院生で毎年ほぼ満たされている。関心がもたれる領域は、古代哲学から近世・現代の西洋各国ないし各言語圏の哲学にひろく及び、そして論じられるテーマも特定の偏りなく分布している。また、近年は、欧米あるいは中国など東アジアからの大学院生や研究生も少しずつ増えてきており、研究室全体が着実にグローバル化しつつあることが実感される。

各教員による通常の研究・教育活動のほか、研究室全体として関わっている活動としては、「哲学会」の運営があげられる。哲学の学会としては、文字通りわが国における草分けとして、明治初期以来の長い伝統を持つこの組織は、今日、戦後生まれの中堅・若手層の成長によって、自由闊達な雰囲気のもとに旧来にまして活発な研究活動を展開し、わが国の哲学の学会のなかにあつて重要な位置を占め続け、多くの有能な人材を世に送り出している。「哲学会」の主な事業としては、今日では特集形式をとる年報の形で出されている『哲学雑誌』の編集・刊行、秋の「研究大会」、春の「カント・アーベント」（研究発表と講演会）の企画開催があり、いずれも高レベルの研究の披瀝と研鑽の場として機能している。2017年4月からは、伝統ある「哲学会」の歴史と近代日本哲学の形成に果たした役割を検証するために、『哲学雑誌』のバックナンバーのアーカイブ化をもとにした研究プロジェクトを研究室を中心に立ち上げ、2018年4月以降は科学研究費補助金の支援を受け実質的な研究を進めている（2021年度で終了）。また、近年は、哲学に対する社会的要請に呼応すべく、哲学研究室として死生学応用倫理センターとの連携のもと「応用倫理・哲学研究会」を企画し、研究報告書も刊行してきた。その他、「Hongo Metaphysics Club」や「Tokyo Forum for Analytic Philosophy」というタイトルのもと、哲学研究室を訪れる外国人研究者を交えた国際研究会議も大変頻繁に行われ、そこでは同時に哲学研究室の大学院生が、そしてときに応じて参加する他大学の大学院生が、英語で発表をしている。加えて近年は、北京大学、ソウル大学、そして東京大学の哲学関係部門で、教員と院生がともに英語で研究発表をする BESETO 哲学国際会議が持ち回りで開催されており、多くの教員と院生が参加・発表をしている。2019年6月までに、計11回の BESETO 哲学会議が開催された。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

納富信留	(教授、西洋古代哲学、西洋古典学)
鈴木泉	(教授、近世形而上学・現代フランス哲学)
古荘真敬	(教授、近現代ドイツ哲学)
乗立雄輝	(准教授、近現代の英語圏の哲学)

(2) 助教の活動

相松慎也

在職期間 2021 年度～2023 年度

研究領域 デイヴィッド・ヒューム、倫理学

主要業績

(論文) [学術雑誌] “The Fiction of ‘Moral Sentiment’: The Primacy of Language in Hume’s Moral Philosophy,” *Review of Analytic Philosophy*, 3 (1), pp. 63-97, 2023

(その他の各種論著) [部会報告] 「ヒュームにおける道德判断の規範性：動機と理由の観点から」、相松慎也、『イギリス哲学研究』46 号、pp. 114-115、2023.3

(講演・口頭発表等) [口頭発表 (招待)] 「ヒュームにおける道德判断の規範性：動機と理由の観点から」、相松慎也、日本イギリス哲学会関東部会第 110 回例会、中央大学、2022.12.4

[口頭発表 (招待)] 「「道德感情」の虚構性：ヒュームにおける一般的観点と道德言語」、相松慎也、慶應義塾大学言語哲学研究会ワークショップ「ヒュームと分析哲学」、慶應義塾大学、2023.12.9

(共同研究) [科学研究費助成事業] 「ヒューム道德哲学と現代メタ倫理学を基盤とした道德判断の心理的・言語的分析」、相松慎也、研究活動スタート支援：21K19942、日本学術振興会、東京大学、2021.8～2024.3

[科学研究費助成事業] 「偶然性概念の哲学的・概念的・概念史的研究：現代の諸課題の再文脈化の試みへ向けて」、乗立雄輝 中真生 一ノ瀬正樹 古荘真敬 石原孝二 渡名喜庸哲 鈴木泉 納富信留 相松慎也 山田有希子、基盤研究 (B)：23H00559、日本学術振興会、東京大学、2023.4～2027.3

(非常勤講師) 駒澤大学、「哲学」・「倫理学」・「応用倫理学」、2022.4～2024.3

山梨学院大学、「哲学」・「哲学 I・II」・「論理学 I・II」、2022.4～2024.3

武蔵野大学、「西洋思想論 2」、2023.4～2024.3

(委員歴) 哲学会、委員、2021.4～2024.3

日本イギリス哲学会、選挙管理委員、2023.4～2024.3

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2022 年度

「ハイデガー『存在と時間』における「本来性」について」

「前期ドゥルーズにおける差異概念についての考察」

「アリストテレス友愛論における自足性の問題」

「前期ハイデガーの現象学的存在論における歴史性の問題」

「パースの「実在」概念について——なぜ実在が問題となるのか——」

「ヒューム『人間本性論』における因果論の構造について」

「ベルクソン『物質と記憶』における身体と時間性の問題」

「カントにおける算術のア・プリオリ性と総合性の問題」

「規範理由とはどのような概念か」

「ヒューム『人間本性論』における懐疑論について」

「切実性による永遠回帰の肯定——ニーチェの「よろこび」への到達」

「ハイデガー『存在と時間』の倫理的射程」

「アドルノ『否定弁証法』における「哲学の条件」」

「後期ライプニッツにおける仮定的必然性概念についての研究」

「ハイデガーの根源学構想」

「エンハンスメントをどこまで許容すべきか」

「プラトン『国家』第 4 巻における正義概念の検討」

「『純粹理性批判』における対象の現実性と認識の客観的妥当性の問題」

「存在しない人格的对象への愛について」

「他行為可能性と責任」

「ホッブズの『リヴァイアサン』と『ビヒモス』から考える民主主義の限界と展望」

「青年期ベンヤミンの認識論—ロマン主義論における「媒質」概念に着目して」

「パース「新しいカテゴリー表について」におけるカテゴリーの妥当性」

「ニーチェの永遠回帰の分析」

2023 年度

「快樂説の擁護——卑俗性批判に回答する」

「ジャンケレヴィッチ思想から考える「死」について」

「オッカムの共意語について」

「ハイデガーの『存在と時間』における「死への先駆」について」

「ハイデガー『存在と時間』における死の代理不可能性について」

「死刑制度の廃止について」

「ホッブズの社会契約説に対する思想背景の分析—唯名論的傾向の検討を添えて」

「ベンサムにおける道徳的規範の探求—道徳的思考の所在を巡る問い—」

「バークリーの空間・運動論」

「サルトル『存在と無』における「自由」の問題の研究」

「ヒューム『人間本性論』における自己と他者の人格同一性」

「ウィトゲンシュタインの独我論と言語」

「プラトン『イオン』における詩人論——「教育」の観点から詩人・吟唱詩人批判を読む——」

「フッサール現象学における「超越論的主観性」の場所」

「原意味の理論——世界の意味の存在の肯定と私たちの存在構造の理解のための基礎理論——」

「ハイデガー『存在と時間』における超越論性について」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

青木健一郎 「デカルトにおける「神の似像」(Imago Dei) 概念の研究」〈指導教員〉鈴木泉

石井亨 「バークリーにおける常識擁護」〈指導教員〉乗立雄輝

雨森春香 「ヘーゲル『大論理学』「概念論」における概念と個別性」〈指導教員〉古荘真敬

中川和彦 「根拠づけ関係を用いた、究極のなぜの問いに関する探求」〈指導教員〉鈴木泉

石川知輝 「意志と探求：アウグスティヌス『自由意志論』第一巻の研究」〈指導教員〉納富信留

久保田智也 「カント『純粋理性批判』第二版演繹論の研究：私たちは純粋悟性概念を有するののかという問いをめ
ぐって」〈指導教員〉古荘真敬

小林大晃 「ロック哲学における意識、人格概念と規範性の検討：現前における受動性と能動性、および過去と未
来の力学として」〈指導教員〉乗立雄輝

2023 年度

真野雄大 「スピノザ『エチカ』における個体概念の研究」〈指導教員〉鈴木泉

劉思敏 「プラトン『饗宴』における徳の問題について：「徳の幻影」と「真実の徳」に関する解明」〈指導教員〉
納富信留

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

(甲)

岡崎秀二郎 「ヘーゲルの『論理学』における「本質」の論理——「スピノザ主義」に基づく「形而上学」と「批
判哲学」の総合の試み」

〈主査〉鈴木泉 〈副査〉古荘真敬・乗立雄輝・大河内泰樹・三重野清顕

笠松和也 「自己知の倫理学——スピノザ『エチカ』における欲望と神への愛」

〈主査〉鈴木泉 〈副査〉納富信留・古荘真敬・上野修・大西克智

谷田雄毅 「アスペクトとポイント：ウィトゲンシュタインの差異の哲学」

〈主査〉乗立雄輝 〈副査〉古荘真敬・古田徹也・一ノ瀬正樹・大谷弘

(乙)

なし

2023 年度

(甲) (乙)

なし

05 倫理学

1. 研究室活動の概要

人間存在、価値、道徳意識、行為等に関する学的反省を行う倫理学の研究は、古今東西の先人の思索の跡を踏まえ、これを手懸かりとして深められる。倫理学専修課程の講義・演習も倫理学の基礎理論の考察を目指したもののほか、西洋の倫理思想を対象とするものと、日本の倫理思想を対象とするものがあり、教授2名、准教授1名、助教1名から成る専任教員の専門分野も多岐にわたっている。専任教員の他、他大学から出講して頂いている先生方（各年度4名程度）の協力のもと、西洋と日本の主要な倫理思想を対象とする多彩なカリキュラムの編成が可能になっている。

教養学部から進学する学生数は、2022年度は4名、2023年度は2名であった。研究室全体としてみれば、学生、院生あわせて30名ほどだが、学生、院生の研究テーマは、古代ギリシア哲学からヨーロッパにおける現代の先端的な社会哲学まで、また、古事記から儒教、仏教、国学、さらに近現代の日本思想に至るまで、まことに多彩である。そして、教員と学生、院生双方に言えることであるが、本研究室の特徴として西洋思想の研究者と日本思想の研究者の間での対話が要求され、現に行われているという点が挙げられる。

倫理学研究室では、年1回『倫理学紀要』を編集、発行しているが、これは、専任教員ばかりでなく、在籍中の大学院生やオーバドクターの研究成果を発表する場ともなっている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

教授 熊野 純彦

専門分野 倫理学原理論・近現代西欧倫理思想

在職期間 2007年4月－2023年3月

教授 頼住 光子

専門分野 倫理学原理論・日本倫理思想史

在職期間 2013年4月－2024年3月

准教授 古田 徹也

専門分野 倫理学原理論・近現代西欧倫理思想

在職期間 2019年4月－現在

助教 長野 邦彦

専門分野 倫理学原理論・日本倫理思想史

在職期間 2020年4月－2024年3月

(2) 助教の活動

長野 邦彦

在職期間 2020年4月－2024年3月

研究領域 倫理学原理論・日本倫理思想史

主要業績

(論文) [研究会, シンポジウム資料等] 「問答」としての『正法眼蔵』、長野邦彦、『倫理学年報』7巻、pp.32-41、2023.3

[大学, 研究機関紀要] 「全時空を巡る明珠の物語：『正法眼蔵』「一顆明珠」巻を巡って」、長野邦彦、『倫理学紀要』30巻、pp.1-27、2023.3

[学術雑誌] 「道元思想における捨身について：修行の相互相依的成立構造」、長野邦彦、『実存思想論集』38号、pp.101-117、2023.6

[大学, 研究機関紀要] 「謡曲『忠度』における「文」・「武」・「名」について」、長野邦彦、『倫理学紀要』31巻、pp.79-103、2024.3

(講演・口頭発表等) [シンポジウム・ワークショップ パネル (指名)] 「問答」としての『正法眼蔵』、長野邦彦、日本倫理学会第73回大会共通課題「対話」、2022.10.2

[シンポジウム・ワークショップ パネル (公募)] 「「哲学はあるか？」という問いから「共に哲学できないか？」という問いへ」、長野邦彦、日本哲学会第82回大会ワークショップ「「哲学はあるのか」という問いは 何を意味するのか？周縁に定位した 哲学に向けた論点整理」、2023.5.21

(非常勤講師) 東京女子大学、2022.4～

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2022 年度

- 「自己了解と倫理的態度 『存在と時間』における良心論の読解」
- 「『葉隠』における近世武士の死生観」
- 「『曽根崎心中』における「恋」と「心中」の普遍性」
- 「時間の論理学による哲学的議論の明晰化」
- 「ジャック・ラカン「文字の審級」論文におけるシニフィアン」

2023 年度

- 「相対主義と絶対主義の間に」
- 「ローティの倫理学と「公私の区別」」
- 「ニーチェの永遠回帰におけるニヒリズムとしての意味について」
- 「ネル・ノディングスのケアの倫理と幸福論の関係」
- 「『葉隠』の武士道について」
- 「バーナード・ウィリアムズにおける道徳というシステムとその限界」
- 「近代のケガレ意識と食肉における日本人の倫理観」
- 「ベルクソン『道徳と宗教の二源泉』における知性批判」
- 「北村透谷の思想 想世界に入ることと現実逃避との違いについて」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

- 小倉基嗣 「『全体性と無限』における責任としての主体——多元論と内部性の共存」〈指導教員〉古田徹也
- 長尾柊輝 「キュレネ派はなぜ快楽主義を採ったのか：快楽のアピールをめぐる」〈指導教員〉古田徹也

2023 年度

- 鈴木元 「自律と人間性の政治哲学——カント『法論』の研究」〈指導教員〉古田徹也

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

(甲)

- 中原真祐子 「ベルクソンにおける自我——『直接与件』と『物質と記憶』を中心に——」
〈主査〉熊野純彦 〈副査〉頼住光子・古田徹也・村山達也・橋爪大輝

(乙)

なし

2023 年度

(甲)

- 真田乃輔 「ヘルマン・コーエンからエルンスト・カッシーラーへ——無限小概念の基礎づけとしての論理学の意義と問題、そして「数学的関数概念の論理学」へ——」
〈主査〉古田徹也 〈副査〉頼住光子・熊野純彦・三重野清顕・中野裕考
- 大澤真生 「二人称的他者と両義性の倫理——カール・レーヴィットの共同相互存在論」
〈主査〉古田徹也 〈副査〉頼住光子・熊野純彦・寺田俊郎・橋爪大輝

(乙)

なし

06 宗教学宗教史学

1. 研究室活動の概要

(1) 研究分野の概要

宗教学宗教史学研究室における研究は総合的な宗教の人文社会科学的研究である。2022～23 年度の研究活動は、教授 2 名、准教授 2 名、専任講師 1 名、助教 1 名の計 6 名の教員を中心として行われた。これまでの教員による特色ある研究を継承するとともに、最近の研究状況、社会情勢を踏まえ、新たな可能性をも模索している。研究分野としては、宗教理論・宗教学史、世界宗教史、日本宗教史、宗教思想史・地域宗教史（中近世および近現代欧米、イスラエル、古代中国、近現代日本）、現代社会と宗教（死生観の変容、生命倫理と宗教、慰霊と追悼、グローバル化・ポスト世俗化時代の宗教と公共圏）、宗教調査（現代日本の諸宗教・宗教性、宗教民俗）などをカバーしている。方法論は、宗教哲学・思想研究、比較宗教学、宗教社会学、宗教民俗学、宗教人類学、宗教史学などである。また、近年は死生学・応用倫理センターとの活発な連携が研究活動の大きな特色となっており、院生・学部生の問題関心にも影響を与えている。

(2) 大学院の専攻・専門分野としての活動

このような研究の多様性は院生にもあてはまる。したがって、一人ひとりに、特定の対象・方法についてのスペシャリストになると同時に、宗教学全体、さらには人文社会科学（最近では生命工学・AI 技術など自然科学も含む）の動向にも目配りするジェネラリストになることを求めている。その実現のための授業が、全院生・教員が参加し、持ち回りで自分の研究について発表する合同演習である。個別には、従来型の原典を精読する指導を継続しつつ、デジタル・ヒューマニティーズへの取り組みも後押しするなど、院生のポテンシャルを引き出す試みを行っている。さらに修士 1 年生に対しては、アカデミック・ライティングを実践的に指導し、成果として自分の関心ある分野・テーマの研究動向を調査するサーヴェイ論文を発表することを課している。

(3) 学会運営/研究誌の発行など研究室としての活動

本専修課程では研究成果を発信するために教員と院生の協力により毎年『宗教学年報』（オンライン・オープンアクセス）を刊行している。これには教員、院生、同窓生などの研究論文・前述の研究動向サーヴェイ論文・研究ノート等が掲載される。併せて『年報別冊』も刊行されるが、これは本研究室の同窓会誌的な性格をもち、同窓生や留学生からの寄稿、研究室の現況報告、修士論文の要旨、卒業論文題目一覧などが常時載せられる。

教員の一人が 2020 年 8 月から IAHR（国際宗教学宗教史学会）の事務局長を務めているため、その事務局が研究室に置かれる形になっている（業務は全面的に電子化されているため、研究室を物理的に使用してはいない）。IAHR は 1950 年に創立された宗教学分野最大の国際的学術組織であり、その潤滑な運営に貢献している。さらに 2023 年 12 月には東大を会場として IAHR Special Conference と加盟学会代表者の総会にあたる International Committee Meeting を開催した。2023 年 9 月からは日本宗教学会会長の業務も兼ねている。

(4) 国際交流の状況

コロナにより中断されていた国際交流は 2022 年から徐々に再開され、2023 年には来日した研究者の講演、院生・教員の海外での発表・講演がコロナ前よりも増加した。前述の IAHR Special Conference の開催は院生にとっても貴重な国際交流の機会となった。併せてオンラインでの交流も続いている。これらについては研究室 HP で報告を掲載している。

<https://www.l.u-tokyo.ac.jp/religion/consortium.html>

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

- 池澤 優 : 中国宗教研究、祖先崇拝、生命倫理（1995 年 4 月～2024 年 3 月）
- 藤原 聖子 : 宗教学（理論研究・比較研究）、宗教と教育の関係、北米の宗教（2011 年 4 月～）
- 西村 明 : 宗教史学、宗教人類学・民俗学、慰霊・死者儀礼の継承、日本と太平洋域の宗教文化（2013 年 4 月～）
- 渡辺 優 : 西洋近世神秘主義、神秘主義概念の系譜学的研究、現代宗教思想・宗教哲学（2019 年 4 月～）
- 志田 雅宏 : 中世キリスト教世界のユダヤ教、現代ユダヤ教、アブラハム宗教史（2020 年 4 月～）
- 佐藤 清子 : アメリカ合衆国の宗教・宗教史、宗教の自由（2022 年 4 月～）

(2) 講師の活動

志田 雅宏

在職期間 2020 年 4 月～現在

研究領域 中世キリスト教世界のユダヤ教、現代ユダヤ教、アブラハム宗教史

研究業績

(書籍出版物) [共著] 伊藤邦武・山内志朗・中島隆博・納富信留編、『세계철학사 4』(世界哲学史 4) (第 10 章「中世ユダヤ哲学」)、b (도서출판비)、2023.5

(論文) [学術雑誌] 志田雅宏、「中世西欧のユダヤ教における対キリスト教論争文学の嚆矢—ヨセフ・キムヒ『契約の書』とヤアコヴ・ベン・ルーベン『主の戦い』—」『西洋中世研究』14、7-25 頁、2022.12

[学術雑誌] 志田雅宏、「コロナ禍での宗教生活—オンライン・レスポンスを中心に—」、『ユダヤ・イスラエル研究』、36、58-68 頁、2022.12

(講演・口頭発表等) [口頭発表 (一般)] 国外、Masahiro Shida, “Ibn Gabirol and Nahmanides: A Transmission of Andalusian Tradition” (Comment on the Lecture “Those Who Worship Other Than You”: The Plurality of Religions in Solomon Ibn Gabirol's Keter Malkhut” by Jonathan Decter), CISMOR Workshop (Doshisha University), Online, 2022.7.16

[口頭発表 (一般)] 国外、Masahiro Shida, “Hayyim ibn Musa's Shield and Spear: A Late Medieval Intellectual Polemic and Its Context,” The 18th World Congress of Jewish Studies, Jerusalem, Israel, 2022.8.8

[口頭発表 (一般)] 国内、志田雅宏、「ソロヴェイチク『ハラハーの人間』—現代ユダヤ教の哲学的探究—」、日本宗教学会第 81 回学術大会、オンライン (愛知学院大学)、2022.9.10

[口頭発表 (一般)] 国内、志田雅宏、「ヨセフ・B・ソロヴェイチクの哲学—『ハラハーの人間』から『孤独な信仰者』へ—」、京都ユダヤ思想学会、同志社大学、2023.6.24

[口頭発表 (一般)] 国外、Masahiro Shida, “Critical Reviews on Jewish Traditions in the Medieval Jewish Polemical Literature: A Study of Hayyim ibn Musa's Shield and Spear,” The 12th EAJIS (European Association for Jewish Studies) Congress, 2023.7.18

[口頭発表 (一般)] 国内、志田雅宏、「『ヨセフ・ハメカネの書』におけるキリスト教論駁—方法と文脈—」、日本宗教学会第 82 回学術大会、東京外国語大学、2023.9.9

[口頭発表 (一般)] 国外、Masahiro Shida, “Critical Views on Jesus as Torah Teacher in the Medieval Jewish Polemical Literature: Cases of the Gospel of Matthew” (A Response to Prof. H. Zellentin's Lecture, “Jesus and the Law: Confirming the Torah in the New Testament, the Talmud and the Qur'an”), Seminar in Humanitas Futura, Tokyo, Japan, 2024.2.23

(その他)

非常勤講師、東京工科大学、「宗教学」「世界の宗教」、2018.4～

非常勤講師、埼玉学園大学、「宗教学」、2018.4～

非常勤講師、慶應義塾大学、「宗教学 I」「宗教学 II」、2019.4～

非常勤講師、山梨大学、「宗教学」、2019.4～

リサーチフェロー、同志社大学—神教学際研究センター (CISMOR)、2020.4～

市民講座、朝日カルチャーセンター、「ハラハーが創り出すユダヤ教世界—法をおこない、法を学ぶ」、2022.2.8

講演、アラブ調査室連続講義「中東の宗教」、「中東に残るユダヤ教」、2022.5.27

市民講座、朝日カルチャーセンター、「教典がつくるユダヤ教—歴史をえがくひとつの視点として—」、2022.9.15

東京大学エグゼクティブ・マネジメント・プログラム (EMP) 第 27 期講義、「生き方としての「神の臨在」—バビロニア・タルムード、ソーター篇 5a を読む—」、2023.2.11

市民講座、朝日カルチャーセンター、「「それは天にあるものではない」—古代末期のユダヤ教の賢者たち」(全 2 回)、2023.3.20～27

市民講座、朝日カルチャーセンター、「対話と哲学によるユダヤ教の構築—イエフダ・ハレヴィとマイモニデス—」、2023.6.3

市民講座、朝日カルチャーセンター、「ユダヤ教への新たな息吹—神秘家たちの描く神の世界—」、2023.9.15

市民講座、朝日カルチャーセンター、「ユダヤ教における聖戦—理念と実践のはざま—」、2023.9.16

市民講座、朝日カルチャーセンター、「ユダヤ教の伝統と現代世界～ラヴ・クックとソロヴェイチク～」

2023.12.2

東京大学エグゼクティブ・マネジメント・プログラム（EMP）第29期講義、「中世ユダヤ教世界のイエス伝承—『トルドー・イエシュ』を読む—」、2024.2.23

市民講座、朝日カルチャーセンター、「現代ユダヤ教における聖地：宗教研究の視点から」（全3回）、2024.2.20～3.5

（学会・委員活動）[所属学協会] 中世哲学会、京都ユダヤ思想学会、日本ユダヤ学会、日本宗教学会

[委員歴] 京都ユダヤ思想学会、運営委員、2010.4～

[委員歴] 日本ユダヤ学会、理事、『ユダヤ・イスラエル研究』編集委員、2019.4～

[委員歴] 中世哲学会、書評ワーキング・グループ委員、2022.6～

[委員歴] 日本ユダヤ学会、理事、『ユダヤ・イスラエル研究』編集委員長、2023.4～

(3) 助教の活動

佐藤 清子

在職期間 2022年度～現在

研究領域 アメリカ合衆国の宗教・宗教史、宗教の自由

研究業績

（書籍出版物）[事典項目] 佐藤清子、「アメリカ合衆国のカトリック」『キリスト教文化事典』、丸善出版、2022.8、588-589頁

[分担執筆] 藤永康政／松原宏之編著『「いま」を考えるアメリカ史』（第12章「宗教の自由のゆくえ——アメリカ社会思想・キリスト教」）、ミネルヴァ書房、2022.9

[分担執筆] 島菌進編『政治と宗教——統一教会問題と危機に直面する公共空間』（第5章「アメリカ——政教分離国家と宗教的市民」）、岩波書店、2023.1

[教科書] 佐藤清子、「歴史の扉18 サイレントマジョリティの台頭と宗教的アメリカ人」、遠藤泰生、小田悠生編著『はじめて学ぶアメリカの歴史と文化』、ミネルヴァ書房、314-318頁、2023.1

[分担執筆] 伊達聖伸・木村護郎クリストフ編著『世俗の新展開と「人間」の変貌』（西洋における宗教と世俗の変容3）（第2章「「宗教化」する無宗教——アメリカ合衆国のポスト世俗」）、勁草書房、2024.2

[単著] 佐藤清子、『宗教の自由と不寛容のアメリカ史——十九世紀の反カトリックとプロテスタント』、東京大学出版会、2024.3

（論文）[学術雑誌] 佐藤清子、「進化論教育をめぐるアメリカの現在——自由、選択と「公」からの離脱」『福音と世界』2022年6月号、24-29頁、2022.6

（講演・口頭発表等）[口頭発表（一般）] 国内、佐藤清子、「アメリカの無宗教を考える——新たな最大少数派（非）宗教集団」アメリカ学会第56回年次大会、中央大学、2022.6.5

[口頭発表（一般）] 国内、佐藤清子、「批判的人種理論に対するアメリカ宗教界の反応」日本宗教学会第81回学術大会、オンライン、2022.9.10

[口頭発表（一般）] 国内、佐藤清子、「アメリカ合衆国におけるホームスクーリングと宗教の動向」日本宗教学会第82回学術大会、東京外国語大学、2023.9.9

（受賞）第四回而立賞（東京大学学術成果刊行助成）、2023

（その他）非常勤講師、静岡県立大学、「宗教学入門」、2015.4～

兼任講師、立教大学、「キリスト教講義」、2016.4～

非常勤講師、聖心女子大学、「キリスト教／キリスト教特講」、2017.4～

兼任講師、中央大学、「Reading」、2017.4～

非常勤講師、成城大学、「現代社会論」、2021.4～

2023年度上智大学神学講座（免許法認定公開講座（文部科学省認定））講師、「アメリカ合衆国「文化戦争」と宗教」、2023.8.7～8

（学会・委員活動）[所属学協会] 日本宗教学会、日本アメリカ史学会、アメリカ学会

(4) 外国人研究員・内地研究員

グイン・マクレランド 2022.10.20～2022.12.20

パリデ・ストルティエニ 2022.10.4～2023.7.31

ジョン・ミルトン・コイネー 2022.10.24～2022.12.8

シュロミー・ムアレム	2023.3.1～2023.3.31
マーク・マリNZ	2023.6.6～2023.11.6
暴鳳明	2023.6.1～2023.8.31

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2022 年度

- 「国際関係論における非国家主体としての宗教同時多発テロ事件の事例から」
- 「皮膚に意味を刻む ―沖縄トライバルタトゥーの解釈学―」
- 「女性の方が「信じやすい」説の再検討」
- 「人工妊娠中絶をめぐる真宗の教説と実践」
- 「地球温暖化にまつわる諸言説と終末論に関する考察」
- 「宗教と科学の両立の実態 ―バーバーのモデルとの比較―」
- 「戦場の宗教者 ―従軍聖職者の日米比較―」
- 「17 世紀オランダのヴァニタスの静物画における宗教性」
- 「日本における従軍聖職者」
- 「「タルパ」現象からとらえる現代のスピリチュアリティの形態」
- 「法要と音楽の関係からみる「テクノ法要」」
- 「宗教者の運営する子ども食堂の実態」
- 「日本におけるイースターの受容について～イースターは日本化された祭りたりうるか～」

2023 年度

- 「共同創作される「ネットロア」―創作怪談「SCP」を事例として―」
- 「近年のモキュメンタリーホラー作品に見る日本における「舞台装置としての宗教」の役割―「フェイクドキュメンタリー『Q』を中心に―」
- 「讃美歌制作者マルティン・ルター」
- 「第2 期平成・令和仮面ライダー作品での父殺し―アメリカ的な父殺しの流入か高齢化への応答か―」
- 「反進化論言説についての考察―19 世紀から現代までのアメリカにおける科学とキリスト教の衝突の歴史から―」
- 「揺れ動く聖地像 ―複数の視線が絡むおちば一枚刷り―」
- 「在日コリアンによる聖霊派キリスト教信仰の分析」
- 「仏領ベトナムにおける仏教復興運動への中国の影響」
- 「現代スピリチュアリティ文化と先祖」
- 「宗教学における KHcoder による分析」
- 「宗教系大学の宗教性とその変遷」
- 「マンガアプリのコメント欄を活用した宗教研究の検討―マンガ読者と宗教の距離感―」
- 「二つの災禍における「あいまいな喪失」―東日本大震災とコロナ禍の語りから―」
- 「時代と共に変わりゆく口寄せ文化と、その中で変わらないもの」
- 「歌謡曲に現れる現代日本人の宗教性」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

- 加藤基 「中世エチオピアにおける単婚規範の成立とその展開」〈指導教員〉藤原聖子
- 柴田峻太郎 「西洋初期中世における聖餐論の転換」〈指導教員〉渡辺優
- 坪井俊樹 「新宗教における感染症の語り COVID-19 影響下の公式メディアを中心に」〈指導教員〉西村明
- 廣江愛美 「日本近代文学の形成と北村透谷の《インスピレーション》」〈指導教員〉藤原聖子
- 和田理恵 「歌謡曲に見る現代日本の祈りの形態―歌詞の計量テキスト分析を用いて―」〈指導教員〉藤原聖子
- 李木子 「漢魏晋時代の中国における死生観の形成―病いと死に対する宗教職能者の対応に着目して―」〈指導教員〉池澤優
- 田口哲郎 「フランス・ロマン主義詩人アルフォン・ルイ・コンスタンの「宗教的なもの」―『神の母、宗教的、人間主義的叙事詩』を読む―」〈指導教員〉渡辺優
- 中條真之介 「折口信夫の「道徳」論 発動する靈魂、国家による統一」〈指導教員〉西村明

林蓮太朗 「ラカン派精神分析と神秘主義—ふたつの学知の相同性について—」〈指導教員〉渡辺優
和田知之 「現代ドイツにおける教会からモスクへの転用—宗教空間論と物質的宗教論の視点から—」〈指導教員〉
藤原聖子

2023 年度

石本樹木 「現代日本における「陰謀論」の展開」〈指導教員〉藤原聖子
門芳敏 「アウグスティヌス『説教』における 聖遺物を通じた奇跡の語り—生きられた宗教としての典礼と人々
との交わり—」〈指導教員〉渡辺優
長廣美乃 「「日本的」環境思想にみられる生命主義とその背景・機能」〈指導教員〉西村明
服部直美 「国学とキリスト教—平田篤胤と松山高吉をつなぐ地下水脈—」〈指導教員〉藤原聖子
宮本靖大 「GLA における「選択輪廻観」の再検討——高橋信次・佳子の著作と青年会員へのインタビューから」
〈指導教員〉渡辺優
山田絵玲沙 「信仰を閉じるとき—転換期の隠し念仏コミュニティ—」〈指導教員〉西村明

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

(甲) (乙)

なし

2023 年度

(甲)

田中浩喜 「フランス近現代史における政教関係の諸相—病院のライシテ化にみる複数性と連続性—」
〈主査〉藤原聖子 〈副査〉西村明・渡辺優・伊達聖伸・前田更子

(乙)

なし

07 美学芸術学

1. 研究室活動の概要

本研究室は、その名が示すとおり、美と芸術を対象とする研究の場として機能している。研究分野の中心をなすのは、美と芸術に関する理論的考察であるが、文学、音楽、造形芸術、演劇、舞踊、映画といった個別の芸術ジャンルを対象とする研究をも含む形で多彩な研究が繰り広げられ、一般美学のみならず、個別のジャンルの研究の世界にも多くの人材を輩出してきた。このように一般的・原理的な研究と個別的・具体的な研究とが相補いながら並存することによって、美学の原理的な研究が具体的な芸術現象や芸術体験から遊離することなく、アクチュアリティを持った形で展開されてきたのみならず、音楽学、演劇学といった個別のジャンルに関わる研究分野に関しても、奥行きと広がりを持った研究によって多大な貢献を成し遂げてきた。とりわけ、本研究室の学風をなす、古典的なテキストを取り上げ、その精読によって厳密なテキスト研究を積み重ねてゆく研究の手法は、現象の皮相的な考察に陥らない、独自の研究の伝統を作り上げてきた。

さらに学問状況全体が大きく変わりつつある近年にあつては、一般美学の研究においても、また個別的なジャンル研究においても、美や芸術といった概念やそれを背景とした芸術制度や慣習といった、これまで自明なこととして問われることのなかったシステムそのものの成り立ちを対象化し、政治・経済や社会制度、メディアといった問題圏の中で捉えなおしてゆくような研究が重要な位置を占めるようになってきており、さらには美学を感性文化論的文脈のうちに位置づけることも喫緊の課題となっている。このような新しい方向性に関しても本研究室は従来の伝統を新たに生かす仕方での日本の学界における主導的な役割を果たしており、そのような研究環境を求めて他大学から本学での指導を希望してやってくる者なども少なくない。また外国からの留学希望も多く、外国人研究生をコンスタントに受け入れている。

本研究室では現在 JTILA (The Journal of the Faculty of Letters, the University of Tokyo, Aesthetics)と題された欧文の紀要(1976年創刊)と『美学芸術学研究』(1982年に『東京大学文学部美学芸術学研究室紀要・研究』として創刊、1995年改題)と題された和文の紀要の2つを毎年刊行している。これらはもちろん、教員スタッフや博士課程の大学院生の研究成果の発表の場となっているが、特に前者は当研究室の研究活動と様々な形で関わっている諸外国の第一線級の研究者を執筆者に迎えるなど、国際的な研究交流の点でも大きな貢献を果たしてきた。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

2019年4月より小田部胤久教授(在籍は1996年～。近代美学)、三浦俊彦教授(在籍は2015年～。分析哲学、分析美学)、吉田寛准教授(在籍は2019年～。ゲーム研究、感性論。2024年4月より教授)の3名で運営してきたが、2024年3月の小田部胤久教授の定年退職にともない、同年4月より桑原俊介准教授(西洋近代美学)が着任し、3名の体制によって、少しでもバランスのとれた教育活動を展開できるよう心がけている。

(2) 助教の活動

松原 薫

在職期間 2020年4月1日～2023年3月31日

研究領域 音楽学

主要業績

(書籍等出版物) [その他] 日本18世紀学会編、『啓蒙思想の百科事典』「ポリフォニーとホモフォニー」、丸善出版、2023.1

(論文) MATSUBARA Kaoru, 「Strict Style in Hans Georg Nageli's Aesthetics: Musikalische Kunstwerke im strengen Style von J. S. Bach und andern Meistern revisited」、『International Review of the Aesthetics and Sociology of Music』、53(2)、333-352 頁、2022.12

(その他各種論著) [書評] 『チャールズ・バーニー音楽見聞録〈フランス・イタリア篇〉』(今井民子、森田義之訳)、『チャールズ・バーニー音楽見聞録〈ドイツ篇〉』(小宮正安訳)、『チャールズ・バーニー』、春秋社、『日本18世紀学会年報』、37、28-29 頁、2022.6

(非常勤講師) 宮城学院女子大学、「西洋音楽史概論」、2022.4～

鈴木 亘

在職期間 2023 年 4 月 1 日～

研究領域 美学、表象文化論

主要業績

(書籍等出版物) [単著] 鈴木亘、『声なきものの声を聴く——ランシエールと解放する美学』、堀之内出版、2024.3

(論文) [学術雑誌] 鈴木亘、「ドゥルーズ映画論における自由間接話法の文学論的意義」、『美学芸術学研究』42、1-22 頁、2024.3

(その他各種論著) [書評] 鈴木亘、「ブランショを聴く——高山花子『モーリス・ブランショ——レシの思想』書評」、『表象』17、200-203 頁、2023.8

[その他記事] 鈴木亘、「笑いの二つの身体——植木等と松本人志」、『ユリイカ』、青土社、2024 年 2 月号、198-205 頁、2024.1

鈴木亘「蓮實重彦、あるいは不自由な近代人」、『批評の座標——批評の地勢図を引き直す』、人文書院、2024.3 (<https://note.com/jimbunshoin/n/nfab21fd05ff>)

(講演・口頭発表等) [口頭発表 (一般)] 鈴木亘、「フランス (語) からの日本 (語) の哲学」、日本シェリング協会第 32 回学術大会、2023.7

鈴木亘、「哲学者 (?) における詩人 (?) ——マラルメとランシエール」、関西マラルメ研究会 20 周年記念シンポジウム:《RIEN N'AURA EU LIEU QUE LE LIEU》、2023.12

(非常勤講師) 群馬県立女子大学、「美学特講」、2023.4～

慶應義塾大学、「美学特殊」、2023.4～

(3) 外国人研究員・内地研究員

フェデリコ・ファルネ (日本学術振興会外国人特別研究員) 2021 年 11 月 1 日～2023 年 10 月 31 日

鄭子路 (東京大学大学院人文社会系研究科外国人研究員) 2022 年 5 月 24 日～2024 年 8 月 23 日

シュテフィ・リヒター (日本学術振興会外国人招へい研究者) 2022 年 9 月 30 日～2022 年 10 月 29 日

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2022 年度

「多様性と日常性を軸とした都市空間における場所性の再検討」

「インターネットと「音分裂症」～ニューエイジ・リバイバルは如何にして起こったのか～」

「『崇高と美の観念の起源』における政治経済学 ～エドモンド・バークの美学論とイデオロギー～」

「北原白秋の詩歌における印象派受容」

「『スター・ウォーズ』『シークエル・トリロジー』の特色について」

「戯曲『ビニールの城』における人形の役割について」

「ゴッホ批評に見る小林秀雄の自意識論」

「スマートフォンのユーザーインターフェースにおける機能美」

「『エレファント』における遅さ」

「ZOC/METAMUSE と彼女たちを愛する「女の子」について～女性アイドルと女性ファンの在り方とはなにか」

「都市の風景のアイステシス——ゲルノート・ベーメの一般知覚理論を手がかりとして」

「『IPPON グランプリ』に見る、大喜利の笑いの特殊性」

「ゲームは死をどのように表現してきたか」

「新たなアイドルとして受容される Vtuber の分析」

「ストーリー生成ゲームの可能性」

「黒の衝撃はなぜ起こったのか——服飾における色彩と形を通じて」

「見田宗介『近代日本の心情の歴史』の現代への適応可能性: その理論と実践」

「スマホ全盛の現代におけるデジタルカメラのあり方」

「〈内臓着好症〉にみる倒錯的偏愛と倒錯する自己」

「『偶然短歌』の享受の検討」

「G.W.F. ヘーゲル『精神現象学』における個別性と普遍性——知の生成に即して」
 「マーライオン像のアート作品を通じた再検討」
 「「写ルンです」はなぜ今若者に人気なのか」
 「濱口竜介とエリック・ロメールの結節点」
 「チームの創造性—即興性に着目した考察—」
 「小説版『日の名残り』：虚構の語りがもたらす主体構築の可能性について」
 「少女小説中の「お嬢様学園」——今野緒雪『マリア様がみてる』を題材に」

2023 年度

「環境の美的鑑賞としてのアニメ聖地巡礼」
 「人工知能によって生成された創作物における意図と解釈の諸問題」
 「宙ぶらりんのロック——1970 年代初頭、はっぴいえんどはいかにして日本でロックを実践したか」
 「インターネット時代のサンプリング音楽における音楽素材流通のあり方について」
 「交響曲への標題性の進出とその効果に関する考察～ベートーヴェンの《田園》とブラームスの第 1 交響曲の対照を中心に」
 「表現形式としてのメイクアップアートの分析」
 「ぬいぐるみと人間の親密性：ウィニコットの移行対象という概念から」
 「モーショングラフィックスの特性—音楽との関係を中心に」
 「ゲームシステムとストーリーテリングの観点から考察するノベルゲームというジャンル成立の変遷と同人ノベルゲームの立ち位置」
 「コンセンサスの時代への介入：ジャック・ランシエールの芸術論における現状認識」
 「インターネットメディアの発達に伴う『考察』型ドラマ」の誕生とその特徴」
 「人は廃墟に何を見るのか」
 「『Disc Station』における SMF にみられる音の重ね合わせ～MIDI 規格運用の再評価～」
 「祇園祭の社会美学；祭礼社会にみる美的質感と〈矜持〉の社会美」
 「現代における機能としての「作者」——UGC プラットフォームと生成 AI を通じた著作概念の再考」
 「テレビにおける連続ドラマの経験」
 「朗読の新「ステージ」——マルチモーダルなオーディオブックが拓く作品体験の可能性」
 「ポピュラー音楽におけるジャンル概念の変容に関する考察——音楽ストリーミング・プラットフォームがジャンルに与えた影響をめぐって——」
 「戦争画に対する GHQ の評価について」
 「推理小説における「館」の役割と美的効果」
 「漫才におけるメタ発言についての研究——M-1 グランプリ決勝を題材にとって——」
 「『Fate/stay night』におけるジェンダー表象」
 「RPG における主人公像の違いが及ぼす影響について」
 「『宇宙生成的エロース』における「観得」の概念について—L. クラーゲスによるイメージの「観得」論の読解」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

大崎多恵 「コラボレイティブ・アートの価値とポリティクス—芸術の社会的転回をめぐるクレア・ビショップと
 グラント・ケスターの論争を中心に—」〈指導教員〉三浦俊彦
 山本茉輝 「明治から戦前期の日本民衆歌における伴奏の変遷と機能と声聴取の普及—1930 年代の古賀政男作品
 における日本的伴奏の試みと日本的歌唱法への移行に注目して—」〈指導教員〉吉田寛
 沈易瀟 「オタクの虚構理論——虚構を現実とするオタクを中心に」〈指導教員〉三浦俊彦
 浅野雄大 「J-F・リオタール『判断力批判』読解の方向性—崇高論解釈タームとしての「抗争」と「力学的総合」
 について」〈指導教員〉小田部胤久
 高木咲織 「ひび割れの記号論的諸相—形象と言語の連関についての一考察—」〈指導教員〉吉田寛
 福原直紀 「虚構における存在論—虚構的キャラクターは如何なる存在者か」〈指導教員〉三浦俊彦
 李玉瑩 「写真における現実性への再考——メルロ＝ポンティの現象学・存在論を踏まえて」〈指導教員〉小田
 部胤久
 汪瑾如 「芸術的価値の規範理論としての美的認知主義——ウェルビーイング理論との接点からの論証」〈指導
 教員〉三浦俊彦

2023 年度

有馬一成 「感性論としての美学史におけるヒューム」〈指導教員〉小田部胤久

千葉汐音 「美的経験」を説明する—自然科学的美的経験研究に対する哲学的懐疑論とその応答—〈指導教員〉三浦俊彦

中山未由希 「演奏とはパフォーマンスなのか——西洋芸術音楽の演奏を翻訳という観点から考える」〈指導教員〉吉田寛

徐逸傑 「芸術解釈における意図の役割—会話モデルからの試み」〈指導教員〉三浦俊彦

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

(甲)

櫻井一成 「ポール・リクール哲学——人間の善き生と想像力——」

〈主査〉小田部胤久 〈副査〉三浦俊彦・吉田寛・堀江宗正・杉村靖彦

(乙)

なし

2023 年度

(甲)

小川将也 「ヴィーンの音楽学——音楽研究の理論と歴史——」

〈主査〉吉田寛 〈副査〉小田部胤久・三浦俊彦・長木誠司・西田紘子

曹有敬 CHO You-kyung 「20 世紀音楽における引用及びコラージュのポエティクスとポリティクス——1960 年代～70 年代の理論と実践の諸相」

〈主査〉吉田寛 〈副査〉小田部胤久・三浦俊彦・沼野雄司・福中冬子

丁乙 DING Yi 「『ラオコオン』受容からみる二〇世紀中国美学」

〈主査〉小田部胤久 〈副査〉三浦俊彦・吉田寛・中島隆博・宇佐美文理

河珠彦 HAR Jooun 「サイト・スペシフィック・アートの分析モデルの研究」

〈主査〉小田部胤久 〈副査〉三浦俊彦・吉田寛・伊東多佳子・青田麻未

(乙)

なし

08 死生学応用倫理

1. 研究室活動の概要

(1) 研究分野の概要

2022 年度から、人文社会系研究科基礎文化研究専攻のなかに死生学応用倫理専門分野（死生学応用倫理研究室）が創設された。今まで死生学・応用倫理センターの所属だった教員は、上廣死生学・応用倫理講座の特任教員をのぞき、死生学応用倫理専門分野の所属になった。つまり、特任教員以外には死生学・応用倫理センターには専属教員はいなくなった。センターの運営は研究科長が指名する運営委員によって行われる。ただし、現状では、死生学応用倫理専門分野所属の教員は、運営委員ともなっている。

なお、死生学応用倫理研究室は弥生総合研究棟三階の 302、303 室に置かれることが決定した。

(2) 大学院の専攻・専門分野としての活動

死生学・応用倫理センターの活動と重複するところがある。しかし、今後は、センターとは別の活動を展開する必要がある。

(3) 学会運営/研究誌の発行など研究室としての活動

死生学・応用倫理センターが発行している『死生学・応用倫理研究』は、分野的にはかなり重なる。しかし、この機関誌はあくまで文学部・人文社会系に直属のセンターの機関誌であり、一専門分野の紀要というわけではない。

(4) 国際交流の状況

鈴木晃仁教授が中心となって、2023 年度から「Death & Life Studies and Practical Ethics Lecture Series」を開催している。教員、大学院生、研究員などが、英語で研究発表し、ディスカッションを行い、研究者同士が知り合う機会を創出することを目的としている。発表されてき分野は医学史、生命倫理、医療社会学（Medical Humanities や Medical Social Sciences）などが中心になっている。レクチャーとディスカッションは 45 分ずつで、すべてが英語で行われる。対面とオンラインのどちらも参加可能とした。特に、死生学応用倫理を国際化するために、院生の参加をうながし、英語の理解力やディスカッションの能力を高めることを狙っている。（なお、当初は死生学・応用倫理センターとの棲み分けに混乱が生じ、センターの行事として告知した経緯があったが、適時的に研究室の活動として位置づけ直した。）

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

池澤 優（教授）	：宗教学、東アジアの死生学・応用倫理	2022 年 4 月～2024 年 3 月
鈴木 晃仁（教授）	：医学史、英国および日本の近代	2022 年 4 月～現在
堀江 宗正（教授）	：宗教学、死生観研究、環境倫理	2022 年 4 月～現在
井口 高志（准教授）	：医療社会学、認知症の社会学	2022 年 4 月～現在

(2) 外国人研究員・内地研究員

1. Kandra Polatis (2021-2022) University of California Santa Barbara, Fulbright Japan
2. Isaac C.K. Tan (2021-2023) Columbia University, Japan Foundation
3. Tianyuan Huang (2021-2023) Columbia University, Shincho Foundation

09 心理学

1. 研究室活動の概要

本専修課程は、1903年に我が国で初めて心理学実験室が設立されて以来の長い歴史を持っており、心理学の基礎的領域における教育と研究を行っている。現在、教授2名、准教授2名、助教1名、日本学術振興会のPD・研究員・大学院生・学部生ら約70名が心理学研究室に所属している。知覚・注意・記憶・言語・運動制御・社会認知などの心理現象を心理物理学的手法・脳科学的手法・認知科学的手法によって実験的に研究している。毎年、教養学部文科3類や他の科類の学生が本専修課程に進学する。演習や特殊講義によって心理学に関する幅広い知識を身につけるのみならず、心理学実験演習においてヒトを対象とした実験を行い、コンピュータの操作法・データの収集と解析法・実験レポートの作成法などを学んでいる。卒業論文では、教員の指導の下に実験的研究を行い、その成果をまとめている。

大学院教育に関しては、指導体制の充実を図り、数名の課程博士（博士（心理学））が毎年誕生している。

本専修課程の教員は、それぞれが関係諸学会（日本心理学会・日本基礎心理学会・日本視覚学会・日本認知科学会・日本神経回路学会・日本認知心理学会・認知神経科学会・日本神経科学学会など）に所属して活動している。研究成果は、各専門分野の国際的学会誌に掲載され、公開されている。国内外で開催される学会等に積極的に参加するのみならず、シンポジウム等で特別講演を依頼されることも多い。本学の他研究科や他大学・研究所とも交流があり、共同研究等も活発に行われている。2010年度からは、第一線で活躍する著名な研究者を招いて公開の講演会を毎年数回開催し、アウトリーチならびに研究者と学生の交流促進を図っている。

心理学研究室には認知科学研究室が併置されている。これは、1946年の本学航空研究所の廃止に伴いその航空心理部門が文学部に移管されたもので、当初は能率研究室と称し、心理学研究室の教官1名が兼任し助手1名と共に作業適性や職務分析を中心とした応用心理学の研究を行っていた。1954年に助手の定員割り当てがなくなり、以後、心理学研究室の内部組織として運営されてきた。心理学研究室は、実験心理学を心理学の基礎領域として教育・研究の中心に据えてきたが、やがて周辺科学との学際的交流が深まり、基礎と応用を対立的に捉える考え方は次第になくなっていった。さらに1960年代以降、心理学では情報処理アプローチが興隆し、認知心理学という分野が成立した。この流れの中で心理学は、コンピューター・サイエンス、神経科学、言語学、哲学などと共に認知科学と呼ばれる新たな学際領域を形成し、心理学研究室の教育・研究活動も認知科学と密接な関連を持つようになった。そのため能率研究室は1992年に認知科学研究室と改称され、現在に至っている。心理学研究室に所属する教員は、全員が認知科学と深い研究上の関連を持っており、認知科学の他領域とも連携をとりながら教育・研究活動を行っている。認知科学研究室の担う役割も大きなものになってきていると言える。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

今水 寛

専門分野 運動の学習と制御、認知機能を支える脳のネットワーク解析

在職期間 2015年9月～現在 大学院人文社会系研究科 教授

村上 郁也

専門分野 知覚心理学、認知神経科学

在職期間 2005年4月～ 大学院総合文化研究科 助教授

2013年4月～ 大学院人文社会系研究科 准教授

2018年4月～現在 同 教授

鈴木 敦命

専門分野 実験心理学、認知心理学

在職期間 2017年9月～現在 大学院人文社会系研究科 准教授

浅野 倫子

専門分野 認知心理学

在職期間 2022年4月～現在 大学院人文社会系研究科 准教授

(2) 助教の活動

中山 遼平

専門分野 知覚心理学

在職期間 2020 年 10 月～2024 年 3 月

主要業績

(論文) [学術雑誌] 'Building a decoder of perceptual decisions from microsaccades and pupil size', Nakayama, R., Bardin, J-B., Koizumi, A., Motoyoshi, I. & Amano, K., *Frontiers in Psychology*, 13 巻、942859、2022.9.13

[学術雑誌] 'Theoretical and technical issues concerning the measurement of alpha frequency and the application of signal detection theory: Comment on Buegers and Noppeney (2022)', Kawashima, T., Nakayama, R. & Amano, K., *Journal of Cognitive Neuroscience*, 36 巻、4 号、691-699 頁、2024.4.1

[学術雑誌] 'Aftereffect of perceived motion trajectories', Nakayama, R., Tanaka, M., Kishi, Y. & Murakami, I., *iScience*, 27 巻、4 号、109626、2024.4.19

(その他各種論著) [講演資料等] 「私の留学体験—オーストラリアよいところ—」、中山遼平、*Vision*, 36 巻、2 号、83-85 頁、2024.4.20

(講演・口頭発表等) [口頭発表 (一般)] 'A trajectory aftereffect depending on the double-drift illusion', Nakayama, R., Tanaka, M., & Murakami, I., Annual Meeting of Vision Sciences Society 2022、2022.6.2

[ポスター発表] 「運動外挿の神経相関: 脳波計測による検討」、中山遼平・天野薫・村上郁也、日本視覚学会 2022 年夏季大会、2022.9.6

[ポスター発表] 「シータ波の位相に依存した運動外挿の増減」、中山遼平・天野薫・村上郁也、日本視覚学会 2023 年冬季大会、2023.1.20

[口頭発表 (一般)] 'Temporal evolution processes of a motion-induced position shift ride neural theta oscillations', Nakayama, R., Amano, K., & Murakami, I., Annual Meeting of Vision Sciences Society 2023、2023.5.24

[ポスター発表] 'The trajectory aftereffect: its relationships with attention and orientation processes', Nakayama, R., Kishi, Y. & Murakami, I., The 12th Australasian Cognitive Neuroscience Society Conference、2023.11.29

[口頭発表 (招待)] 「私の留学体験—オーストラリアよいところ—」、中山遼平、日本視覚学会 2024 年冬季大会 若手の会サテライトイベント「留学体験を語る会」、2024.1.17

[ポスター発表] 「和文読文能力と動的視覚情報処理の相関関係の検討」、中山遼平・植月美希・丸谷和史・竹村浩昌、日本視覚学会 2024 年冬季大会、2024.1.18

(受賞) [稲盛研究助成] 「日本語読文能力を支える視覚運動処理に関する心理物理学的検討」、中山遼平、稲盛財団、2022.4～2024.3

(委員歴)

日本基礎心理学会 若手研究者特別委員会 委員、2023.2～現在

日本視覚学会 若手の会 委員、2024.1～現在

(他機関での講義等)

東京藝術大学 非常勤講師、2021.4～現在

早稲田大学 非常勤講師、2022.9～2023.3

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2022 年度

「歩行者の感情を知覚させる動きの要素の検討」

「対面時とオンライン時の代理意思決定におけるリスク選択の差異」

「内発的注意が彩度の知覚に及ぼす影響」

「短時間の集中瞑想と洞察瞑想が注意に与える効果の比較」

「盲点内光刺激による RSVP 課題成績への影響」

「連続フラッシュ抑制のブレイキングにおけるモーダル補完とアモーダル補完の優位性」

「エイジズムが高齢者の顔の特性判断に与える影響」

「髪を含む顔の周辺特徴が信頼性判断に及ぼす影響」

「明るさ情報の両眼統合における両眼視差の効果」

「パレイドリリア画像への順応が顔の魅力度評価に与える影響」
「高精度経頭蓋電気刺激を用いた右側頭頭頂接合部の活動への介入」
「主観的な運動軌跡への方位順応効果に及ぼす注意の影響」
「運動学習における難易度調整が自己効力感にもたらす効果についての検討」
「特徴ベースの注意がオッドボール効果に及ぼす影響」
「他者とのコミュニケーション下における発話の運動主体感についての検討」
「Double Drift Illusion が運動刺激の速度弁別成績に及ぼす影響」
「商品の価格の違いが商品画像におけるチアリーダー効果に与える影響」
「和文フォントがチャットコミュニケーションにおける印象判断・意思決定に与える影響」
「不快感情を伴う自由選択が後続の課題パフォーマンスに与える影響の検討」
「同時提示と継時提示における円の大きさの平均のアンサンブル知覚」
「自己や他者の行動と外界事象の時間関係が主体感に与える影響」
「意図的な誤答による学習の促進におけるエピソード記憶の関与の検討」
「レイト残効は、物理的順応フリッカーと知覚的順応フリッカーのどちらが効果的か」

2023 年度

「道具の特性の差が運動主体感に与える影響についての検討」
「主体感は単一脳領域に帰せるのかー非侵襲的高精度脳刺激法を用いた右側頭頭頂接合部および右下前頭回への単一領域刺激ー」
「色・方位をディストラクタとした際のアンサンブル知覚」
「隠蔽・探索場所の選択に視覚的顕著性と希少性が与える影響」
「運動軌跡残効に順応刺激への意識的アクセスは必要か」
「顔のアイデンティティの階層的符号化についての検討」
「感情ラベリングが SNS 使用時のネガティブ感情に与える影響」
「運動と視覚事象の時間的統合における意識的処理の必要性の検討」
「ダイナミックモーションアフターエフェクトにおける時間過大視について」
「部分遮蔽による顔画像情報の制限が顔構造情報の抽出および記憶照合に及ぼす影響」
「内容の親近性と語りの視点が文章への共感度と評価に与える影響」
「Dynamic Glass pattern を用いた回転錯視現象とその見えの速さ」
「文字の美的評価課題による美感の PIA モデルの検証」
「物語読書による共感回避の低減」
「連続フラッシュ抑制事態の補完誘導図形の形状弁別」
「顔に基づくステレオタイプの信頼性判断の集団内呈示による低減」
「報酬に関する大域情報と局所情報の矛盾がストループ効果に与える影響」
「顔の個人識別における人物内変動情報の処理メカニズムの検討」
「モデリングを通じた主体感の推定と運動制御との関係性の検討」
「サッカー前後における運動物体の知覚的定位」
「他者が行った顔の信頼性判断への社会的同調」
「色と輝度の位相判断における運動の影響」
「行動特有効果における運動シミュレーションの効果器特異性について」
「未知の顔と声のマッチングに寄与する顔パーツの検討」
「社会的学習による好奇心の変化に関する検討」
「文章と音楽のテンポの一致が没入感にもたらす効果」
「他者との物理的な対面による発話の行為主体感への影響」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

原島小也可 「音と色の協応関係における概念媒介仮説の検討」〈指導教員〉浅野倫子
小川翔平 「新規な運動学習における主体感の形成」〈指導教員〉今水寛
菊池優希 「運動中における運動制御の変化と運動主体感の関連について」〈指導教員〉今水寛
北坂晟 「仮想現実アバターの学習における干渉効果の検討」〈指導教員〉今水寛

2023 年度

- 武内千雅 「位相差のある非侵襲的脳刺激による主体感の神経ネットワークへの介入」〈指導教員〉今水寛
木本桜子 「距離知覚における視覚と体性感覚の関係—仮想現実空間における到達運動からの検討—」〈指導教員〉
浅野倫子
高島美紗 「自己参照処理が顔の再認記憶に与える影響—顔の画像コードと構造コードを区別した検証—」〈指導
教員〉鈴木敦命
三谷徹 「顔と服装からの有能性判断における手がかり統合に関する検討」〈指導教員〉鈴木敦命
林佳琦 「チアリーダー効果の時間特性に関する検討」〈指導教員〉鈴木敦命

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

(甲)

- 仲田穂子 「並列的視覚運動信号に基づく個別化と統合」
〈主査〉村上郁也〈副査〉今水寛・鈴木敦命・浅野倫子・天野薫
田中大 「感覚運動制御系における運動主体感の形成メカニズムと機能的役割の検討」
〈主査〉今水寛〈副査〉村上郁也・鈴木敦命・横澤一彦・嶋田総太郎

(乙)

なし

2023 年度

(甲)

- 大久保らな 「複雑な刺激に対する周辺視野の視知覚の研究」
〈主査〉村上郁也〈副査〉今水寛・鈴木敦命・浅野倫子・木村英司
中村友哉 「Psychophysically probing into the dynamics of contextual modulation (文脈変調の動的過程を心理物理学
的に探究する)」
〈主査〉村上郁也〈副査〉今水寛・鈴木敦命・浅野倫子・栗木一郎

(乙)

なし

10a 日本語日本文学（国語学）

1. 研究室活動の概要

東京大学における本格的な日本語研究は、明治中期、帝国大学文科大学に上田万年が「国語研究室」を開設したのに始まったと言ってよい。1897年に設けられた「国語研究室」は、わが国における研究室制度の始まりと言われ、わが研究室は1997年9月に開設百周年をむかえたのであるが、開設当初は、単に大学内の一研究室という立場にとどまらず、広く日本の言葉の実情を調査し、そのあるべき未来像を研究する国家の研究機関という性格を帯びていた。日本の国語を研究する国家的な機関という性格から「国語研究室」と称したものであって、学問名、専修課程名に対応させて言うなら「国語学研究室」「日本語学研究室」と言ってもよいところを、現在でもあえて「国語研究室」と称しているのは、設立当初のこの事情に由るものである。

教育組織としても、明治初期の和漢文学科、和文学科以来、国文学科、国語国文学専修課程と名前を変えて続いていたものが、1975年に国語学専修課程と国文学専修課程に分かれた。その後、わが国語研究室、国語学専修課程は、従来の国語学国文学第一講座（国語学担当）のほか、日本語を軸として日本の文化を考える日本語文化講座、日本語による情報伝達のメカニズムを研究する日本語解析講座を加えて、日本語の構造と歴史を多面的、総合的に研究、教育する体制を整えた。

1995年の大学院化への過渡的措置として1994年に文学部の大講座化という組織替えがあり、その際、国文学専修課程とともに「日本語日本文学専修課程」という共通看板を掲げるようになったが、それぞれの研究目的、方法の差によって、また学生に課すべき訓練内容の差によって、その後も「国語学」として独立した教育、研究室体制を維持している。なお、大学院の教育組織としては、従来から国文学研究室とともに「日本語日本文学専門分野」を形成している。

国語学の研究分野としては、日本語の言語体系を構成する各領域に対応して、文法論・意味論・語彙論・音韻論・文字論などがあり、言語の広い意味での使用をめぐる、談話分析（文章論）・社会言語学（言語生活論）などがある。また、これらの諸分野の一部または全体を、時間的・空間的な展望において扱う国語史学、方言学がある。また、これらの成果の上に立って、日本語情報処理のための理論的研究や外国人への日本語教育という観点からの研究などもある。

研究組織としては、国文学研究室とともに東京大学国語国文学会を運営し、学会誌『国語と国文学』を広く全国の研究者にも開放して刊行している。国語研究室独自の活動としては『日本語学論集』を刊行し、主として大学院生等の論文を公表している。

また、全国の国語学研究者の学術情報の集積伝達の間として、当研究室には全国のほとんどの研究雑誌のバックナンバーがそろっており、多数の古写本、古刊本とともに、希望者の閲覧に供している。

国際交流の状況としては、2022年度は、大学院生として2名、学部生として1名の外国人留学生在本専修課程に在籍し、また、海外の日本語研究者が1名、外国人研究員として研究室に在籍し、研究に従事している（2023年1月1日現在）。2023年度は、大学院生として3名、学部生として1名の外国人留学生在本専修課程に在籍し、また、海外の日本語研究者が2名、外国人研究員として研究室に在籍し、研究に従事している（2024年1月1日現在）。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

井島 正博	教授	日本語文法論	1998年4月～2024年3月
肥爪 周二	教授	日本語史	2003年4月～現在
小西 いずみ	准教授	方言学	2020年4月～現在

(2) 助教の活動

近藤 明日子

在職期間 2022年4月～現在

研究領域 日本語史、計量言語学

主要業績

（論文）[論文集（書籍）内論文]「明治初期の口語体啓蒙書における一人称代名詞—近代の口語体実用文との関係性の検討—」、近藤明日子、『近代語研究 第二十三集』、pp.85-101、2022.9

[大学、研究機関紀要]「明治・大正期の『読売新聞』の文体：雑誌との比較から」、近藤明日子、『日本語学論集』19号、pp.(21)140-(33)128、2023.3

- [学術雑誌]「コンピュータが用いる形態素解析用辞書 UniDic」、近藤明日子、『日本語学』42 巻 2 号、pp.38-46、2023.6
- [学術雑誌]『『昭和・平成書き言葉コーパス』の設計・構築・公開』、小木曾智信 近藤明日子 高橋雄太 間淵洋子、『情報処理学会論文誌』65 巻 2 号、pp.278-291、2024.2
- (講演・口頭発表等) [口頭発表 (一般)]「分類語彙表番号を付与した『日本語歴史コーパス』データ」、浅原正幸 池上尚 鈴木泰 市村太郎 近藤明日子 加藤祥 山崎誠、日本語学会 2022 年度春季大会、2022.5.14
- [ポスター発表]『『日本語歴史コーパス 平安時代編Ⅱ訓点資料』の公開』、柳原恵津子 近藤明日子 高田智和 月本雅幸 小木曾智信、日本語学会 2022 年度春季大会、2022.5.15
- [口頭発表 (一般)]「明治前期口語体実用文データセットの作成」、近藤明日子、「通時コーパス」シンポジウム 2023、2023.3.10
- [シンポジウム・ワークショップ パネル (公募)]『『昭和・平成書き言葉コーパス』雑誌の構築』、近藤明日子、日本語学会 2023 年度春季大会 ワークショップ『『昭和・平成書き言葉コーパス』の構築と公開』、日本語学会、青山学院大学青山キャンパス、2023.5.21
- [シンポジウム・ワークショップ パネル (公募)]「近現代の口語体書き言葉における逆接の接続詞の通時的変化 —『日本語歴史コーパス』と『昭和・平成書き言葉コーパス』を用いた分析—」、近藤明日子、日本語文法学会第 24 回大会 パネルセッション「コーパスによって近現代 140 年の日本語文法の変化を探る —『日本語歴史コーパス』と『昭和・平成書き言葉コーパス』を用いて—」、日本語文法学会、関西大学千里山キャンパス、2023.12.3
- [ポスター発表]「『昭和・平成書き言葉コーパス』の語彙統計情報の公開」、相田太一 近藤明日子 小木曾智信、言語処理学会第 30 回年次大会(NLP2024)、言語処理学会、神戸国際会議場、2024.3.12
- (その他 (データベース・作品等)) [データベース]「昭和・平成書き言葉コーパス」、小木曾智信 近藤明日子 高橋雄太 間淵洋子 田中牧郎、2023.6
- (共同研究・競争的資金等の研究課題) [科学研究費助成事業]「拡張した近代語コーパスを使用した口語体実用文の成立過程の計量的研究」、近藤明日子、基盤研究 (C) : 21K00552、日本学術振興会、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所 東京大学、2021.4～2024.3
- [広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の拡張的研究」]「古辞書類に基づく語彙資源の拡張と語彙・表記の史的変遷」、高田智和、大学共同利用機関法人人間文化研究機構、2022.4～2028.3
- [共同研究プロジェクト機関拠点型基幹研究「開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究」基幹型]「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」、小木曾智信、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所、2022.4～2028.3
- [共同研究プロジェクト機関拠点型基幹研究「開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究」基幹型]「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」、小木曾智信、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所、2022.4～2028.3
- [科学研究費助成事業]「日本語諸方言の形態素解析用辞書の構築と活用」、小木曾智信 五十嵐陽介 坂井美日 村上謙 近藤明日子 平子達也 大槻知世 宮川創 中川奈津子 小西いずみ 久保蘭愛 中澤光平、基盤研究 (A) : 23H00007、日本学術振興会、大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所、2023.4～2027.3
- (授業担当講師) 総合研究大学院大学文化科学研究科、2022.10～2023.3、2023.10～2024.3

(3) 外国人研究員・内地研究員

2022 年度

周 萌 (中国・南京農業大学)

2023 年度

なし

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2022 年度

「名詞化接尾辞「さ」「み」「げ」の特徴」

「意志表現の意味分析―「つもりだ」「気だ」「しようと思っている」について―」
「ソ系指示詞を含む接続詞の地理的バリエーション」
「首都圏方言におけるジャネとジャン―ジャンイカ類の用法差と使用話者属性―」
「原因・理由の複合辞「せいで」と「ばかりに」の意味・用法の違い」

2023 年度

「複合連体辞「トイウ」の変異とその選択要因」
「鹿児島市方言における疑問文 ―終助詞ケを中心に―」
「熊本市方言の文末詞モン」
「群馬県方言における「マーズ」の機能分析」
「副詞「とくに」「ことに」「とりわけ」の分析 ―類語比較を通して―」
「東京都檜原方言の母音融合」
他、特別演習 1 名

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

奥山光 「図学・幾何学分野に見られる近代漢語の超分野的研究―明治期の教科書を活用して―」〈指導教員〉井島正博
山本久 「日本語文体史における漢文の和文化についての研究―中世古文書の借字表記を対象として―」〈指導教員〉肥爪周二

2023 年度

木越弘 「中古語連体修飾節におけるテンス・アスペクトの研究」〈指導教員〉井島正博
小幡幸輝 「音節構造の観点からみた漢語アクセントの史的研究」〈指導教員〉肥爪周二
竹林栄実 「条件表現の史的変遷―「ト」「タラ」を中心として―」〈指導教員〉井島正博
小坂光 「文学的テキストにおける情報性と視点」〈指導教員〉井島正博

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2022 年度・2023 年度

(甲) (乙)

なし

10b 日本語日本文学（国文学）

1. 研究室活動の概要

国文学研究室は、学部の言語文化学科・日本語日本文学専修課程と大学院の日本文化研究専攻・日本語日本文学専門分野の国文学の教育研究を担当している。本研究室は、1877年（明治10）の東京大学発足の和漢文学科に起源する。当時の小中村清矩、芳賀矢一の先学により、近世国学の遺産を継承しつつ、近代的な学問としての国文学の基礎が築かれたのである。

戦後の新制大学発足後、1963年（昭和38）に国語国文学専修課程となり、1975年（昭和50）には国語学専修課程と国文学専修課程とに分かれたが、1994年（平成6）、再び日本語日本文学専修課程となり、今日に至っている。近代的学問の専門分化により、国語学と国文学の教育研究活動は、当然のことながらそれぞれ独自に行われている面もあるが、明治期以来、国語学と国文学が密接に交流してきた伝統は、いまでも保たれている。

2023年4月現在、本研究室は教授4名・准教授2名・助教1名の教員を擁し、古代から近現代までの日本文学の全時代をカバーできる体制を取っているが、さらにさまざまな領域の専門家をも非常勤講師として招聘し、開講科目の充実をはかっている。また2023年4月現在で、国文学研究室には大学院学生36名（内、外国人留学生6名）・学部学生45名が在籍し、その他、大学院外国人研究生2名を受け入れている。

本研究室は、長らく国文学研究の後継者養成に多大な貢献をしてきたが、中等教育の教員をも数多く世に送り出してきた。2012年度以来、本専修課程では「総合日本文学」の研究・教育という新たな試みを通して、中等教育の現場の教員たちとの交流を深め、また教員志望の学生達のための講義・演習を開講している。もとより本研究室は、研究者や中高教員のみならず、さまざまな分野に人材を送り出しており、また、数多くの海外からの留学生を、それぞれ母国の日本文学研究において指導的な役割を果たせるよう、指導を行ってきた。特に国際交流には力を入れており、多くの外国人研究員を受け入れると共に、教員が海外の学会の招待講演を引き受けている。「総合日本文学」は、留学生、あるいは一般社会に出てゆく卒業・修了者の存在に配慮した試みでもある。2013年度より、集中講義、あるいはA2タームを利用した「総合日本文学」を開講し、スタッフ全員の輪講で年度毎に統一テーマにそった講義を行っている。

上記のような研究教育活動のほか、卒業生を中心とする活動としては、東京大学国語国文学会があり、国語研究室と共同で、毎年、評議員会と大会（研究発表とシンポジウム）の開催、会報の発行を行っているほか、1924年（大正13）の創刊以来つねに国語国文学界をリードし続けてきた月刊研究誌『国語と国文学』の編集などの事業を行なっている。また国文学研究室独自の研究誌として『東京大学国文学論集』をも毎年刊行し、その内容はUTリポジトリで公開している。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

安藤 宏	教授	日本近代文学
鉄野 昌弘	教授	日本古代文学
高木 和子	教授	平安朝文学
佐藤 至子	教授	日本近世文学
木下 華子	准教授	日本中世文学
河野 龍也	准教授	日本近代文学

(2) 助教の活動

藤田 佑

在職期間 2020年4月～2023年3月

研究領域 日本近代文学

研究業績

（書籍出版物）[共著] 安藤宏・大原祐治・十重田裕一編、『坂口安吾大事典』、勉誠出版、79-80、82、216、223-224、299、323、336、394、496、594頁、2022.6

[単著] 藤田佑、『小説の戦後：三島由紀夫論』、鼎書房、320頁、2022.7

（論文）[学術雑誌] 藤田佑、『戦後文学の“マンネリズム”：『仮面の告白』とその周辺』、『国語と国文学』、99(4)、31-47頁、2022.4

(その他) [データベース・作品等] 藤田佑、「宮本徳蔵」、『日本近代文学大事典 増補デジタル版』、講談社・日本近代文学館、Japan Knowledge にてオンライン公開、2022.5
(非常勤講師) 武蔵大学、「日本近代文学」、2022.4～

阿部 真也

在職期間 2023 年 4 月～

研究領域 日本近代文学

主要業績

(論文) [学術雑誌] 「久生十蘭における戦後の終焉——『肌色の月』を中心に——」、阿部真也、『国語と国文学』100 巻 7 号、pp.110-124、2023.7

[学位論文] 「久生十蘭研究」、阿部真也、2024.1

(非常勤講師) 実践女子大学、「近代文学基礎講読 a・b」、2023

白百合女子大学、「近代文学演習 D」、2023

(学会・委員活動) [所属学協会] 東京大学国語国文学会、日本近代文学会、昭和文学会、日本文学協会、『新青年』研究会

[委員歴] 昭和文学会 会務委員 (2021.7～2023.7)、東京大学国語国文学会 評議員 (2023.4～)

(3) 内地研修員・外国人研究員

内地研究員

2022 年度 なし

2023 年度

大屋多詠子 (受入教員: 佐藤至子)

外国人研究員

2022 年度

Adam Lewis Kern (受入教員: 佐藤至子、2022 年 9 月～)

2023 年度

Adam Lewis Kern (受入教員: 佐藤至子、～2023 年 8 月)

陳童君 (受入教員: 河野龍也、2023 年 6 月～9 月)

学術振興会特別研究員

2022 年度

塚崎夏子 (DC2 受入教員: 高木和子)

古川諒太 (DC1 受入教員: 佐藤至子)

村瀬空 (DC1 受入教員: 木下華子)

2023 年度

塚崎夏子 (DC2 受入教員: 高木和子)

宮内理伽 (DC2 受入教員: 高木和子)

古川諒太 (DC1 受入教員: 佐藤至子)

村瀬空 (DC1 受入教員: 木下華子)

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2022 年度

「宮沢賢治文学の構造と、『銀河鉄道の夜』の世界」

「武者小路実篤の前期作品に対する考察—夏目漱石という視点から—」

「横光利一作品論—新感覚派の挑戦—」

「『源氏物語』における滑稽な人物」

「秀磨物から歴史小説へ—鷗外の「意地」とはなにか」

「『古今和歌集』恋の部の構造・構成の特徴」

「上代における玉と緒」

「『源氏物語』における浮舟の研究」

「直木賞選考における推理小説受容の素地 —木々高太郎を中心に—」

「大岡昇平『野火』論 ――極限状況に見る「罪の意識」の本質―」
「『源氏物語』明石一族と桐壺更衣一族」
「寛政の改革を描いた黄表紙―『世の中承知重忠』を中心に―」
「和歌における「散る桜」について―八代集を中心に―」
「川端康成『雪国』論」
「題詠の成立と発展―『堀河院御時百首和歌』を中心に―」
「覚一本『平家物語』の人物造型」
「「たけくらべ」論」
「稲垣足穂「一千一秒物語」論―物語の集積としての小説―」
「大江健三郎『万延元年のフットボール』論―「片眼」の語りが意味するもの―」
「「夢」と「うたたね」の詠歌史―式子内親王を中心に―」
「『とはずがたり』研究」
「『宇治拾遺物語』の表現―『今昔物語集』『古本説話集』との比較を通して―」
「中世和歌における天文現象の表現について」
「坂口安吾作品における〈語り〉の能力―「夜長姫と耳男」「桜の森の満開の下」を例に―」
「『源氏物語』後朝の時間表現」
「『春琴抄』における〈私〉の語りについて」

2023 年度

「柳田國男『雪国の春』論」
「夏目漱石『行人』論―病とケアの観点から―」
「森鷗外『青年』論―探究の行方―」
「「道成寺説話」の研究」
「「幻想」の創り方―牧野信一の中期作品を中心に―」
「漱石が描く恋と結婚―前期三部作について―」
「清水紫琴『こわれ指環』論―作品が掲げる理想の女性像について―」
「「死魚ひかるなり昼のしづけさ」―岡本かの子の幻想文学―」
「戦時下の太宰治―「日本」への憧憬と反発」
「坂口安吾「真珠」に関する諸考察」
「梶井基次郎の語りの方―一人称作品から」
「「日本人」の神の捉え方―他国の神話の比較を通じて―」
「市場通笑の黄表紙と教訓」
「梶井基次郎の表現と身体―「冬の日」前後の転換―」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

市川直人 「『源氏物語』における和歌・准拠の諸相」〈指導教員〉高木和子
岩井優士 「田村隆一論―『四千の日と夜』の成立」〈指導教員〉河野龍也
岩坪未矩 「『源氏物語』における女君の関係性」〈指導教員〉高木和子
常川太翼 「鴨長明後期作品研究―『無名抄』『発心集』『方丈記』について―」〈指導教員〉木下華子
中山貴絵 「彼岸表象の形成―川端康成前期作品において」〈指導教員〉河野龍也
野中成淳 「『平家物語』建礼門院譚の研究―四部合戦本・灌頂巻の問題を中心として―」〈指導教員〉木下華子
福井伸太郎 「「非人情」論」〈指導教員〉河野龍也
福田正浩 「川端康成作品研究―戦中期から『山の音』まで―」〈指導教員〉河野龍也
中鉢絢貴 「『草枕』論―「水死美人」画を視座として―」〈指導教員〉河野龍也
福嶋彩乃 「草双紙における擬人化の研究」〈指導教員〉佐藤至子
朴禅兒 「藤原定家初期百首研究―「初学百首」と「皇后宮大輔百首」を中心に―」〈指導教員〉木下華子

2023 年度

田中智章 「条件としての時間：古井由吉の最初期におけるテキスト群について」〈指導教員〉河野龍也
中山ひなた 「戦後文学における「神」表象―キリスト教的「神」表象を中心に―」〈指導教員〉河野龍也
吉田裕介 「『沙石集』の研究」〈指導教員〉木下華子
小川茉莉佳 「『懷風藻』吉野詩研究」〈指導教員〉鉄野昌弘

窪真咲 「『徒然草』研究——問う兼好を視座に——」〈指導教員〉木下華子

高妻秀多 「平安仮名日記の研究」〈指導教員〉高木和子

武元奈菜 「平安期における和歌と物語に関する研究」〈指導教員〉高木和子

波多野早紀 「兼好法師研究—『徒然草』と『兼好法師集』」〈指導教員〉木下華子

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

(甲)

北原圭一郎 「源氏物語と和歌」

〈主査〉高木和子 〈副査〉佐藤至子・木下華子・藤原克己・吉田幹生

山口一樹 「源氏物語論考 女房・女官・後見」

〈主査〉高木和子 〈副査〉佐藤至子・木下華子・河野龍也・藤原克己

福井拓也 「久保田万太郎研究」

〈主査〉安藤宏 〈副査〉高木和子・鉄野昌弘・佐藤至子・林廣親

(乙)

なし

2023 年度

(甲)

阿部真也 「久生十蘭研究」

〈主査〉河野龍也 〈副査〉安藤宏・鉄野昌弘・高木和子・浜田雄介

(乙)

中丸宣明 「物語を紡ぐ女たち 自然主義小説の生成」

〈主査〉安藤宏 〈副査〉鉄野昌弘・河野龍也・山田俊治・永井聖剛

1 1 日本史学

1. 研究室活動の概要

本専修課程は、1889 年、帝国大学文科大学に国史科がおかれて以来の長い歴史をもつ。文献史料を中心とする実証的学風を伝統としてきたが、近來では、これを基礎としながらも、歴史学の新しい動向を積極的にうけとめ、とりあつかう史料の範囲を意識的に拡張し、隣接諸分野—考古学・民俗学・経済学・法制史・政治学・社会学・美術史・国文学・建築史など—の成果を旺盛にとりいれて、多彩な研究方法の開拓を試みている。1994 年に名称を「国史学専修課程」から現行のものに改めた。

現在の教員数は、教授 5 名、准教授 2 名、助教 1 名で、古代・中世・近世・近現代のそれぞれに、原則として 2 名ずつの教員（助教を除く）を配置してきた。それに加え、多彩な非常勤講師の方々のご協力をえて、日本史の諸時代・諸分野を広くカバーし、教育・研究にとりくんでいる。また、大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻・日本史学コースにおいては、史料編纂所をはじめ、大学院総合文化研究科、法学政治学研究科、社会科学研究所の教員のご協力をえて、多様なカリキュラムを編成している。なお、多様な研究室事務を処理するため、副手 2 名を雇用している。

教養学部からの進学生は毎年 25 名内外で、卒業時には約 3 分の 2 が就職し、約 3 分の 1 が大学院に進学する。学生や大学院生が専攻する時代・分野は、各自の関心に応じて自由に選ぶことができる。

本研究室は、独自に『東京大学日本史学研究叢書』（1995 年創刊。6 冊まで刊行）と『東京大学日本史学研究室紀要』（1997 年創刊。現在 28 号まで刊行）を企画・出版している。『研究叢書』は、課程博士論文の成果をひろく公表するものであり、『研究室紀要』は、おもに研究室の教員・大学院生による調査・研究成果の発表の場となっている。

本研究室が、人文学科の他の研究室とともに担っている学会として、史学会がある。本研究室の教員は、例えば理事長として学会運営に参加し、編集委員として『史学雑誌』の編集に携わっている。また、毎年 11 月の史学会大会において、日本史関係のシンポジウムで発表したり、各時代別部会を組織したりするなどの活動を行っている。

近年、日本史学の専攻を希望する海外からの留学生が増加している。2022 年度においては、大学院に 6 名、研究生に 2 名、2023 年度においては、大学院に 6 名、研究生に 1 人が在籍していた。

最後に、研究室におけるハラスメントを許さない体制づくりに、意識的にとりくんでいることを強調しておきたい。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

野島（加藤）陽子	教授	日本近代史
大津透	教授	日本古代史
鈴木淳	教授	日本近代史
高橋典幸	教授	日本中世史
牧原成征	教授	日本近世史
三枝暁子	准教授	日本中世史
村和明	准教授	日本近世史

(2) 助教の活動

崎島達矢

在職期間 2020 年 4 月～2024 年 3 月

研究領域 日本近代史

主要業績

（書籍等出版物）[分担執筆]『経済の維新と殖産興業 一八五九～一八九〇』、崎島達矢、「第 11 章 五代友厚の事業展開と市場経済」、ミネルヴァ書房、2022.5、p.384 〈pp.304-331 担当〉

[単著]『都市の明治維新 大阪府による統治の成立と同業者組織』、崎島達矢、山川出版社、2023.11、p.304

（その他各種論著）[書評]「稲吉晃著『港町巡礼』」、崎島達矢、『週刊読書人』5 面、2023.1.6

[史料紹介]「豪徳寺文書「認可僧堂報告書」について」、崎島達矢、『区史研究世田谷』第 4 号、2024.2、p.46-58

(3) 外国人研究員

Thomas MONAGHAN 日本近代史（2022 年度）

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2022 年度

「日本興業銀行の資金調達構想—政府保証規定を中心に—」
「伊勢神宮の門前町宇治・山田における江戸から明治期にかけての神仏分離政策に関する考察」
「鎌倉・南北朝期における石清水八幡宮神人の強訴」
「永井柳太郎と中国ナショナリズム」
「大正末期立憲政友会における党路線の模索—普選後の政局をめぐって」
「近代オリンピックに対する陸軍の姿勢」
「中世武士の苗字継承の意義」
「普通選挙法と「選挙の管理化」」
「水防にみる近世淀川流域住民の主体性」
「藤原純友の乱の再検討」
「鎌倉後期幕府訴訟における「召文違背の咎」」
「古代太上天皇の創出」
「強訴の発動と展開—鎌倉期興福寺を事例に—」
「19 世紀姫路藩における固寧倉と地域の実情」
「治承・寿永の内乱の追討体制」
「豊臣政権末期の権力構造—「五大老・五奉行制」を中心に—」
「戦国期下野国衆の秩序意識」
「近世、北関東における長吏・非人の支配構造」

2023 年度

「中世後期美濃国における臨済宗妙心寺派の動静—別伝騒動を通じて—」
「昭和初年の沖縄県振興計画—大城兼義の構想を中心として—」
「昭和七年の東京市市域拡張」
「律令国家における情報伝達」
「鎌倉幕府 6 代将軍宗尊親王と北条氏」
「奥州惣奉行の存続期間と鎌倉幕府の奥州支配」
「大日本青少年団傘下の少年団における科学教育」
「永禄の変前後における三好氏の政治的位置」
「福岡藩における燃料政策の展開—石炭と木炭の連関に注目して—」
「太平洋戦争期における組織と情報から見る日本陸海軍」
「明治中期における薩摩閥と郷里との関係性」
「室町時代における権門間の贈与慣行—足利義教政権期を中心に—」
「中世地方武士と上位権力の関係」
「鎌倉時代における西園寺家と朝廷政治」
「日露戦後外交と外資導入—日仏関係の展開を中心に—」
「江戸新肴場魚問屋について」
「国民優生法に見る戦前期日本の優生政策」
「古代日本における対外交渉の代価について」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

久保堅大朗 「三河吉田藩と江戸藩邸社会」〈指導教員〉牧原成征
増田琴子 「近世幕府領における山林の規制と利用」〈指導教員〉牧原成征
鎌田宜伸 「南北朝期室町幕府の京郊支配と直臣編成」〈指導教員〉三枝暁子
谷本隆之 「戦国期京都の商人組織」〈指導教員〉三枝暁子
室伏奏楽 「摂関・院政期における受領制の変遷」〈指導教員〉大津透

2023 年度

WOLLASTON George 「中世春日社組織の成立と展開—興福寺との「一体化」をめぐって—」〈指導教員〉三枝暁子
岡島翔 「番方旗本の「軍役」と組織」〈指導教員〉牧原成征

金井遥 「石清水八幡宮寺による九州別宮支配と地域社会」〈指導教員〉高橋典幸
 小坂汐璃 「幕末期における「国産売捌」の展開—大野藩・福井藩を事例に—」〈指導教員〉鈴木淳
 南平春太 「中御門院政の成立と展開」〈指導教員〉村和明
 羽田友生 「南北朝内乱と室町幕府の軍事体制」〈指導教員〉高橋典幸
 守上知樹 「古代陸奥・出羽の財政と支配」〈指導教員〉大津透
 山中勇輝 「明治期における日本のメディアを通じた情報発信—日本政府、外国新聞、外国人ジャーナリストの
 清日露の戦時情報発信—」〈指導教員〉鈴木淳
 劉奕賢 「『仁政』の解体から見た近代天皇像の形成——なぜ明治政府が『仁政』を放棄したのか」〈指導教員〉
 野島（加藤）陽子

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

(甲)

谷川（鈴木）みらい 「明治前期官業払下げの政治経済史」
 〈主査〉鈴木淳〈副査〉野島（加藤）陽子・粕谷誠・西川誠・中西聡
 塚原浩太郎 「近代日本の選挙—空間とその組織について—」
 〈主査〉野島（加藤）陽子〈副査〉鈴木淳・季武嘉也・中北浩爾・千葉功
 章霖 ZHANG LIN 「戦間期における日本海軍の艦隊行動と地域社会」
 〈主査〉野島（加藤）陽子〈副査〉鈴木淳・保谷（熊澤）徹・土田宏成・大江洋代

(乙)

なし

2023 年度

(甲)

渡部亮 「無産政党の体制内化：1926-1947 年——「社会の発見」と「国家の再発見」——」
 〈主査〉野島（加藤）陽子〈副査〉鈴木淳・山口輝臣・有馬学・榎一江
 石坂桜 「日露戦後における帝国議会請願制度の展開」
 〈主査〉鈴木淳〈副査〉野島（加藤）陽子・五百旗頭 薫・山口輝臣・小林和幸
 佐藤大悟 「明治前期の地方史誌編纂」
 〈主査〉鈴木淳〈副査〉野島（加藤）陽子・箱石大・山口輝臣・宮間純一
 下田桃子 「近世の将軍家菩提寺と幕府・武家—増上寺を事例として—」
 〈主査〉牧原成征〈副査〉村和明・荒木裕行・朴澤直秀・上野大輔

(乙)

なし

1 2 中国語中国文学

1. 研究室活動の概要

中国語中国文学研究室（通称、中文研究室）は、1877 年東京大学設立に際し創設された和漢文学科に始まる。その後、和漢両文学科の分離、帝国大学文科大学への改組などを経て、1904 年哲史文三学科制への移行にともない、漢学科が支那哲学、支那文学に分かれ、学科制度の変更によって支那哲学支那文学科となった時期を挟みつつ、現在まで続いている。中国語中国文学の名称は、1953 年新制東京大学大学院人文科学研究科に設けられた専攻に始まる。

研究領域は、中国語学と中国文学の 2 分野に大別され、さらに、中国語学は古漢語（古典中国語）と現代中国語、中国文学は古典文学と近現代文学の領域にそれぞれ分かれる。語学の研究対象には、文字学、音韻学、意味論、文法論、語用論などが含まれ、文学の研究対象には詩詞、散文、小説、演劇のほか、台湾文学、香港文学、中国の少数民族文学、さらに最近では映画、テレビドラマなどが含まれる。ほぼ 3000 年の間に作られたすべての言語テキストが研究の対象である。教員数は、教授 3 名、専任講師 1 名であるが、大学院人文社会系研究科における中国語中国文学専門分野においては、東洋文化研究所の教員 2 名、大学院総合文化研究科の教員 3 名が教育に参加している。学生数は、2022 年度は学部学生 6 名、大学院修士課程 9 名、博士課程 10 名、研究生 2 名、2023 年度は学部学生 5 名、大学院修士課程 12 名、博士課程 8 名、研究生 6 名で、多様な研究テーマに取り組んでいる。近年留学生の数も増加し、上記のうち中国大陆からの留学生が 16 名にのぼっている。留学生の増加は授業のあり方にも影響を与え、それぞれに異なる文化的背景を持った学生が自由に意見を交換しつつ、ともに学ぶ環境が実現している。また国内における研究発表や交流の機会も豊富である。2017 年度からは年に 1 度、学生の研究発表を中心に、京都大学中国語学中国文学研究室と合同で研究会を開催し、交流を図っている。

国際交流は極めて盛んで、日本人学生の中国・台湾・香港・シンガポール・アメリカへの留学も多く、ほとんどの学生が中国政府奨学金による長期の留学や私費による短期留学を経験している。教員も短期長期で中国語圏のみならず韓国、欧米へ出向き、調査研究や学会活動を行っている。諸外国からも毎年多くの訪問客を迎えるほか、常に数名の外国人研究員が滞在し、様々な研究に従事している。研究室では、これら外国からの客人による講演や研究報告がしばしば催され、学生との交流が活発に行われている。また、国内外から多くの研究者を招き、国際シンポジウムやワークショップを開催するほか、学内での公開講演会等でも広く発信を行っている。

中文研究室では、1998 年に研究室紀要を創刊した。そこには教員・学生による最新の研究成果とともに、外国人研究者との交流の記録が掲載されている。紀要は 2022 年度第 25 号、2023 年度第 26 号を UT Repository で公開している。

(<https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/>)

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

大西 克也 教授（中国古典文法、文字学）

齋藤 希史 教授（中国古典詩文）

鈴木 将久 教授（中国近現代文学）

(2) 助教の活動

佐高 春音

在職期間 2021 年 4 月～2023 年 3 月

研究領域 中国古典小説、明清白話小説

主要業績

（論文）佐高春音、「试论映雪草堂本《水浒传》之补刻面貌——以圈点为主要线索」、『第 21 届中国古典小说戏曲文献暨数字化国际研讨会 会议论文集』、2022.8

佐高春音、「映雪草堂本『水浒传』における補刻の様相——圈点を主な手掛かりとして」、『東京大学中国語中国文学研究室紀要』、2022.11

（その他各種論著）[解説] 佐高春音、「『水浒传コレクション』『水浒传全本』（総合図書館蔵本）解題」、『東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門（U-PARL）2020-2021 年度協働型アジア研究「東京大学所蔵水浒传諸版本に関する研究」成果報告集』、2022.8

[解説] 佐高春音、「水滸伝コレクション」『水滸傳全本』（文学部蔵本）解題、『東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門（U-PARL）2020-2021 年度協働型アジア研究「東京大学所蔵水滸伝諸版本に関する研究」成果報告集』、2022.8
[講演・口頭発表等] [学会発表] 佐高春音、「试论映雪草堂本《水浒传》之补刻面貌——以圈点为主要线索」、第21届中国古代小说戏曲文献暨数字化国际研讨会、2022.8.29

市原 靖久

在職期間 2023 年 4 月～現在

研究領域 中国古典文法

主要業績

（書評）「日本中国語学会編『中国語学辞典』古典語文法関連」、『中国語学』第 270 号、pp16-28、2023.10

（共同研究）「上古中国語指示詞の体系—叙述類型と主題構造—」、市原靖久、研究活動スタート支援、23K18645、東京大学、2023.8.31～2025.3.31

（学会・委員活動）[委員歴] 日本中国学会、幹事、2023.4～

(3) 外国人教員の活動

王 俊文（専任講師）

在職期間 2021 年 4 月～2024 年 3 月

研究領域 中国近現代文学、日中比較文学

主要業績

（論文）「日本戦後大学中文教育草創期浅窺—以東大教養学部首位中文専任講師工藤篁為中心」、『上海文化交流發展報告』（2022）、pp.126-143、2022.4

「丸山昏迷の『北京』—丸山昏迷の生平及其筆下の北京」、『周氏兄弟研究』第 1 号、pp.175-190、2023.3

「信念」—日本戦後民間中文教育視野中的藤堂明保、『上海文化交流發展報告（2023）』 pp.144-159、2023.4

「純粋な信仰」：丸山昏迷の思想と大正民主主義、『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第 26 号、pp.35-51、2023.11

「人与鬼的糾葛—論電影『鬼子来了解』的内外」、文教大学『言語と文化』第 36 号、pp.177-191、2024.3

(4) 外国人研究員・内地研究員

外国人研究員

裴 亮：武漢大学文学院准教授

研究題目—日本における中国新詩の翻訳と受容に関する研究——1920 年代を中心に

研究期間—2019 年 3 月 1 日～2020 年 8 月 31 日

苗 壯：遼寧大学文学院副教授

研究題目—日本における簡牘學と秦漢期書写体制の研究——出土小学書を中心として——

研究期間—2019 年 9 月 1 日～2020 年 10 月 28 日

邵 琛欣：陝西師範大学講師

研究題目—上古中国語における動詞句の意味・構造と具格を表す「以」前置詞句の語順に関する研究

研究期間—2019 年 9 月 20 日～2020 年 7 月 20 日

楊 中薇：コロンビア大学博士課程

研究題目—失われた地図：晩清のスパイ物語及び 20 世紀初期中国小説家の地理的想像における日本の役割

研究期間—2020 年 1 月 2 日～2020 年 8 月 31 日

張 春田：華東師範大学中文系副教授

研究題目—Subjectivity and objectivity of Chinese revolution discourses. 1899-1928

研究期間—2020 年 1 月 21 日～2020 年 4 月 21 日

内地研究員

田中 雄大：日本学術振興会 特別研究員（DC1）

研究題目—中国語文学における「現代主義」的思考様式の形成と変遷——穆時英・戴望舒を起点に

研究期間—2019 年 4 月 25 日～2022 年 3 月 31 日

三村 一貴：日本学術振興会 特別研究員（DC2）

研究題目—上古漢語モダリティ研究

研究期間—2020 年 4 月 24 日～2022 年 3 月 31 日

片倉 峻平：日本学術振興会 特別研究員（DC2）

研究題目—用字避複を中心とした、上古中国語の用字法に関する研究

研究期間—2021 年 4 月 28 日～2023 年 3 月 31 日

福長 悠：日本学術振興会 特別研究員（PD）

研究題目—中国における左翼文学とモダニズム文学の交錯——張天翼を中心に——

研究期間—2020 年 4 月 24 日～2023 年 3 月 31 日

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2022 年度

「史鉄生の知識青年時代に対する印象について」

「王維律詩の方法—典故と詩語の利用から—」

「茉莉園詩派の『茉莉花』詩に関する一考察 —艶詩の potentiality に着目して—」

2023 年度

「『列女伝』からみる女性像：劉向のメッセージを読み解く」

「謝靈運「入彭蠡湖口」詩にみられる表現の特徴について」

「漢代における『司馬法』の受容について」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

耿沛涵 「唐代における詠物詩の変化について」〈指導教員〉齋藤希史

2023 年度

YE Xiaotong 「上古中国語に「形容詞」という文法範疇はあったか」〈指導教員〉大西克也

胡睿 「戦時下の徐遲における「現実」を論ずる：詩と報告文学を中心に」〈指導教員〉鈴木将久

顔小凡 「二陸における望郷—贈答詩を起点として—」〈指導教員〉齋藤希史

裴杰 「和訳『紅樓夢』の圏域と美の意識—昭和時期を中心として—」〈指導教員〉鈴木将久

楊乃馨 「『玉臺新詠』における綺語の研究」〈指導教員〉齋藤希史

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

(甲)

王旭東 WANG Xudong 「六朝小説の研究—鬼怪観の諸相、外来文化の受容と変容、祥瑞思想との関係—」

〈主査〉大西克也 〈副査〉池澤優・戸倉英美・佐野誠子・佐々木聡

笠見弥生 「凌濛初「二拍」の研究」

〈主査〉大木康 〈副査〉齋藤希史・鈴木将久・上原究一・鈴木陽一

(乙)

なし

2023 年度

(甲)

宮島和也 「上古中国語における書記言語の地域的変異と通時的変化：戦国秦漢時代出土文献を中心に」

〈主査〉大西克也 〈副査〉齋藤希史・木村英樹・松江崇・戸内俊介

張燁萌 ZHANG Yemeng 「日本児童文学の中国における受容——八十年代以降を中心に」

〈主査〉鈴木将久 〈副査〉王俊文・藤井省三・成實朋子・楊炳菁

笠井直美 「中國近世白話文學における秩序と逸脱 —『水滸傳』を中心として」

〈主査〉大木康 〈副査〉齋藤希史・田口一郎・上原究一・小松謙

(乙)

なし

13 中国思想文化学

1. 研究室活動の概要

中国思想文化学専修課程の学科としての淵源は、1877（明治10）年の本学の創立時にまでさかのぼることができる。専修課程としては、当初の「支那哲学」から、「中国哲学」、「中国思想文化学」と2度の名称変更を経て現在に至っている。1995（平成7）年に大学院が部局化されると、人文社会系研究科の「アジア文化研究」専攻「東アジア」コース「東アジア思想文化」専門分野と一体のものとして、文学部の中国思想文化学研究室が存在する形態となった。なお、大学院のほうは、2009（平成21）年からは「アジア文化研究」専攻「アジア文化」コース「東アジア思想文化」専門分野という位置付けとなっている。

研究の分野は、中国の殷周時代～中華人民共和国に至る思想史で、方法的には哲学・哲学史的研究だけでなく、社会史を背景にした思想史的研究、中国文化と他文化との比較文化論的研究、など多岐にわたっている。2022（令和4）年度の教員は教授3名、助教1名で、2023（令和5）年度は教授3名、助教1名であり、他に非常勤講師を4～5名委嘱した。また、本学部次世代人文学開発センターの特任教員や中国語担当外国人教員にも、学生の教育に携わってもらっている。大学院は、基幹講座としての文学部の本研究室と、協力講座としての東洋文化研究所東アジア思想・宗教分野とからなり、他に教養学部（総合文化研究科）などから若干名の教員の協力を仰いでいる。1992（平成4）年度より毎年2名のティーチング・アシスタントを大学院生から募り、学部学生の手ほどきをしてもらっている。なお、助教1名体制にともない、1996（平成8）年度からは嘱託1名を委嘱している。

外国人研究員については、毎年数名を受け入れている。留学生も積極的に受け入れており、東アジアを中心に2022（令和4）年度は計19名（博士課程12名、修士課程1名、研究生6名）が在籍、2023（令和5）年度は計22名（博士課程15名、修士課程3名、研究生4名）が在籍、チューター制度もうまく噛みあって学生間の国際交流が盛んである。日本人大学院生は、博士課程進学後に大部分の者が海外に留学する。また、博士課程在籍中に日本学術振興会特別研究員に選抜される事例も多い。後掲のように、大学院満期退学後に博士論文を提出する者が毎年1～3名いる。

研究室全体で支えている学会として中国社会科学学会があり、役員として運営に参加している。また、大学院生を中心に「中国哲学研究会」（1973（昭和48）年～）が組織されて月例会を開いており、1990（平成2）年より雑誌『中国哲学研究』を発行して助手・助教・大学院生の研究発表の場としている。

本研究室では、漢籍の語句用例検索ソフト導入など、従来から研究・教育活動におけるコンピュータの利用を積極的に図ってきた。技術の日進月歩にあわせて検索環境を随時整備し、従来の書冊漢籍の活用とともに教育の高度化を図っている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

横手 裕 教授 専門分野 道教史・中国三教交渉史

陳 捷 教授 専門分野 中国書籍史・東アジアの書籍交流史・日中文化交流史

(2) 助教の活動

平澤 歩 助教 専門分野 儒教史・五行思想史

在職期間 2021年4月～現在

主要業績

（書籍出版物）[単著]『漢代経学に於ける五行説の変遷』、平澤歩、汲古書院、iii, 376p、2022.11

（論文）[学術雑誌]「劉歆の三統暦と日食説」、平澤歩、日本儒教学会報第八号、2024.2

（その他各種論著）[書評]「湯浅邦弘編著・ミネルヴァ書房『よくわかる中国思想』」、平澤歩、中国研究月報77巻6号、pp. 20-21、2023.6

[総説・解説（商業誌）]「周易」、平澤歩、じせデジリーダー（国会図書館モバイルリーダーアプリ）、2023.12

[総説・解説（その他）]「陰陽五行」、平澤歩、じせデジリーダー（国会図書館モバイルリーダーアプリ）、2023.12

（講演・口頭発表等）[シンポジウム・ワークショップ パネル（指名）]「暦の「正しさ」は何故必要なのか？—劉歆の三統暦と日食説—」、平澤歩、日本儒教学会2023年度大会、2023.5.28

[その他]「麒麟の意味するもの—瑞獣と王朝の徳運」、平澤歩、古代中国の祥瑞文化と図像、2023.12.17

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2022 年度・2023 年度

なし

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

岩田燦 「戦国時代における「地」と「天地」」〈指導教員〉中島隆博

松原えみ 「丘浅次郎の衛生観についての考察 ―優生学を中心として」〈指導教員〉高山大毅

2023 年度

田九七 「東林書院政治関与論再考」〈指導教員〉陳捷

新本果 「宋儒の「家」概念―王安石と朱熹の比較を通して」〈指導教員〉小島毅

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

(甲)

王雯璐 WANG Wenlu 「明清時代におけるカトリック漢訳教理書の研究」

〈主査〉陳捷 〈副査〉横手裕・中島隆博・川原秀城・井川義次・新居洋子

夏雨 XIA Yu 「羅教の新しい歴史―野火焼けども尽きず」

〈主査〉小島毅 〈副査〉横手裕・上原究一・田中有紀・森由利亜

(乙)

なし

2023 年度

(甲)

蔣薰誼 Chiang Hsun-Yi 「清代における徂徠学の受容」

〈主査〉小島毅 〈副査〉陳捷・石井剛・高山大毅・藍弘岳

(乙)

なし

1 4 インド哲学仏教学

1. 研究室活動の概要

本専修課程は、1879 年、和漢文学科に「仏教典籍」の講義が設けられたことを源流とし、1916 年に「印度哲学」の講座が誕生したことに端を発する。本専修課程では、インドの哲学・宗教思想、およびインドにおいて成立・展開し、またアジア諸地域に伝播して、それぞれに独自の展開を遂げてきた仏教の研究・教育が、包括的・有機的な展望のもとに行われている。2023 年度現在、教員は教授 1 名、准教授 3 名である。

大学院人文社会系研究科においては、本専修課程は、アジア文化研究専攻の中のインド文学・インド哲学・仏教学専門分野に対応し、その一部を構成する。そこでは、インド語インド文学専修課程や東洋文化研究所の関連部門と連携しながら、より広い視座に立って、インドの諸思想及び仏教についての専門的な研究・教育が進められている。

本専修課程への教養学部からの進学者は、毎年 3～4 名ほどであり、学士入学者も 1～2 名ほどいる。学部卒業生の半分近くは、大学院のインド文学・インド哲学・仏教学専門分野に進学するが、一般企業に就職する者も少なくない。また、他専修課程や他大学（外国の諸大学を含む）を卒業して同専門分野に入ってくる者も稀ではない。教育上は、学生たちがそれぞれに、サンスクリット語・パーリ語・チベット語・古典中国語などの修得を基礎として、関心を持つ問題を主体的に追求していくことを基本方針としており、本専修課程および当該専門分野において取り扱われる研究対象や研究方法は極めて広範囲に亘る。しかし、研究方法に関して文献学的な厳密さが要求されるという点は、共通している。そのために、卒業論文の代わりに特別演習を取って卒業することも認めている。これは教員の指導の下に指定された基本的な原典を自ら読解し、基本的な読解力を養おうというものである。

本専修課程は、インド語インド文学専修課程と共同で、年に 4 回研究例会を開催している。そこでは、大学院の博士課程在学などによる研究発表、国際会議等で最新成果を発表した教員による帰朝報告、海外留学者の体験報告などが行われており、研究・教育上の意義は大きい。また、本研究室における諸研究を公表する媒体として、1993 年以来、年に 1 回、『インド哲学仏教学研究』を刊行している。

本専修課程に関わるインド哲学ならびに仏教学の研究は、それ自体が高度の国際性を帯びていることもあって、研究者間の国際交流は極めて活発である。2022 年度および 2023 年度は、中国の清華大学との学生交流のシンポジウムに教員と大学院生が参加している。また、数名の留学生を海外に送り出すとともに、海外から多くの留学生を迎えている。さらに、内外の諸学会との繋がりも緊密である。中でも、海外にも多数の会員を持つ日本印度学仏教学会は、1951 年の創立当初より本研究室との関係が深く、事実上、学会運営においても中核的役割を担い続けて今日に至っている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

教授	下田 正弘	専門分野	インド・東南アジア仏教	在職期間	1994 年 10 月～2023 年 3 月
教授	養輪 顕量	専門分野	東アジア・日本仏教	在職期間	2010 年 4 月より現在に至る
准教授	高橋 晃一	専門分野	インド・チベット仏教	在職期間	2017 年 4 月より現在に至る
准教授	加藤 隆宏	専門分野	インド哲学	在職期間	2018 年 4 月より現在に至る
准教授	八尾 史	専門分野	インド仏教（経・律）	在職期間	2023 年 4 月より現在に至る

(2) 助教の活動

一色 大悟 専門分野 仏教学

在職期間 2020 年 4 月～2022 年 12 月

主要業績

（論文）[学術雑誌] 一色大悟「存在論のもう一つの系譜：説一切有部・衆賢・体減用減論争一探険・哲学叢林

(2)」、『未来哲学』4、137-155 頁、2022.7

（その他各種論著）[速報・短報・研究ノート等] 一色大悟「東京帝国大学仏教青年会をめぐる雑記—あるいは近代仏教と近代日本の現場」、『仏教文化』61、83-100 頁、2022.12

[その他] 一色大悟「もう一つの系譜、未知の存在論一探険・哲学叢林(2)」、『未来哲学』4、156-176 頁、2022.7

[その他] 一色大悟・山内志朗・坂本貴志・護山真也・小村優太「討議 もう一つの仏教を掘る一探険・哲学叢林 (2)」、『未来哲学』4、177-194 頁、2022.7

(講演・口頭発表等) [口頭発表 (一般)] 一色大悟「五位七十五法研究史」、第 66 回国際東方学会議シンポジウム V「仏教思想は甦るか——バウッダコーシャ・プロジェクトを総括する」、2022.5.21

[口頭発表 (一般)] 一色大悟「東京帝国大学における禅僧たちの近代仏教学—とくに原始仏教への視線に注目して—」、Panel 2 ``Transformation from Chinese Chan to Japanese Zen: The Unfolding of Chan/Zen in Japan and Its Research Characteristics | 從中華禪到日本禪：禪在日本的展開及其研究特色" in International Conference ``How Zen Became Chan: Pre-modern and Modern Representations of a Transnational East Asian Buddhist Tradition、2022.7.30

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等] 一色大悟「存在と歴史：仏教思想史に対するアビダルマという視点」、国際仏教学大学院大学「仏教学特殊講義」、2022.7.6

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等] 一色大悟「文京区における近現代の仏教史跡について」、文京いきいきアカデミア第 8 期 1 年次 2 学期第 2 回、2022.10.12

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等] 一色大悟「本郷を歩く」、東京大学東アジア藝文書院第 4 回「部屋と空間プロジェクト」研究会、2022.11.25

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等] 一色大悟「ブッダへのまなざし—俱舎学から近現代日本仏教へ—」、大正大学総合仏教研究所公開講座、2022.12.20

(受賞) 一色大悟、日本印度学仏教学会賞、2022.9

一色大悟 (研究代表者)・柳幹康・八尾史・笠松和也・釋道禮、日本宗教研究諸学会連合 研究奨励賞、2022.12

(社会貢献活動) 一色大悟「文京区における近現代の仏教史跡」講師、公益財団法人文京アカデミー、2022.6.3～24

(非常勤講師) 中央大学文学部、「印度哲学史」、2020.4～2022.9

(学会・委員活動) 国内、仏教思想学会、幹事、2022.4～

国内、対法雑誌刊行会、事務局長、2020.2～

崔 境眞 専門分野 チベット仏教

在職期間 2023 年 4 月～2024 年 3 月

主要業績

(論文) [学術雑誌] 崔境眞「13 世紀のチベット人学匠による刹那論証の理解」、『日本チベット学会会報』69、25-38 頁、2023.10

[学術雑誌] CHOI Kyeongjin 「Where does the definition come from? Phya pa's understanding of relation ("brel ba)」、『Journal of Indian and Buddhist Studies』72(3)、1117-1122 頁、2024.3

[口頭発表 (一般)] 崔境眞「チャパの結び付き ("brel ba) の定義」、日本印度学仏教学会第 74 回学術大会、オンライン、2023.9.2

(非常勤講師) 国際仏教大学院大学、「古典チベット語文法」、2023.4～2024.3

成蹊大学文学部、「地域文化研究 C」、2023.10～2024.3

(学会・委員活動) 日本西藏学会々報 70 号投稿論文査読、2024.2～3

(3) 外国人研究員・内地研究員

王海燕 (陝西師範大学宗教研究中心副研究員) 2022 年 10 月～2023 年 9 月

大須賀茂 (シートン・ホール大学教授) 2023 年 10 月～2024 年 3 月

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2022 年度

「仏教の瞑想とキリスト教霊性との出会い—空と神、認識と存在論を巡って」

他、特別演習 1 名

2023 年度

特別演習 2 名

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

伊藤有佑 「菩提分法の研究——パーリ注釈文献を中心に——」(指導教員) 下田正弘

木村和樹 「シャーキャブッディのアポーハ論」〈指導教員〉高橋晃一

2023 年度

赤塚智弥 「中世東寺教学における即身成仏思想の形成」〈指導教員〉蓑輪顕量

黄敏而 「『大乘莊嚴經論』の順決択分における修習について」〈指導教員〉高橋晃一

小林遼太郎 「澄観『行願品疏』の研究」〈指導教員〉蓑輪顕量

宋東奎 「『観経疏頌要記破文』の研究」〈指導教員〉蓑輪顕量

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

(甲)

余新星 YU Xinxing 「夢窓疎石の研究」

〈主査〉蓑輪顕量 〈副査〉下田正弘・高橋晃一・菊地大樹・柳幹康

(乙)

なし

2023 年度

(甲)

佐久間祐惟 「虎関師錬の禅思想の総合的研究」

〈主査〉蓑輪顕量 〈副査〉八尾史・菊地大樹・柳幹康・小川隆

(乙)

なし

15 インド語インド文学

1. 研究室活動の概要

インド亜大陸では三千年来数多くの言語が用いられ、それらの言語によって伝えられた文献も多様を極めている。そのうち、本専修課程（略称「印文」）では、明治34（1901）年に「梵文学講座」が開設されて以来（梵語学の開講は、明治18（1885）年に遡る）、サンスクリット語を中軸とする古期・中期インド・アールリア語をもって著された文献の研究がなされてきた。サンスクリット語はインドの雅語として古典時代の宗教、文学、哲学、科学などあらゆる分野の文献に用いられたものであり、古典インド文化の精華はサンスクリット語によって伝えられたといっても過言ではない。本専修課程でサンスクリット語の学習を必須とするのもこのためである。平成8（1996）年度からは、これも紀元前にさかのぼる文献を有し、長い歴史と内容を誇るドラヴィダ系のタミル語タミル文学の授業も設けられた。さらには、プラークリット語各種やヒンディー語も学べる設計となっている。

本専修課程は、これらの言語をはじめとするインド諸語の十分な知識とインド古典籍の精密な読解の基礎に立って、広くアジア諸地域に伝播してゆくインド古典文化を考究することを目標としている。したがって、本専修課程でいうインド文学とは、詩歌・戯曲・説話など狭義の文学作品だけでなく、ヴェーダ聖典、マヌ法典・実利論などの学術書、歴史書、占星術・医学・建築などの科学文献、さらには仏教・ジャイナ教・ヒンドゥー教などの宗教文献なども含むものである。

本専修課程と密接な関係にあるインド哲学仏教学専修課程とは、大学院レベルではインド文学・インド哲学・仏教学専門分野として、両方で単一のコースを形成している。学部・大学院ともに、さまざまな行事を共同で行い、インドの文学と言語について学ぶ機会を豊かなものにしていく。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

梶原三恵子（サンスクリット語学文学）

非常勤講師

伊澤敦子、宮本城、吉水清孝

(2) 助教の活動

高橋健二

在職期間 2022年4月～2024年3月

研究領域 古典サンスクリット文学

主要業績

（書籍等出版物）[分担執筆]「初期ヨーガ説の身心論とその思想的背景」、『ブラフマニズムとヒンドゥイズム 2：古代・中世インドの宗教と実践』、法蔵館、pp. 405-428、2022.12

（論文）[学術雑誌]『『マハーバーラタ』の神話的構造をめぐって：沖田瑞穂著『マハーバーラタ、聖性と戦闘と豊穡』みずき書林（2020）書評論文（1）』、『南アジア古典学』18巻、pp. 121-145、2023.7

[学術雑誌]「The "Mental" (Mānasa) Self and Mānasa the Creator in the Bhṛgubharadvājasamvāda (Mahābhārata 12.175-185)」、『Journal of Indological Studies』34/35、pp. 15-37、2023.12

[学術雑誌]「The Double Cleansing of Yudhiṣṭhira's Sorrow/Sin: A Study of the Śāntiparvan and the Āśvamedhikaparvan of the Mahābhārata」、Journal of Indian and Buddhist Studies 72 (3)、pp. 973-978、2024.3

[大学、研究機関紀要]「カルナとアルジュナ、そして『マハーバーラタ』研究のこれから：川尻道哉『カルナとアルジュナ-『マハーバーラタ』の英雄譚を読む』書評論文」、高橋健二、川村悠人、『比較論理学研究』21巻、pp.65-112、2024.3.25

（その他各種論著）'Draupadī's Polyandry Revisited'、Studies in Indian Philosophy and Buddhism 21、pp. 15-26、2023.3

[速報、短報、研究ノート等（大学、研究機関紀要）]『『マハーバーラタ』インド南方伝承に関する研究動向：Mahadevan 説についての覚書』、『インド語インド文学拾遺2024』、pp.15-30、2024.3

（講演・口頭発表等）[口頭発表（一般）] 'Are the Teachings on Hell in the Śivadharmottara Śaiva Enough? The Seventh Chapter of the Śivadharmottara and Its Anonymous Commentary', 34. Deutscher Orientalistentag. Special Panel: The History of Śaivism through Textual and Material Evidences、2022.9.13

[その他] 'Physiological Teachings of Yoga as Found in the Mahābhārata', Online Lecture. SOAS Centre of Yoga Studies、2022.11.15

- [シンポジウム・ワークショップ パネル (公募)] 「シヴァ教における地獄観：『シヴァダルモッタラ』第7章の研究」、ブラフマニズムとヒンドゥイズム—南アジアの宗教と社会の連続性と非連続性 第9回シンポジウム、2023.2.21
- [その他] ‘What Can We Learn from the Mahābhārata? Outsiders, Kingship, Priesthood and the Making of the Hindu World’, *Myth and Science in Ancient World: Novel Research from Eurasia*、2023.5.2
- [口頭発表 (一般)] ‘The Path to Paradise Begins in Hell: A Study of the 7th Chapter of the Śivadharmottara’, The Conference of Heavens and Hells: Life after Death in Religious Traditions from South Asia、2023.7.17
- [口頭発表 (一般)] 『マハーバーラタ』第12-14巻成立史再考、高橋健二、第74回日本印度学仏教学会、2023.9.2
- [公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等] 『マハーバーラタ』における落ち穂拾いの実践、北海道大学、2023.9.8
- [公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等] 『マハーバーラタ』写本研究の最前線、HMC オープンセミナー、2024.2.9
- [シンポジウム・ワークショップ パネル (公募)] 『マハーバーラタ』の口頭伝承的特徴について、公開シンポジウム 『マハーバーラタ』研究の最前線—伝承の形成と物語の展開—、2024.3.26
- (受賞) Professor Ram Karan Sharma Award (International Association of Sanskrit Studies)、2023.1
- (共同研究) [科学研究費助成事業 研究活動スタート支援] 「布施が結ぶ社会：『マハーバーラタ』第13、14巻の研究」、日本学術振興会、2022.8～2024.3
- [会議開催催費公募] 「第14回国際インド学大学院生研究シンポジウム」、中辻創智社、東京大学人文社会系研究科、2023.6～2024.3
- [学術活動支援] 「第14回国際インド学大学院生研究シンポジウム」、三島海雲記念財団、2023.6～2024.7
- [公募研究 A] 「古代インド叙事詩『マハーバーラタ』シャーラダー系写本の研究」、東京大学ヒューマン・インターセンター、2023.10～2024.9
- (社会貢献活動) [講師] 「サンスクリット語りハビリ講座」、仏教サロン京都、2022.10～2023.1
- [コメンテーター] 「ことばが力をもつ仕組み～祝詞、真言、陀羅尼（講演者：川村悠人）」、講演会、仏教サロン京都、2022.10.22
- [コメンテーター] 「「バカ」（馬鹿、莫迦）のルーツと仏教漢語の成立（講演者：林辰達）」、仏教サロン京都、2023.1.22
- [コメンテーター] 「あなたは誰の子？インド大叙事詩『マハーバーラタ』×古典ヒンドゥー家族法（講演者：谷口力光）」、講演会、仏教サロン京都、2023.2.19
- [講師] 「ヨーガってなに？ほとんどの日本人が知らないちょっとディープなヨーガの話」、セミナー・ワークショップ、Yogiconline（オンライン講座）、2023.3.24
- [講師] 「連続講座 ヨーガの歴史をたどる！」、セミナー・ワークショップ、Yogiconline（オンライン講座）、2023.4～8
- (学術貢献活動) [企画立案・運営等] 学会・研究会等、「Mapping Medieval Śaiva Centres with non-Indic Materials」、張本研吾 小倉智史 高橋健二、2022.8.6～7
- [企画立案・運営等] 学会・研究会等、「The Conference of Heavens and Hells: Life After Death in Religious Traditions from South Asia」、Florinda De Simini; Kenji Takahashi; Kengo Harimoto、2023.7.17～18
- [その他] 学会・研究会等、「アヌギーターを読む（講読）」、北海道大学インド思想研究会、2023.9.6～8

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2022年度

「マヌ法典における女性観」

2023年度

特別演習1名

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2022年度・2023年度

なし

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

(甲) (乙)

なし

2023 年度

(甲)

谷口力光 「中世・初期近代ヒンドゥー相続法における「子ども論」」

〈主査〉梶原三恵子 〈副査〉加藤隆宏・高橋晃一・沼田一郎・岩崎陽一

鈴木知子 「12 世紀カシミールの王統紀 *Rājatarāṅgiṇī* を再検証する—作品の社会的背景とテキストの成立経緯—」

〈主査〉梶原三恵子 〈副査〉加藤隆宏・高橋晃一・水野善文・宮本久義

(乙)

なし

16 イスラム学

1. 研究室活動の概要

イスラム学専修課程は、イスラム地域の思想・文化を研究する独立した学科として、1982年わが国で初めて設置された。一口にイスラム学といってもその対象範囲は広い。地理的には、中近東はもちろん東は中央アジア、インド亜大陸、東南アジア、東アジア、西は北アフリカ、スペインまでにも及び、時代的にはイスラム発生期から現代のイスラム思想の動向までも含んでいる。2022年度は教授2名がそれぞれ近代より前の古典期イスラムの法学や伝承、シーア派思想の、2023年度は教授1名、准教授1名がそれぞれシーア派思想、神学の文献研究を専門にし、それに加え古典研究をもとにした現代イスラム理解を念頭に置きつつ研究をすすめている。上記の広大な研究領域をカバーし、また歴史分野や現代研究との共同研究の可能性を探るために、南アジア・イスラム史研究、前近代アラブ・イスラム史、現代アラブ政治、イラン思想、アラビア語の領域に関して学外教員および非常勤講師の協力を仰いでいる。

本専修課程に対応する大学院人文社会系研究科の専門分野はアジア文化研究専攻（西アジア・イスラム学）イスラム学専門分野である。大学院では特に同じコースに属するアジア史専門分野と連携しつつ、さらには先端科学技術研究センターの教員1名の協力を得て、より包括的なイスラム理解を求め研究・教育活動が行われている。

教養課程から進学する学生は例年1～2名前後である。学部及び大学院の在籍数は、2022年度は8名、2023年度は9名である。他大学からの学士入学者もいる。授業は基本的にアラビア語・ペルシア語の文献読解を通じて、神秘主義・法学・神学・哲学などの学問分野の理解を深めるという方向で行われる。だが、その枠組みにとらわれず学生が主体的にイスラム理解の視座を新たに設定し研究することが奨励されており、言語にかぎっても、必ずしもアラビア語・ペルシア語に自らのフィールドを限定する必要はない。本専修課程から大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻イスラム学専門分野に進む学生は毎年、1、2名程度。それ以外にも他大学からの入学希望者もいる。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

2022年度

教授 柳橋博之 専門分野 イスラーム法・預言者伝承

教授 菊地達也 専門分野 シーア派思想史

2023年度

教授 菊地達也 専門分野 シーア派思想史

准教授 松山洋平 専門分野 スンナ派思想史

(2) 助教の活動

小野仁美 専門分野 イスラム法、ジェンダー史

在職期間 2021年4月～現在

主要業績

(著書) 共著、荒川正晴ほか編『二つの大戦と帝国主義Ⅱ 20世紀前半(岩波講座 世界歴史 第21巻)』、岩波書店、

2023.2.22

共著、山口みどりほか編『論点・ジェンダー史学』、ミネルヴァ書房、2023.6.1

姫岡とし子、久留島典子、小野仁美編『「ひと」から問うジェンダーの世界史 第2巻 「社会」はどう作られるか?—家族・制度・文化』、大阪大学出版会、2023.9.15

共著、Mohammad Moussa and Emi Goto eds. 『Beyond Modernity: Critical Perspectives on Islam, Tradition and Power (Critical Perspectives on Religion in International Politics)』、Rowman & Littlefield Pub Inc、2023.11.1

共著、日本家族社会学会編『家族社会学事典』、丸善出版、2023.12.28

(論文) 「イスラーム法のなかの「子ども」とジェンダー史」、『歴史評論』867号、35-43頁、2022.7

(書評) 小野仁美、八木久美子著『神の嘉する結婚—イスラムの規範と現代社会』、『イスラム世界』97号、69-77頁、2022.10

(学会発表) 国内、小野仁美「前近代ムスリム女性の労働とイスラーム法」、科研費基盤研究(A)、「イスラーム・ジェンダー学と現代的課題に関する応用的・実践的研究研究会」、2022.9.22

国内、小野仁美「イスラーム法における男女間の身体的な性差をめぐる記述」、ジェンダー史学会第19回年次大会、2022.12.13

国内、小野仁美「コメント」2022年度IG科研公開セミナー「鹿児島から『異文化』と『食』を考える」、鹿児島大学、2023.3.4

国内、小野仁美「コメント」ワークショップ「イスラーム諸国の「人権」規範形成と国際的な信頼醸成」：池端落子（立命館大学）「イスラーム諸国の「人権」規範形成と国際的な信頼醸成：イスラーム協力機構の事例から」、オンライン、2023.8.8

国内、小野仁美「あいまいな性とイスラーム—前近代の法学と医学」「性と性愛をめぐる前近代イスラーム史」（イスラーム・ジェンダー学科研 第4回若手研究報告会）、東京大学、2023.11.2

（招待講演）「イスラーム法学書に読む「子ども」」、小野仁美、東京ジャーミイ文書館主催 特別公開文化講座、2023.7.22

（共同研究）「身体をめぐるイスラームの規範とジェンダー：前近代の思想と法の比較研究」、小野仁美（研究代表者）、科研費基盤研究（C）、2022.4～

「イスラーム・ジェンダー学と現代的課題に関する応用的・実践的研究」、小野仁美、分担者、（研究代表者は東京外国語大学・長沢栄治）、科研費基盤研究（A）、2022～2023

「ムスリム社会におけるマサラハ（福利）の実践—弱者の権利をめぐる比較研究」、小野仁美、分担者、（研究代表者は桜美林大学・堀井聡江）、科研費基盤研究（B）、2022～2023

「アジア・ジェンダー史」の構築と「歴史総合」教材の開発」、小野仁美、分担者、（研究代表者は追手門大学・三成美保）、科研費基盤研究（B）、2022～2023

（会議主催（チェア他））国内、Seminar: Tahar Haddad and the Family Law in Tunisia、大阪大学、2023.2.10

国内、Seminar: Ideas of maqasid al-shari'a in the 20th century Tunisia、東京大学、2023.2.13

国内、Workshop: Muslim Feminism Thoughts in the Early 20th Century: Qasim Amin and Tahar Haddad、2023.2.14

国内、公開セミナー「北海道におけるムスリム観光客受入と定住者との共生に向けた課題」、科研費基盤研究（A）イスラーム・ジェンダー学と現代的課題に関する応用的・実践的研究、2023.8.21

国際シンポジウム「子どもの権利条約と『子の利益』—チュニジアと日本の事例」、東京大学、2023.9.3

国際セミナー「チュニジアの金融：現状と課題」、東京大学、2023.9.3

国際シンポジウム「子どもの権利条約と子どもを保護する法—チュニジアと日本」、大阪大学、2023.9.5

国際セミナー「チュニジアにおける労働と女性の権利（ワーク・ライフバランス含む）」、大阪大学、2023.9.5

（他機関での講義等）上智大学総合グローバル学部、2022.4.1～2023.3.31、上智大学グリーフケア研究所、2023.4.1～2024.3.31

多摩美術大学美術学部、2022.4.1～2023.3.31

立教大学全学総合科目、2022.4.1～2023.3.31

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2022年度・2023年度

なし

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2022年度

なし

2023年度

藤原路成 「イブン・アラビーの宇宙創成論」〈指導教員〉菊地達也

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2022年度

(甲)

木村風雅 「イスラーム法学における教友の権威と役割：シャーフィイー派法理学史を中心に」

〈主査〉菊地達也 〈副査〉柳橋博之・市川裕・森山央朗・四戸潤弥

宮島舜 「A Study of Suhrawardī's Hikmat al-īsrāq（スフラワルディー『照明哲学』の研究）」

〈主査〉菊地達也 〈副査〉柳橋博之・小林春夫・山内志朗・小村優太

(乙)

なし

2023 年度
(甲) (乙)
なし

17 東洋史学

1. 研究室活動の概要

本研究室の起源は、1910年の「東洋史学科」の成立まで遡る。当初は中国・朝鮮およびその周辺の西域・北アジア史が中心であったが、次第にその対象は東南アジア、南アジア、西アジア、中央アジアに広がっている。2022～2023年度本専修課程の授業を担当したのは、教授2・准教授2・助教1名と複数の非常勤講師であり、東は中国から東南アジア・インドをへて西は北アフリカに至る広い範囲をカバーしている。

本研究室の教員は、1995年4月の大学院部局化により、大学院のみが地域毎に三コースに分かれ、学部は東洋史学のままとされたが、より広い視野でのアジア研究者の育成を目指し、2009年に「アジア史」として大学院が再統合された。同大学院では、東洋史学の教員だけではなく、韓国朝鮮文化研究専攻、東洋文化研究所に所属する教員の協力を得て、多彩なカリキュラムが編成されている。

各教員による通常の研究・教育活動のほか、研究室全体として関わっている活動としては、史学会の運営があげられる。歴史文化学科の他専修課程と共に、理事として運営に参加し、『史学雑誌』その他の出版物の編集にたずさわるほか、史学会大会において東洋史関係のシンポジウムを組織するなどの活動を行っている。

他には、東洋学・アジア研究連絡協議会、東方学会や東洋文庫のような広域かつ多分野にわたる学会・研究所での活動にたずさわり、また個別的には、中国社会文化学会、社会経済史学会、歴史学研究会をはじめとする諸学会に加わり、それらの運営で中心的な役割を果たしている。

本研究室の特色のひとつは、留学生の存在であり、学生レベルの国際交流が自然な形で行われている。また、大学院博士課程の学生は、殆どが留学中ないしは長期の留学経験者であることも重要な特色であろう。個々の教員は、様々な形で海外の研究者と密接な関係を持ちながら研究交流をおこなっており、研究室は狭義の歴史研究にとどまらないアジア理解の場として、活況を呈している。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

教授	佐川 英治	(中国古代史)
教授	吉澤 誠一郎	(中国近現代史)
准教授	島田 竜登	(東南アジア史)
准教授	守川 知子	(西アジア史)

(2) 助教の活動

助教 三浦 雄城

在職期間 2021年4月～2024年3月

専門分野 中国古代史

主要業績

(論文) 三浦雄城、「後漢における天子の位置づけ—「天子爵称」の考察から—」、『日本秦漢史研究』、2022.11

三浦雄城、「経学から儒学へ—前漢武帝期「儒学の官学化」説の再検討—」、『中国——社会と文化——』、2023.7

三浦雄城、「董仲舒の符瑞思想—その特徴と継承」、水口幹記編『東アジア的世界分析の方法 —〈術数文化〉の可能性—』、2024.11

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2022年度

「19世紀中葉ギーラーンにおけるイラン＝ロシア貿易」

「鉄道から見る植民地期台湾」

「『塩鉄論』の経済論争—均輸・平準の位置付けをめぐる—」

「1960年代アメリカにおける中華人民共和国・中華民国に関する報道傾向—The New York Timesを事例として—」

「梁武帝の中原回復意図—540年代梁朝の通交関係を手がかりとして—」

「内務府正白旗人英和と清朝皇帝」
「嘉慶帝期における清緬関係について」

2023 年度

「19 世紀前半の西アフリカ内陸社会と「奴隷」—ヨーロッパ人探検家によるその表象に注目して—」
「秦・漢初における治獄制度研究——「奏讞書」「爲獄等狀四種」を中心に——」
「植民地期ビルマにおける寺院と社会」
「ムガル皇帝の庭園：庭園空間の多様性と異文化融合」
「「苻堅以後」の国家と正統性：後秦、後涼の分析を中心に」
「1950 年代中国における国防戦略と核開発」
「日本統治期台湾の酒とその専売制」
「最後の十字軍戦士フェリックス・ファールベル：十五世紀後半の聖土巡礼をめぐる十字軍の断絶と継承」
「『新唐書』における大衍暦の歩月離術と『旧唐書』の記述との差異について」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

木村一樹 「中華民国の戦後対日政策（1945～1954）——日本の再軍備問題を中心に」〈指導教員〉吉澤誠一郎
溝渕智咲 「象とイギリス東インド会社：ベンガル統治初期における辺境支配・軍隊・動物学」〈指導教員〉島田竜登

2023 年度

管凡誼 「東晋南朝の仏教金石文について」〈指導教員〉佐川英治
三谷美晴 「ミイラ・写本・古物収集とヨーロッパ人：異文化交流のなかの近世エジプト社会」〈指導教員〉守川知子

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

(甲)

殷晴 YIN Qing 「清代における政治情報の伝播とメディアの変遷」
〈主査〉吉澤誠一郎〈副査〉佐川英治・黒田明伸・中村元哉・岡本隆司
水上遼 「12-14 世紀におけるイマームの美質の書編纂に関する研究：新しいスンナ派・シーア派関係史の試み」
〈主査〉森本一夫〈副査〉佐川英治・菊地達也・大塚修・近藤信彰
新津健一郎 「一世紀から六世紀における西南中国地域社会史の研究」
〈主査〉佐川英治〈副査〉小寺敦・鶴間和幸・小嶋茂稔・小尾孝夫
金昇來 KIM Seungrae 「近代上海共同租界の行政体系——越界築路と会審公廨を中心に」
〈主査〉吉澤誠一郎〈副査〉佐川英治・黒田明伸・後藤春美・松原健太郎

(乙)

なし

2023 年度

(甲)

大久保翔平 「オランダ東インド会社のアヘン貿易—商品連鎖・商業利権・消費と規制—」
〈主査〉吉澤誠一郎〈副査〉島田竜登・守川知子・小川道大・弘末雅士
田熊敬之 「北朝恩倖政治研究」
〈主査〉佐川英治〈副査〉吉澤誠一郎・小寺敦・杉山清彦・窪添慶文

(乙)

なし

18 西洋古典学

1. 研究室活動の概要

西洋古典学は、ギリシア語とラテン語で記されたあらゆる文字資料を対象とする。文字資料の研究を通じて古典古代世界の文化全体の把握を目指す学問である。そして、ヨーロッパの文化と社会を理解する上で、この学問の重要性はいまさら強調するまでもない。欧米においては、広範な領域を対象に永い伝統を誇る総合的学問として認識されている。本専修課程では、ギリシア語とラテン語の双方の読解に習熟し、諸ジャンルの文献に親しんだ上で、少しずつ視野を拡大していくという指導方針をとっている。

広範な対象にくらべ講義・演習をもつ専任教員の数は、2021年3月の葛西康德教授の定年退職後、教授1人助教1人とあまりに少ない。そこで非常勤講師の援助を受け、毎年、ギリシア語・ラテン語の両言語について原典講読の授業を、韻文・散文にわたって開講できるように努めている。しかし、現状では十分とはいえない。

そこで、従来より全国の他大学ならびに諸外国の研究者にも随時、講演をお願いしてきた。2022年11月28日には、Corpus Christi College Oxfordのジュゼッペ・ペッツィーニ Giuseppe Pezzini 先生による講演“Roman comedy and the perils of realism”が当研究室の主催で行われた。2023年には12月4-7日の連続4日間にわたって、University of Denverのヴィクター・カステッラーニ Victor Castellani 先生の講演が行われた。4日はラテン文学でホラティウス、5日はヘシオドス『神統記』、6日はアプレイウス『黄金のろば』、7日はオレステスの母親殺しを主題としたギリシア悲劇について講義が行われた。詳細にかんしては、以下に述べる『研究室紀要』第13号を参照されたい。当研究室の院生や出身者が主体となって行っている研究会、「クラシカル・セミナー」については、オンライン形式で2022年度、2023年度はそれぞれ9回開催した。卒業論文や修士論文にかんして構想発表、中間報告などが行われた。

研究室紀要（査読つき）として、『東京大学西洋古典学研究室紀要』を原則として年1回発刊している。2024年2月に第13号を刊行した。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

日向 太郎 ラテン語韻文、ギリシア・ローマ叙事詩、西洋古典の受容
(教授) 2020年度～

(2) 助教の活動

松浦 高志

在職期間 2022年4月～現在

研究領域 西洋古典学、ギリシア語・ラテン語歴史言語学、ギリシア・ローマ文化史

主要業績

(論文) Matsuura Takashi, 'Enclisis of Finite Verbs in Archaic Greek Inscriptions', *Japan Studies in Classical Antiquity*, 5, pp. 3-19, 2023.3

(解説) 松浦高志, 「サンスクリット語文法ノート(1): Grassmann の法則と Bartholomae の法則」、梶原三恵子 (編) 『インド語インド文学拾遺 2024』、東京大学文学部インド語インド文学研究室, pp. 31-33, 2024.3

松浦高志, 「サンスクリット語文法ノート(2): maghāvan- 「寛大な」の男性単数主格形について」、梶原三恵子 (編) 『インド語インド文学拾遺 2024』、東京大学文学部インド語インド文学研究室, pp. 35-40, 2024.3

松浦高志, 「サンスクリット語文法ノート(3): 第III類動詞のアクセントと分詞」、梶原三恵子 (編) 『インド語インド文学拾遺 2024』、東京大学文学部インド語インド文学研究室, pp. 41-48, 2024.3

松浦高志, 「サンスクリット語文法ノート(4): ヴェーダ語 valh- 「謎を掛ける」とギリシア語 elephairomai について」、梶原三恵子 (編) 『インド語インド文学拾遺 2024』、東京大学文学部インド語インド文学研究室, pp. 49-57, 2024.3

松浦高志, 「サンスクリット語文法ノート(5): Wackernagel の法則」、梶原三恵子 (編) 『インド語インド文学拾遺 2024』、東京大学文学部インド語インド文学研究室, pp. 59-60, 2024.3

松浦高志, 「サンスクリット語文法ノート(6): -r/n- 語幹名詞」、梶原三恵子 (編) 『インド語インド文学拾遺 2024』、東京大学文学部インド語インド文学研究室, pp. 61-66, 2024.3

松浦高志, 「サンスクリット語文法ノート(7): Caland 接辞」、梶原三恵子 (編) 『インド語インド文学拾遺 2024』、東京大学文学部インド語インド文学研究室, pp. 67-76, 2024.3

松浦高志、「サンスクリット語文法ノート(8): 延長要素-iを含む語根について」、梶原三恵子(編)『インド語インド文学拾遺 2024』、東京大学文学部インド語インド文学研究室、pp. 77-81、2024.3

松浦高志、「サンスクリット語文法ノート(9): tryāṅgula-のアクセント」、梶原三恵子(編)『インド語インド文学拾遺 2024』、東京大学文学部インド語インド文学研究室、pp. 83-84、2024.3

松浦高志、「サンスクリット語文法ノート(10): grbhīṭā-」、梶原三恵子(編)『インド語インド文学拾遺 2024』、東京大学文学部インド語インド文学研究室、pp. 85-90、2024.3

松浦高志、「サンスクリット語文法ノート(11): yoṣan-と yoṣā-」、梶原三恵子(編)『インド語インド文学拾遺 2024』、東京大学文学部インド語インド文学研究室、pp. 91-98、2024.3

松浦高志、「サンスクリット語文法ノート(12): √pā「飲む」の使役相 pāyāyati について」、梶原三恵子(編)『インド語インド文学拾遺 2024』、東京大学文学部インド語インド文学研究室、pp. 99-104、2024.3

松浦高志、「索引(松浦『サンスクリット語文法ノート(1-12)』)」、梶原三恵子(編)『インド語インド文学拾遺 2024』、東京大学文学部インド語インド文学研究室、pp. 105-112、2024.3

(学会発表) 国内、松浦高志、「古期ギリシア語碑文に見られる定動詞の接語としての性質について」、日本西洋古典学会第 72 回大会、2022.6.5

(研究テーマ) 文部科学省科学研究費補助金、研究活動スタート支援、松浦高志、研究代表者、「碑文資料を用いたギリシア語初期叙事詩の言語研究の書き換え」、2022.8～2024.3

(他機関での講義等) 非常勤講師、聖徳大学オープンアカデミー「ソポクレース『エレクトラー』(ギリシア悲劇)を読む」等、2013.1～

非常勤講師、教養学部(後期課程)、「共通ギリシア語(5)」「共通ギリシア語(6)」等、「イタリア地中海都市文化論」等、「特殊講義 V[イタリア地中海研究コース]」等、2016.4～

非常勤講師、立教大学、「ギリシア語 1」「ギリシア語 2」、2023.4～

非常勤講師、慶應義塾大学、「哲学原典研究 VII(古典)」「哲学原典研究 VIII(古典)」、2023.4～2024.3

非常勤講師、放送大学東京多摩学習センター(面接授業)、「ラテン語にふれる」、2023.10～

非常勤講師、聖徳大学通信教育部、「西洋文化の源流」「西洋文化の源流 I」「西洋文化の源流 II」、2023.5～；「古典哲学・思想 II」、2023.11～

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2022 年度

「Rhetoric in Polis and Paideia (ポリスとパイデアにおける弁論の役割について)」

2023 年度

「ヘルメス文書『アスクレピオス』における人間観」

「『縛られたプロメテウス』の上演形態について」

「小セネカの人生哲学について」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

水島顯介 「トゥキュディデス『歴史』第 8 巻における歴史叙述の方法の特徴」(指導教員) 日向太郎

鎌田大毅 「ホメロスにおける『金』『銀』『銅』の色彩表現」(指導教員) 日向太郎

妹尾優暉 「Achilles and Goddesses: Thetis as Reminder of the Gulf Between Humans and Gods (アキレウスと女神たち一人と神の断絶を示すテティス)」(指導教員) 日向太郎

森裕晃 「アテナイ市民の分断と再統合をめぐるリュシアスの著述の研究」(指導教員) 日向太郎

矢野愛美 「アポロニオス・ロディオス『アルゴナウティカ』における英雄イアソンの人物造型」(指導教員) 日向太郎

2023 年度

小林優太郎 「神として「現れる」ディオニュソス—『バツカイ』におけるエウリピデスの表現意図について—」(指導教員) 日向太郎

島田周 「エウリピデス『バツカイ』における「狂気」についての精神医学的考察」(指導教員) 日向太郎

須藤匠 「古代ギリシアにおける客人歓待の慣習」(指導教員) 日向太郎

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2022 年度・2023 年度

(甲) (乙)

なし

19 フランス語フランス文学

1. 研究室活動の概要

本研究室は、テキストの綿密な読解を出発点とした、フランス語・フランス文学に関する教育・研究を担当している。ここでいう「フランス文学」が含意する作品の範囲は、言語および文学が社会の根幹に深く根ざしているフランスの伝統に即して、詩や小説にとどまらず、思想、宗教、歴史記述など、きわめて多岐にわたる。さらに近年ではテキストという概念の拡張にともなって、研究対象は多様化の傾向にある。フランス語学研究についても、本研究室ではこうした文学研究の流れを受け、たんに文法的な側面ばかりでなく、文化的な諸状況における運用という側面からこれを捉える傾向にある。

研究室の専任スタッフは、教授3名、外国人教師（准教授）1名、助教1名であり、これに加えて毎年数名の非常勤講師を委嘱し、中世文学から現代フランス文学まで、また理論的なフランス語学研究からフランス人スタッフによる実践的な語学訓練まで、フランス語フランス文学のほぼ全領域をカバーする授業を提供している。

2023年度の大学院学生数は、修士課程12名、博士課程18名。近年の傾向として研究テーマには現代文学・思想を掲げる学生が増加している。大半は博士課程においてフランスやスイスの大学に留学して、修士号（Master2）を取得し、さらに博士論文を提出して博士号を取得する学生も少なくない。もちろん、本研究科に課程博士論文を提出し博士号を取得する学生もコンスタントに存在する。一方で、修士課程修了後に就職する学生も増加している。

学部の段階では教養学部からの進学生は毎年5名程度である。2023年度の学部在学学生は18名。前期課程教育の大綱化にともなうフランス語の必修単位の減少に配慮し、他専修課程・他学部の学生にも受講しやすい授業を心がけている。さらにフランス人スタッフによるフランス語授業は、週に大学院2コマ（「アカデミック・ライティング」を含む）、学部2コマが用意され、実践的なフランス語運用能力の向上を望む学生の求めに応じている。

研究面については、研究室スタッフが、日本フランス語フランス文学会をはじめとする各種の関連学会・研究会の組織・運営に積極的に関与している。研究室が運営の主体となる研究誌『仏語仏文学研究』は、年1～2回のペースで刊行されている。

国際交流については、パリおよびリヨンのエコール・ノルマル・シュペリウール（高等師範学校）との間に学術交流協定を結び、それぞれ毎年1名の大学院学生の交換を続けている。また、例年、東京大学の交換留学生制度を使って、学部生、修士学生が、パリ第8大学、ストラスブール大学、ブザンソン大学、ジュネーヴ大学等に留学している。研究者の交流も盛んで、フランスのみならず各国からの研究者が研究室を訪問し、講義やセミナーをおこなっている。それらは他大学の研究者や大学院生、一般聴衆にも公開され、本研究室は日本におけるフランス文学研究のセンターの一つとしての責任を十分に担っている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

教授 塚本 昌則（ヴァレリー、フランス20世紀文学）

教授 塩塚 秀一郎（ペレック、フランス20世紀文学）

教授 王寺 賢太（ディドロ、フランス18世紀文学）

(2) 助教の活動

浜永 和希

研究領域 フランス近代詩（特にランボー研究）

主要業績

（論文）浜永和希「花々について詩人たちが口をつぐむこと——ボードレール、バンヴィル、ランボーにおける英雄的詩人像の裏面」、『フランス語フランス文学研究』121号、日本フランス語フランス文学会、p.21-36、2022.8

浜永和希、「“*Crimen amoris*”, une réponse tardive aux “*Sœurs de charité*”?», *Revue Verlaine*, n°20, Classiques Garnier, p. 33-45, 2023.3

（学会発表）国内、浜永和希「ランボー「酔いしれた舟」における所有と放棄」、日仏会館主催若手研究者セミナー（日仏文化講演シリーズ第373回）、2023.7.15

国内、浜永和希「ランボー「記憶」における記憶の遮蔽物」、日本フランス語フランス文学会秋季大会、2023.10.28

(3) 受け入れ外国人研究者

2022 年度

William Marx (コレージュ・ド・フランス教授)
Antoine Compagnon (アカデミー・フランセーズ会員)

2023 年度

Antoine Compagnon (アカデミー・フランセーズ会員)
Bertrand Marchal (ソルボンヌ大学名誉教授)
Laurent Jenny (ジュネーヴ大学名誉教授)

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2022 年度

「ヴィクトル・ユゴー『レ・ミゼラブル』ジャン・バルジャン論」
「カミュ『異邦人』における不条理と太陽」
「『ロラン・バルトによるロラン・バルト』の人称・文体・繰り返されるテーマを分析する」
他、学科卒1名

2023 年度

「ジャン・ルノワール『どん底』について」
「『チボー家の人々』におけるジゼルとチボー家の血統」
「ロジェ・カイヨワ『遊びと人間』における気晴らしと、その戦争との関連について」
「『海底二万里』翻訳対照研究 コンセイクによる三人称の敬語について」
「エミール・ゾラ『金』—金が映し出す人間の姿—」
「証言とそれが聞かれうる場の生成：アシア・ジェバール『墓のない女』読解」
「モネにみるジャポニスム—言葉とイメージからの考察—」
他、学科卒1名

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

小林祐太 「エクリチュールのパッション クロード・シモン『フランドルへの道』を読む」〈指導教員〉塩塚秀一郎
河野泰成 「ポール・ヴァレリー「ナルシス語る」のナルシス像」〈指導教員〉塚本昌則
山中直美 「語り手は空虚《vide》に何を見出したのか—パトリック・モディアノ『ドラ・ブリュデール』における共感《empathic》をめぐる—」〈指導教員〉塩塚秀一郎
安藤秀満 「写真文学における「共にあること」—ロラン・バルトとアニー・エルノーの作品研究」〈指導教員〉塩塚秀一郎
酒田義之佑 「ルネ・シャールの詩作品における主体の変容」〈指導教員〉塚本昌則
新庄直大 「ジュリアン・グラック『七つの丘をめぐる—』をめぐる—」〈指導教員〉塩塚秀一郎
高崎晃次 「アラン・ロブ＝グリエの理論と作品—サルトルから『嫉妬』へ—」〈指導教員〉王寺賢太
畠山茉理絵 「エメ・セゼール『そして犬たちは黙っていた』読解—歴史に抵抗する言語—」〈指導教員〉王寺賢太

2023 年度

三浦啓吾 「モーリヤックにおける詩学とキリスト教—『ありし日の青年』を中心に—」〈指導教員〉塩塚秀一郎
廣田一樹 「『ヒューマニズムとテロル』における歴史の「悪霊」」〈指導教員〉塚本昌則
福嶋一貴 「ナタリー・サロートの『開けて』における言葉について」〈指導教員〉塩塚秀一郎
田代裕昭 「フロバール『感情教育』にみる文学創造と歴史」〈指導教員〉王寺賢太

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

(甲)

吉岡亮祐 「アルベール・カミュ、分断のなかの詩学—『転落』『追放と王国』をめぐる—」
〈主査〉塚本昌則 〈副査〉塩塚秀一郎・王寺賢太・宮田眞治・竹内修一

(乙)

なし

(外国の大学に提出された論文)

菅原百合絵、*Le Sentiment intérieur et sa communication chez Jean-Jacques Rousseau* (パリ・シテ大学)

2023 年度

(甲) (乙)

なし

(外国の大学に提出された論文)

武藤奈月、*Le merveilleux dans les romans d'antiquité* (ソルボンヌ大学)

浜永和希、*Morale et fantaisie dans l'œuvre en vers de Rimbaud* (ソルボンヌ大学)

20 南欧語南欧文学

1. 研究室活動の概要

本専修課程は1979年4月にイタリア語イタリア文学専修課程として発足、文学部の大講座制への移行に伴い、1994年4月より専修課程名が現在のものに改められた。さらに大学院の機構改革に伴って、本専修課程に直結する大学院レベルの専門分野名も1995年度以降、従来のイタリア語イタリア文学から南欧語南欧文学へと改称された。こうした一連の改称は、これまでのイタリア語イタリア文学の研究・教育に加え、南仏やイベリア半島・中南米のラテン系諸言語およびその文学をも、本専修課程ならびに大学院課程の専門分野における研究・教育の対象に取り込もうとする意図の現われにほかならない。目下のところ、新たに加わった分野を専ら担当する研究室所属の専任教員はいないが、1994年度から学外非常勤講師等によるスペイン語スペイン文学関連の授業が開設され、専任教員によるロマンス語学の授業（学部・大学院共通）も年度により開講されてきた。また、2001年度からは中世オック語およびトゥールバドール文学がカリキュラムに加えられている。

2022～2023年度に本研究室に所属した専任教員は下記のように4名であるが、このほか毎年、学部および大学院の授業担当者として学内外から非常勤講師を数名招き、開設科目の充実を図っている。授業の中心をなすのは、旧専修課程時代以来、イタリア語イタリア文学であり、イタリア語の構造と歴史について、また中世から現代に至る様々な時代、様々なジャンルのイタリア文学についての講義・演習がなされるよう意を用いている。また、1994年以降、専任教員と博士課程在籍者を中心にして、研究室の紀要『イタリア語イタリア文学』を刊行してきた。2025年度から研究室名を「イタリア語イタリア文学」とする予定である（学部の専攻名等の変更は追って）。

学生の専攻分野は古典文学、近現代文学、語学と様々である。本研究室の学生は、学部生のときから、夏期休暇などを利用してイタリア各地で開かれる語学研修に参加する者が多い。大学院在籍者の多くはイタリア留学中ないしは留学経験者である。

通常の研究・教育活動のほか、本研究室ではローマ大学ラ・サピエンツァ、ピサ高等師範学校、パドヴァ大学など東京大学と学術交流協定を締結しているイタリアの教育研究機関に所属する研究者等との交流も継続的に行なっている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

教授：浦 一章（イタリア13・14世紀文学）

准教授：Lorenzo Amato（ロレンツォ・アマート）（イタリア15世紀文学）

准教授：土肥 秀行（イタリア近現代文学）

助教：長野 徹（イタリア近現代文学・児童文学）

(2) 助教の活動

長野 徹

在職期間 1997年10月～現在

研究領域 イタリア近現代文学・児童文学

主要業績

（書籍等出版物）[単訳] ロベルト・ピウミーニ『光草—ストラリスコー』、小学館、2022.11

[単訳] ディーノ・ブツァーティ『パバウ』、東宣出版、2022.12

[単訳] ドナテッラ・ヅィリオット『トロリーナとペルラ』、岩波書店、2022.12

（論文）[大学研究機関紀要]「児童文学におけるヴェリズモ——G.E. スッチョ『コンカドーロ物語をめぐる』——」、『イタリア語イタリア文学』9号、pp.171-190、2024.3

（講演・口頭発表等）[シンポジウム・ワークショップ パネル（指名）]「イタリアの昔話について」、第5回 JBBY 子どもの本の翻訳フォーラム、2023.1.29

（受賞）第5回須賀敦子翻訳賞、ディーノ・ブツァーティ『動物奇譚集』、イタリア文化会館、2023.4

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2022 年度

「アントニオ・タブッキ『遠い水平線』におけるメランコリーの様態」

2023 年度

「歌曲から探るイタリア語単語アクセントの音声学的特徴」

「G.B.マリーノの La lira—その恋愛詩における娯楽性の追求」

「初版『モルガンテ』における滑稽味」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

飯島剛将 「フランチェスコ・ペトラルカの文学と哲学の統合的研究：『悔悛詩篇』読解に向けて」〈指導教員〉浦一章

2023 年度

渡辺元裕 「ダンテ『神曲』における宗教的「保守性」の検証—教皇観、清貧観、終末観に焦点を当てて—」〈指導教員〉浦一章

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2022 年度・2023 年度

(甲) (乙)

なし

2 1 英語英米文学

1. 研究室活動の概要

本学に英文学科が設置されたのは1887年であり、1893年には「英吉利語学英吉利文学」として講座化された。1962年にはこれに「アメリカ文学講座」が加わり、三講座となったが、1995年4月の改組に伴い「広域英語圏言語文化」大講座となった。100年の伝統をもった学科として、英語学と英米を中心とする英語圏文学（小説・詩・演劇など）の研究と教育にあたっており、そのカバーする領域は、イギリス中世から21世紀の英語圏作品までと幅広い。2024年3月現在、専任教員は教授4名、准教授2名、助教1名で、学内外から常時（「英語後期」や「アカデミック・ライティング」を含み）10名以上の非常勤講師を招いて、専任教員では扱いされない分野を補っている。

毎年4月に教養課程から英語英米文学専修課程に進学してくる学部学生は、2年間の専門教育を踏まえ、大学生活4年間の総決算として、英語で7500words程度、日本語の場合、2万字程度の卒業論文を執筆する。また、個別のテーマや作家に関する読書会・研究会は、学部生・大学院生いろいろなレベルで常時複数行われており、専任教員による自主授業的なプログラムもある。本専修課程で最近特に注目される傾向は、研究職を目指して大学院に進学する学生と並んで、英語力を活かし、出版やマスコミ等だけでなく、外資系やIT系など一般企業に就職する学生も多くなっていることである。

大学院の修士課程には他大学からの志望者もあり、厳しい試験を経て入学し、本学出身者とともに博士論文研究に向け日々研鑽に励んでいる。大学院には専門に応じて、専任教員および学外の専門家をレフリーとする学術研究誌として、『Linguistic Research』（英語学）、『Reading』（イギリス系文学）、『Strata』（アメリカ文学）が、それぞれ年に1～2回ずつ刊行され、おおむね英語によって書かれた研究論文が掲載されている。これらの学術研究誌や各分野の学会誌に発表した研究を基盤として博士論文を人文社会系研究科に提出し、PhDの学位を取得した者はすでに14名輩出されている。

学会活動は、日本英文学会、日本アメリカ文学会、日本英語学会を中心に行われており、日本における英語学・英米文学研究の発展に中心的役割を果たしている。また、同窓会と卒業生の研鑽の場を兼ねた「東大英文学会」が古くから組織され、年1回の総会・講演会・懇親会が現在でも続いており、発行されている名簿の筆頭卒業生は夏目漱石である。

海外との研究交流も積極的に行なわれており、英米その他の大学の研究者の来日に際しては、他大学の研究者にも公開された講演会、セミナー等を開催することが多く、本学の教員・学生・院生が積極的に参加し、活発に討議を行い、日本の英語圏言語文化研究拠点として研究交流活動を行っている。近年では、大学院学生、特に博士課程在籍者がさまざまな団体からの奨学金を得るなどして英米の大学に留学し、MA、MPhil、PhDなどの学位を取得することが多く、すでにPhDの学位の取得者を40名以上は輩出している。わが国で教職につくものが大半であるが、中にはそのまま留学先の英米において職を得ているものもいる。また中国などからの外国人留学生・研究生もあり、世界に開かれた、より多様な環境のもとでの教育・研究活動の展開が囑望されている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

教授	後藤 和彦	GOTO, Kazuhiko	(アメリカ文学)
教授	新井 潤美	ARAI, Megumi	(イギリス文学)
教授	渡邊 明	WATANABE, Akira	(英語学)
教授	阿部 公彦	ABE, Masahiko	(イギリス文学)
准教授	諏訪部 浩一	SUWABE, Koichi	(アメリカ文学)
准教授	中尾 千鶴	NAKAO, Chizuru	(英語学)
客員教授	CLARK, Stephen		(イギリス文学、2022年度まで)
助教	井上 和樹	INOUE, Kazuki	(イギリス文学、2023年度まで)

(2) 助教の活動

井上 和樹
在職期間 2021年4月～2024年3月
研究領域 イギリス文学

主要業績

- (書籍等出版物) [共編者] 『Right Margin——詩の余白から生まれるもの (英詩研究会 10 周年記念詩文集)』、五十嵐奈央 井上和樹 今関裕太 柿原妙子 鈴木哲平、英詩研究会、2022.12.12
- [共著] 「「あなた」と「わたし」について語る——霊媒の詩人としてのエリオット——『四月はいちばん残酷な月——T. S. エリオット『荒地』発表 100 周年記念論集』、井上和樹、水声社、pp. 317-334、2022.12.15
- (論文) [研究会、シンポジウム資料等] 『荒地』出版 100 周年の今、T. S. エリオットの「嘆く少女」を読む」、井上和樹、『Right Margin——詩の余白から生まれるもの (英詩研究会 10 周年記念詩文集)』、pp. 65-73、2022.12.12
- (その他各種論著) [総説・解説 (その他)] 「インタビュー 野中美峰『野生のアイリスから一年』」、井上和樹 柿原妙子、『Right Margin——詩の余白から生まれるもの (英詩研究会 10 周年記念詩文集)』、2022.12.12
- [総説・解説 (商業誌)] 「T. S. エリオットの "Medium" をめぐる科学と霊媒の文脈について」、井上和樹、『コミット通信』30 巻、pp. 6-7、2023.2.28
- [研究発表要旨 (全国大会、その他学術会議)] "'What Images Return / O my Daughter': The Poetics of the Ghostly Voice in T. S. Eliot's 'Marina'、Kazuki Inoue、*The Power of Words (UTokyo-Cambridge Voices 2022)*, Megumi Arai and Masahiko Abe, eds., p.13、2023.3
- [総説・解説 (商業誌)] 「「人造歴史中的他者——「醜現代性：看不見的那一面」研討會紀實二」[Otherness in Artificial History: Reviewing the 'Ugly Modernity: its Unseen Sides' Conference (Part 2)]」 pp.110-115、「「強制認同——「醜現代性：看不見的那一面」研討會紀實三」[Enforced Identity: Reviewing the 'Ugly Modernity: its Unseen Sides' Conference (Part 3)]」 pp.116-121、井上和樹、楊育睿(訳)、《藝術家》581 巻 10 号、2023.10
- [研究発表要旨 (全国大会、その他学術会議)] 『荒地』におけるタロットカードとオカルティズム」、井上和樹、『T. S. Eliot Review』(日本 T. S. エリオット協会) 34 巻、pp.41-49、2023.11.1
- (講演・口頭発表等) [口頭発表 (招待・特別)] "'What images return / O my daughter': The Poetics of the Ghostly Voice in T. S. Eliot's 'Marina'、Kazuki Inoue、*The Power of Words*, University of Tokyo、2022.9.24
- [シンポジウム・ワークショップ パネル (指名)] 『荒地』におけるタロットカードとオカルティズム (シンポジウム 彼岸と此岸をつなぐもの——『荒地』100 周年目のテキスト・コンテキスト)」、佐藤亨 井上和樹 下楠昌哉 田口麻奈、日本 T.S. エリオット協会第 34 回大会 (佛教大学)、2022.10.30
- [口頭発表 (招待・特別)] 「Psychical Research at the Intersection of East and West: Shinrei Kenkyū in Japan from the Late Nineteenth to the Early Twentieth Century」、Kazuki Inoue、*Beyond the Veil: Cross-Cultural & Interdisciplinary Studies of Horror, Gothic, and the Occult in the Nineteenth Century* (Centre for Nineteenth-Century Studies, Durham University)、2022.10.31
- [口頭発表 (一般)] 「"She smoothes her Hair with Automatic Hand": Typing and Spirit Mediums in T. S. Eliot」、Kazuki Inoue、*Cultures of Modernity* (University of Auckland)、2022.12.12
- [口頭発表 (招待・特別)] 「The Recurrence of "Myers's Problem" in W. B. Yeats's *The Hour-Glass: The "Subliminal Self" at the Intersection between Psychology and Metaphysics*」、Kazuki Inoue、*Tokyo Modernism Research Seminar* (ZOOM)、2023.1.9
- [口頭発表 (招待・特別)] 「The Western Psychic Imagination from the Meiji to the Taishō Era: On the Conceptual History of 'Shinrei'」、Kazuki Inoue、*Psychic Modernity: Spiritualism, Biography, and Feminism* (Seikei University)、2023.3.15
- [シンポジウム・ワークショップ パネル (指名)] 「シンポジウム司会兼発表 『荒地』における「声」とアダプテーション (シンポジウム 「エリオットについて、知れば知るほどいいことだ」——『四月はいちばん残酷な月——T. S. エリオット『荒地』発表 100 周年記念論集』をもっと読んでみる)」、井上和樹 清川祥恵 出口菜摘 圓月勝博、日本 T.S. エリオット協会第 35 回大会 (青山学院大学)、2023.11.18
- (共同研究) [科学研究費助成事業] 「T. S. エリオットと W. B. イェイツに対する日本のオカルティズムをめぐる研究」、井上和樹、若手研究 : 23K12118、日本学術振興会、東京大学、2023.4.1~2026.3.1
- (その他) 東京大学フューチャーファカルティプログラム (東大 FFP)、2022.10~2023.2
- Coursera 「インタラクティブ・ティーチング」コース (東京大学)、2022.10~12
- (学会・委員活動) [所属学協会] The International Yeats Society、2023.1~
- [委員歴] 日本 T. S. エリオット協会、委員兼 T. S. Eliot Review 編集委員、2022.4~、University of York and University of Tokyo、Co-Organiser: "Ugly Modernity: Its Unseen Sides"、2022.9~2023.6、University of Tokyo、Co-Organiser: "Global Modernism and Simultaneity"、2023.11~

(3) 外国人教員の活動

Stephen Clark : 客員教授

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2022 年度

The Japanese Tough-Construction and The Complementizers *no* and *koto* (日本語の tough 構文と補文標識「の」「こと」
との関わりについて)

Three Women of *The Moon and Sixpence* (『月と六ペンス』における 3 人の女性について)

Interpreting Diaspora: An Analysis of Min Jin Lee's *Pachinko* (ディアスポラを解釈するー『パチンコ』における視点と
試行ー)

他、学科卒 14 名

2023 年度

The Poetics of AI in William Gibson's *Neuromancer*

他、学科卒 14 名

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

日山美沙 *Madness in Macbeth* (『マクベス』における狂気) (指導教員) 阿部公彦

植山絢太 *Sympathy and Confession in Nathaniel Hawthorne's The Scarlet Letter* (ナサニエル・ホーソーン『緋文字』に
おける共感と告白) (指導教員) 後藤和彦

駱嘉萌 *The Influence of Consumerism on the Artistic Creation of Oscar Wilde* (オスカー・ワイルドの作品におけるコ
ンシューマリズムの影響) (指導教員) 新井潤美

2023 年度

松本夏織 *L'écriture féminine in Virginia Woolf: From "Woman's Sentence" to "Between Women"* (ヴァージニア・ウルフ
におけるエクリチュール・フェミニンー「女性の文体」から「女同士の絆」へ) (指導教員) 新井潤美

岩田凌汰 *Tenderness in Carson McCullers* (カーソン・マッカーラーズにおけるテンダーネス) (指導教員) 後藤和彦

尾上竜馬 *Love and Ideology in William Faulkner's Light in August* (ウィリアム・フォークナー『八月の光』におけ
る愛とイデオロギー) (指導教員) 諏訪部浩一

海野裕平 *Point-of-view Agreement and Argument Ellipsis in Japanese* (日本語における視点の一致と項削除) (指導教
員) 中尾千鶴

横山力玖斗 *Syntax and Semantics of Differential Object Marking* (示差的目的語表示の統語論と意味論) (指導教員)
渡邊明

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2022 年度・2023 年度

(甲) (乙)

なし

2 2 ドイツ語ドイツ文学

1. 研究室活動の概要

(1) 研究分野の概要

ドイツ語ドイツ文学研究室では、中世から今日までの、ドイツ語圏の叙事詩、抒情詩、散文作品、演劇、批評、文芸学、思想等のテキストを対象とする研究・教育、および、ドイツ語史の研究・教育をおこなっている。

(2) 専攻としての活動

両年度の大学院兼任・非常勤教員による講義・演習・特殊研究のテーマは、次のとおりである。

[2022 年度]

「ムージルを読む」

「ゲーテ時代のテキストを読む (1) (2)」

[2023 年度]

「言語学の諸問題 (1) (2)」

「ドイツ語圏モデルネにおける舞踊と文学・諸芸術」

また各教員による通常の研究・教育活動のほか、専任スタッフと博士課程の学生全員が参加する博士課程コロキアムの時間をもうけ、博士課程の学生の研究発表と討論を行なっている。

(3) 研究室としての活動

研究論文誌として年 2 号発行している『詩・言語』は、2022 年度に 90 号が、2023 年度には 91 号、92 号が発行された。

科学研究費補助金関係では、「ドイツ文芸における「古典」概念の再検討」(基盤研究 (C)、研究代表者大宮勘一郎) が 2019 年度から、「ドイツ英雄詩の受容史研究—英雄詩素材の歴史的アクチュアリティ」(基盤研究 (C)、研究代表者山本潤) が 2020 年度から交付されている。

専門学会である日本独文学会には、専任スタッフの何人かが理事会や機関誌編集委員会などに加わることが通例となっている。山本潤は 2023 年度まで理事職にあった。その他の学会活動として、宮田眞治は 2008 年度より日本シェリング協会理事を、山本潤は 2019 年度より西洋中世学会常任委員をつとめている。

(4) 国際交流の状況

従来は、国際交流として、各教員の海外出張のほか、例年ドイツ語圏の作家や研究者を招いて講演会を開催している。これらの講演会や研究会は、他大学の学生や研究者にも公開している。

2022 年度はコロナの影響もあり、交流の機会はなかったが、2023 年度は、Kevin Vennemann 氏 (Scripps College)、Sakata Tomoki 氏 (Universität Bamberg) が招聘研究者として来日、また招聘研究者として来日した Doris Dörrie 氏 (die Hochschule für Fernsehen und Film München) がワークショップを開催した (ゲーテ・インスティテュートとの共催)。

また、大学院の学生の多くがドイツ、オーストリアへ留学している。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

教 授： 大宮勘一郎 近現代ドイツ文学

教 授： 宮田 眞治 近現代ドイツ文学

准教授： 山本 潤 ドイツ中世文学

准教授： Keppler-Tasaki Stefan 近現代ドイツ文学

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2022 年度

「シラー『ヴァレンシュタイン』における合唱団的効果とその背景」

「„Das Urteil” のテキストが持つ加速性について」

他、学科卒 1 名

2023 年度

学科卒 14 名

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

西田知奈美 「後期リルケの無限への志向—『ドゥイノの悲歌』における〈呼びかけ〉の詩学—」〈指導教員〉宮田
真治

成田基武 「フリードリヒ・キットラーと文学」〈指導教員〉大宮勘一郎

2023 年度

倉成駿 「ヴァルター・ベンヤミンの歴史哲学」〈指導教員〉大宮勘一郎

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2022 年度・2023 年度

(甲) (乙)

なし

23 スラヴ語スラヴ文学

1. 研究室活動の概要

東京大学文学部にロシア語ロシア文学講座が設けられたのは1972年（昭和47年）、東京大学が創設されてのち約100年後のことである。まだ比較的若い専修課程であるが、それまで東京外国語大学、早稲田大学など限られた大学でしか行われていなかったロシア研究に新風を吹き込んだ。大学院の修士課程・博士課程は1974年度に設置されたが、すでに32名の課程博士を世に送り出している。1994年度から学部はスラヴ語スラヴ文学専修課程に、また1995年度の大学院の部局化にともない、大学院も欧米系文化研究専攻スラヴ語スラヴ語圏言語文化専門分野に改称された。スラヴ圏の言語と文学に関する研究と教育を発展させることを課題とし、日本におけるスラヴ語スラヴ文学の研究と教育の重要な拠点として幅広くスラヴ諸地域の言語文化に関する諸問題を扱っている。

教員数は教授1名、准教授1名、助教1名である。ほかに他専門分野教員、総合文化研究科教員と非常勤講師の協力も得て、スラヴ語学、スラヴ語史、ロシア文学（詩、小説、演劇、批評）、またスラヴ語圏の言語文化に関する研究・教育が行われている。今後、スラヴ諸地域の研究者との交流や学生の留学などを拡充し、国際レベルでのスラヴ語スラヴ文学研究に貢献する人材を育成することをめざす。

現在、学部学生1名、大学院修士課程院生3名、博士課程院生5名が在籍している。2023年度（令和5年度）には、鎌倉啓伍氏の卒業論文「書記言語の社会的意味：北イタリアのスロヴェニア語レジア方言を例に」が東京大学総長賞を受賞した。

研究室では研究年報『SLAVISTIKA』を発行しており、2022年度分として第37号を刊行した。これは教員、大学院生および学部学生の日頃の研究勉強成果を発表する場であるが、社会の様々な分野で活動する卒業生と研究室を結ぶ場としての役割も果たしている。

東京大学スラヴ研究室は毎年多くの若い専門家たちを国内外の学会、研究会活動に参加させており、日本のスラヴ学、ロシア文学の一翼を担ってきた。それらの活動の運営に関しても積極的な役割を果たしているといえるだろう。また現在、東京大学はポーランドのワルシャワ大学、セルビアのベオグラード大学、クロアチアのザグレブ大学、国立ロシア人文大学、ロシア国立サンクト・ペテルブルグ大学と交流協定を結んでいるが、本研究室はそうした諸大学との交流事業においても中心的な役割を担っている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

楯岡求美 ロシア演劇・芸術（在職期間 2016年4月～現在）

平松潤奈 ロシア・ソ連文学（在職期間 2023年10月～現在）

(2) 助教の活動

古宮路子

在職期間 2021年4月1日～2024年3月31日

研究領域 ロシア・ソ連文学

主要業績

（著書）共著、古宮路子「アレクセイ・トルストイ『苦悩の中を行く』」、中村唯史・坂庭淳史・小椋彩編『ロシア文学からの旅：交錯する人と言葉』、ミネルヴァ書房、2022年、100-101頁

共著、Michiko Komiya, “Корэхито Курахара и ‘Пролетарский реализм’: пролетарская литература в Японии в 1920-х гг.,” in Shin’ichi Murata and Stefano Aloe, eds., *The Reception of East Slavic Literatures in the West and the East* (Firenze: Firenze University Press, 2023), pp. 159-172

単著、*Комия М. «Эманация изящества»: история создания романа Ю. К. Олеши «Зависть»*. Белгород: Логос, 2023. 172 стр.

（論文）古宮路子「リアリズムと心理主義——1920年代文壇におけるレフとラップの闘争をめぐって」、『SLAVISTIKA』、2022年、第36号、29-42頁

Michiko Komiya “The Problem of ‘Knowledge’ in LEF and A. Voronsky’s Literary Controversy,” *Interface*, Issue 23 (2024), pp. 5-15

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2022 年度

なし

2023 年度

「書記言語の社会的意味：北イタリアのスロヴェニア語レジア方言を例に」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

清水真伍 「ナスターシャ・フィリーポヴナの美の二重性―「世界をひっくり返す美」のダイナミズム―」〈指導教員〉楯岡求美

2023 年度

安井靖雄 「ソルジェニーツィン『第一圏のなかで』について スターリンと外交官ヴォロディンの人物像形成を中心に」〈指導教員〉楯岡求美

木田貴久 「アンドレイ・ペールレイ『ペテルブルク』における都市空間についての分析―ドゥートキンの屋根裏部屋を中心に―」〈指導教員〉楯岡求美

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2022 年度・2023 年度

(甲) (乙)

なし

2 4 現代文芸論

1. 研究室活動の概要

(1) 研究分野の概要

現代文芸論専修課程（略称「現文」）は、2006年度まで存在した「西洋近代語近代文学専修課程」（略称「西近」）を発展的に引継ぎ、新たな研究室として2007年度に発足した。「西近」は、ひとつの言語・国の枠内にとどまることなく、西洋の近代文学・語学を広く学ぶことを奨励するとともに義務付けた専修課程であったが、「現文」はその精神を受け継いでいる。

初年度は専任教員2名と助教による体制でスタートし、「西近」時代にはなかった専用の共同研究室を確保するとともに、事務補佐員を採用して事務・運営体制を整えた。また学部課程に加えて大学院課程が新たに設けられ、学部での研究をさらに発展させ深めることが可能になった。

西洋近代の文学・語学を広く学ぶという基本姿勢のいわば裏返しとして、留学生が西洋のバックグラウンドから日本語・日本文学を研究することも奨励し、実際に2007年からそのような目的を持つ留学生が毎年のように大学院に入学している。また日本研究・比較文学研究に携わる外国人研究員、外国人研究生も積極的に受け入れている。

専任教員および助教は、広域英語圏、広域スペイン語圏、中東欧、現代日本などの様々な領域の研究・教育に従事しており、世界の文学を幅広くカバーしているが、研究・教育は地域的なアプローチに限定せず、むしろ様々な地域間を越境・横断するような「世界文学」「翻訳」「批評」などの視点に重点を置いて、教員や研究者、大学院生・学生などの間の意見交換、討論、交流を活発に行っている。また、専任教員の論文の他、研究活動に関わる若手研究者・大学院生などの寄稿を得て現代文芸論研究室論集『れにくさ』を刊行している（2009年創刊、ほぼ年刊のペースで発行。2023年3月には第13号、2024年3月には第14号を発行した）。

非常勤講師による授業も、表象文化、言語理論、幻想文学、翻訳論など、現代文芸論の理念にそった多彩な内容を提供し、当専修課程以外の学生も多数受講している。またチベット語、オランダ語、アイマラ語、フィンランド語、イディッシュ語、リトアニア語、バスク語、スウェーデン語、トルコ語など、他では学ぶことが難しいマイナー言語の授業も積極的に開講していることが、現文の特徴になっている。

(2) 大学院の専攻・コースとしての活動

2007年の創設時にスタートした大学院は、その後学内外から順調に学生を集め、毎年平均して修士課程に6名程度、博士課程に3～4名程度の大学院生が入学している。また外国からの留学生も積極的に受け入れている（国費留学生を含む）。これらの学生のバックグラウンドは多様であり、出身国はこれまでの実績を見ると、ロシア、ウクライナ、スロヴァキア、ポーランド、ブルガリア、アメリカ合衆国、イギリス、ベネズエラ、中国、韓国、シンガポール、カザフスタンなど、多岐にわたる。そのことも刺激となって、大学院生相互の国際的な交流はきわめて盛んである。

(3) 研究室としての活動・国際交流活動

現代文芸論研究室が主催・共催した主な学術・文学イベントを以下に挙げる。新型コロナウイルスの影響でイベントの開催は大きく減らさざるを得なかったが、毎年行っている現代文芸論研究発表会はオンラインにて開催することができた。

2022年度：

研究発表会（日時：2022年11月5日、学位取得者による特別報告：坪野圭介（和洋女子大学助教）「遊園地と都市文学——アメリカン・メトロポリスのモダニティ(1893-1925)」、須藤輝彦（新潟大学・日本学術振興会特別研究員PD）「たまたま、この世界に生まれて——ミラン・クンデラにおける運命」。研究報告：池島香輝「「境界を描く」——『椿の海の記』と『あやとりの記』を比較して」；コメンテーター：山田悠介（大東文化大学）、オウ・ジェームス「近代のヒストリカル・フィクション——ルカーチ『歴史小説論』と物語論を手がかりに」；コメンテーター：大橋洋一（東京大学名誉教授）、山内瑛生「ブリュッセルと文学カフェ——「ベルギー文化」創造は可能か」；コメンテーター：三田順（北里大学）。特別企画：「沼野充義『世界文学論』を読む」、司会：阿部賢一、特別ゲスト：沼野充義（名古屋外国語大学教授）、コメンテーター：今井亮一、安原瑛治、ハビャン・ニーナ。主催：東京大学人文社会系研究科・文学部現代文芸論研究室）

2023年度：

Oleksandra Salii 氏特別講演会（日時：2023年7月28日、Lecture：“Hutsul Folklore as a Source of the Fantastic in the Prose Works of Ivan Franko and Other Hutsul Authors,” Moderator: Kenichi Abe. Brief Report: “Ukraine at War: Report on the Current

State of the Academic Community in the Country,” Moderator: Jun Mita (Kitasato University).主催：東京大学人文社会系研究科現代文芸論研究室／科研費「境界地域における幻想文学の比較研究」（基盤 B：22H00652）、共催：科研費「イストリア半島における風土と詩学を巡る学際的研究」（萌芽：22K18478）

クリスティナ・クレイマー教授特別講演会「左右確認！ 文学そして詩情を翻訳すること」（日時：2023 年 11 月 1 日、主催：北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター「国際的な生存戦略研究プラットフォームの構築」、共催：東京大学人文社会系研究科現代文芸論研究室）

研究発表会（日時：2023 年 11 月 18 日、司会：藤井光、報告者：山内瑛生、オウ・ジェームス。シンポジウム「草稿研究の現在」；登壇者：阿部賢一「大江健三郎文庫と草稿研究」、明星聖子（成城大学）「カフカに草稿はあるのか——デジタル化のための編集文献学」、井上隆史（白百合女子大学）「草稿研究とデジタル・ヒューマニティーズ」。主催：東京大学人文社会系研究科・文学部現代文芸論研究室）

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教授

教授：柳原孝敦（ラテンアメリカ文学・芸術、広域スペイン語圏文学）

准教授：阿部賢一（中東欧文学、比較文学）

准教授：藤井光（現代英語圏文学、翻訳論）

(2) 助教の活動

今井亮一

在職期間 2020 年 4 月～2023 年 3 月

研究領域 比較文学、近現代日本文学、英語圏文学

主要業績

（著書）単著、今井亮一、『路地と世界——世界文学論から読む中上健次』、松籟社、2021.3

（書評）秋草俊一郎・戸塚学・奥彩子・福田美雪・山辺弦編、奥彩子・鶴戸聡・中村隆之・福島伸洋編、『世界文学アンソロジー いまからはじめる』、『世界の文学 文学の世界』、三省堂、松籟社、『れにくさ』、11 号、213-217 頁、2021.3

Ryan Johnson, *Transnationalism and Translation in Modern Chinese, English, French and Japanese Literatures*, Anthem Press, 『れにくさ』、12 号、287-293 頁、2022.3

（学会発表）国内、今井亮一、「路地と世界——世界文学論から読む中上健次作品研究」、第 5 回 現代文芸論研究報告会、第 2 部 学位取得者による特別報告、2020.10.31

（マスコミ）「教科別 東大教員からのエール 国語」、『東京大学新聞』、2020.9.8

（受賞）国内、今井亮一、東京大学而立賞、東京大学、2021.3.31

（非常勤講師）東京薬科大学、「薬学英语入門Ⅰ・Ⅱ」、2020.4～2022.3

五月女颯

在職期間 2023 年 4 月～2024 年 3 月

研究領域 ジョージア文学、批評理論

主要業績

（論文）[国際会議プロシーディングス] „მოქმედებს თუ არა გველის შხამი სოციალისტურ რეალიზმზე?“ XVI საერთაშორისო სიმპოზიუმი ლიტერატურათმცოდნეობის თანამედროვე პრობლემები: სოციალისტური რეალიზმის ეპოქა ლიტერატურასა და ხელოვნებაში: საერთაშორისო სიმპოზიუმის მასალები, თბილისი: თბილისის უნივერსიტეტის გამომცემლობა, 2023, გვ.429-433.

[国際会議プロシーディングス] „ა. ყაზბეგის „ნამწყემსარის მოგონებანი“ როგორც კოლონიური ანტიპასტორალი“, საერთოელო და კავასია — წარსული, აწმყო, მომავალი: თეზისები, თბილისი: საქართველოს უნივერსიტეტი, თამაზ ბერაძის სახელობის ქართველოლოგიის ინსტიტუტი, 2023, გვ.180-183

（講演・口頭発表等）[メディア出演] インタビュー、Youtube 番組、„გუგასთან“, 2023.4.19

[メディア出演] インタビュー、テレビ番組 დღის კოდი“, 2023.5.11

[講演] 「19 世紀ジョージア文学：ロシアとの闘い」、朝日カルチャーセンター新宿教室、2023.6.3

[講演] 「ロシアの辺境」、ジョージア文学の闘い方：文学研究のミライ」、株式会社ゲンロン、2023.6.29

[メディア出演] インタビュー、雑誌 გზა 2023.7.7

- [口頭発表 (一般)] “მოქმედებს თუ არა გველის შხამი სოციალისტურ რეალიზმზე?” 第16回国際シンポジウム「文学研究の現代的問題：文学と芸術における社会主義リアリズムの時代」、ショタ・ルスタヴェリ記念ジョージア文学研究所、2023.9.29
- [口頭発表 (一般)] „ს. ყაზბეგის „ნამუყმსარის მოგონებანი“ როგორც კოლონიური ანტიპასტორალი“ 第2回国際会議「ジョージアとコーカサス：過去、現在、未来」、タマズ・ベラゼ記念ジョージア学研究所、2023.10.8
- [口頭発表 (一般)] “Decolonizing Literature: A Georgian Case” ASEEES 2023 Virtual Convention, Online, 2023.10.20
- [メディア出演] VTR 出演、テレビ番組 „ამ მზათ-კვირას“、2023.10.28
- [メディア出演] „ვაჟა ფშაველას“ ვიდეოპროექტი „ქართული საზავშვო მწერლობა. „დედაენიდან“ სალამურამდე“、2023.10.25
- [メディア出演] VTR 出演、テレビ番組 „იმედის დღე“、2023.11.3
- [口頭発表 (一般)] 「2つの破局と花畑：古川日出男『あるいは修羅の十億年』におけるポスト3.11 パスラル」、国際シンポジウム「13年後のカタストロフ文学」、パリ・イナルコ、2024.3.29

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2022 年度

- 「映画『ドライブ・マイ・カー』における『ワーニャ伯父さん』について」
 「『獣の奏者』におけるヒロイン像」
 「『腐れ大学生』に見る太宰の影 『畜犬談』から『太陽の塔』へ」
 「エドガー・アラン・ポーの作品に見る“恐怖”像—恐怖とその超克—」

2023 年度

- 「『放浪者メルモス』に見るゴシック翻訳」
 「村上春樹『かえるくん、東京を救う』論——境界と寓意を中心に——」
 「修業の果てには何があったのか——松浦理英子『親指 P の修業時代』」
 「記憶を受け継ぐ——アニカ・トールの語りとその翻訳の受容について」
 「『図書館奇譚』の変遷—短編から絵本へ—」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

- 柴山裕行 「意思決定という観点から見る『つつましい英雄』論 行動経済学を文学理論として応用するための試み」〈指導教員〉柳原孝敦
- 藤生真梨藻 「『屋根裏の散歩者』と『詩人と狂人たち』における〈狂気〉と〈探偵〉」〈指導教員〉阿部賢一
- 栗原佑紀子 「あわいの作家ファン・ビジョーロ」〈指導教員〉柳原孝敦
- 河村陸 「ポール・トーマス・アンダーソンの語りと『インヒアレント・ヴァイス』」〈指導教員〉藤井光
- 杉本はるか 「カレン・ブリクセンの短編作品における自己翻訳の諸相」〈指導教員〉阿部賢一

2023 年度

- 井口凜 「古井由吉『仮往生伝試文』と『読むこと』の可能性」〈指導教員〉阿部賢一
- 紺野直伸 「クツツエー作品における閉じ込めと書き換え——『サマータイム』を中心に——」〈指導教員〉藤井光
- 代翔宇 「『生=文学』：プルーレストにおける『バーチャルなもの』」〈指導教員〉阿部賢一
- 木村芙蓉 「ナンシー・ヒューストン『草原讃歌』における翻訳」〈指導教員〉藤井光
- ASHBROOK Emily Jessica 「A Literary Relay —— Shion Miura's Kaze ga Tsuyoku Fuiteiru in Translation (文学のリレー——三浦しをん『風が強く吹いている』の翻訳)」〈指導教員〉藤井光

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

- (甲) (乙)
なし

2023 年度

(甲)

邢亜南 XING Yanan 「変身の詩学——多和田葉子の作品研究」

〈主査〉阿部賢一 〈副査〉柳原孝敦・藤井光・松永美穂・岩川ありさ

(乙)

なし

25 西洋史学

1. 研究室活動の概要

西洋史学研究室は1887年に発足した史学科を母体とし、1919年に西洋史学科として独立、大学・大学院・学部の制度の改変を経て、現在の西洋史学専修課程・専門分野に至っている（両方をあわせて研究室と呼ぶ）。この間、多数の指導的研究者・教育者を輩出し、また中等教育や出版・マスコミ、広告、通信、金融、製造など、さまざまな企業にも有為の卒業生を送りだしてきた。

西洋史学は地理的には、ヨーロッパはもちろん、周辺地域、さらに南北アメリカ大陸までも視野に入れ、時代的には古代から現代に至る、実に数千年を対象としている。また伝統的に人文地理学もその対象としてきた。これら広範にわたる分野をカバーして教育・研究にあたる専任教員は、2022-23年度には教授4名、准教授1名、講師1名、助教1名で構成された。さらに多様な視点を提供し、教育を充実させるため、大学院演習に関しては総合文化研究科の教員2名から、また学部講義に関しては学外の多彩な非常勤講師陣（2022年度、2023年度ともに5名）から協力を得ている。

学部の専修課程は、毎年ほぼ20名程度の進学者を迎え、在籍学生数は2022年度41名、2023年度44名である。学部生に対しては、西洋史学特殊講義や西洋史学演習などを開講し、授業以外でも卒業論文作成の指導にあたっている。またティーチング・アシスタントを務める大学院生（博士課程）がサブゼミを運営し、卒業論文作成を支援している。大学院（欧米系文化研究専攻西洋史学専門分野）では毎年、博士課程3名程度、修士課程5名程度の入進学者を迎えており、在籍者は2022年度39名、2023年度39名である。伝統的な政治史、経済史に留まらず、社会史、宗教史、さらに異文化交流やジェンダーの問題など、国際情勢、研究動向の変化にも対応した、多様なテーマで教育、研究が行われている。授業は演習を中心としており、指導教員は時間外にも学位論文の作成指導を行っている。博士課程在籍中、多くの大学院生がイギリス・ドイツ・フランス・イタリア・スペイン・スイス・北欧・ロシア・アメリカなどに留学して現地の研究機関で研修し、博士論文の準備を行う（海外の大学で学位を取得する場合も多い）。

学会活動への参与においても精力的である。日本西洋史学会大会運営理事校を務め、また他の研究室とともに、財団法人史学会に理事、評議員、編集委員を送り、『史学雑誌』の編集や大会開催などの業務を遂行している。その他、ほとんどの教員、大学院生は日本ばかりでなく、各国の学会・研究会に理事・評議員・会員として関与している。また『国際歴史科学文献目録IBHS』（本部ローマ）、『国際中世学文献目録IMB』（本部リーズ（英国））をはじめ、国際的な文献目録の編集に研究室として協力している。さらに各教員は、自ら国内外で研究発表・雑誌編集・博論審査を行うとともに、さまざまな研究者と連携して、国際会議や講演会を定期的に開催し、その成果を公刊している。これらの会議、講演会には教員の他、大学院生、学部学生も報告者、あるいは準備運営委員として積極的に参加している。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

橋場 弦	教授	古代ギリシア史
勝田俊輔	教授	近世・近代ブリテン世界史
長井伸仁	教授	近代フランス史
池田嘉郎	教授	現代ロシア史
菊地重仁	准教授	西洋中世史

(2) 講師の活動

芦部 彰

在職期間 2019年4月1日～2024年3月31日

研究領域 ドイツ近現代史

主要業績

（研究テーマ）文部科学省科学研究費補助金、基盤研究（C）、芦部彰、研究代表者、「アデナウアー一期西ドイツの西側結合とナショナリズム：ザールラント帰属問題に注目して」、2020.4～2024.3

(3) 助教の活動

内田 康太

在職期間 2020年4月1日～2023年3月31日

研究領域 古代ローマ史

主要業績

(その他各種論著) [解説]「M・トゥッリウス・キケロと2度目の執政官職」、内田康太、『地中海学研究月報』、2022.4

[解説] (新刊紹介) 橋場弦著『古代ギリシアの民主政』、内田康太、『史学雑誌』、2023.2

(共同研究) 参画、慶應義塾大学言語文化研究所、「ラテン文学研究会」、2022～

(非常勤講師) 中央大学文学部、「ラテン語初級」、「ラテン語上級」、2022.4～2023.3

田瀬 望

在職期間 2023年4月1日～2024年3月31日

研究領域 近世フランス史

主要業績

(その他各種論著) [書評]「松浦義弘・山崎耕一編『東アジアから見たフランス革命』、風間書房、2021年」、田瀬望、『史潮』新91号、pp. 92-102、2022.6

[事典項目]「フリーメイソン」、田瀬望、日本18世紀学会『啓蒙思想の百科事典』編集委員会(編)『啓蒙思想の百科事典』丸善出版、2023.1

[新刊紹介]「工藤晶人著『両岸の旅人 イスマイル・ユルバンと地中海の近代』、東京大学出版会、2022年」、田瀬望、『都市史研究』10号、2023.10

(非常勤講師) 名城大学人間学部人間学科、「西洋文化史」、2022.4～2022.8、中部大学人文学部歴史地理学科、「ヨーロッパ史の文献を読む A ヨーロッパの歴史 B」、2022.4～2023.3、聖心女子大学現代教養学部史学科、「ヨーロッパ近代史Ⅱ」、2022.4～2023.3、学習院大学文学部史学科、「ヨーロッパ世界」、2022.9～2023.8、大阪大学人文学研究科、「世界史の考え方」、2022.10～2023.3、東京都立大学人文社会学部、「西洋史学特殊講義Ⅱ」、2022.10～2023.3、「外国史概説、西洋史学特殊講義Ⅱ」、2023.10～2024.3

(学会・委員活動) [所属学協会] 日本西洋史学会、2022.4～、都市史学会、2023.5～

[委員歴] 日仏歴史学会、幹事、2023.3～

(4) 外国人研究員・内地研究員

内川 勇太 (特任研究員、2021年度～2022年度)

長谷川 祐平 (特任研究員、2023年度)

小野寺 瑤子 (特任研究員、2023年度～)

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2022年度

「16世紀イングランドにおける浮浪者像の検討―「男らしさ」の観点から―」

「産業革命期における英国都市労働者の生活水準の動向」

「フランス革命初期「大恐怖」における情報伝播」

「アメリカ独立後のイギリスによるカナダ統治の変遷について」

「二重君主国における記念祭と王朝的愛国心の形成―アスペルン戦勝100周年記念祭を中心に―」

「1930年代から1950年代にかけてのドイツにおけるカトリック政治勢力の変容」

「大反乱後のイギリスのインド統治」

「1984-1985年イギリス炭鉱争議における労使関係上の争点」

「1889年パリ万国博覧会における植民地展示とその帝国意識への影響―セネガル村の事例を中心として―」

「ナポレオンによる「大陸軍軍報」の再考―イギリスに関する記述に注目して―」

「ヴァイキング・ダイアスポラにおけるノルウェー・ヴァイキングのアイスランド入植―『エギルのサガ』を参考に―」

「奴隷貿易と海上保険の関連性―奴隷貿易から見た海上保険と、海上保険から見た奴隷貿易―」

「イギリス1945年総選挙についての分析：労働者層の保守党への反感を中心に」

「19世紀イギリスにおける田園都市構想～現代日本のデジタル田園都市国家構想は実現可能か～」

「古代ローマの歴史記述におけるカルタゴ人とハンニバル」

2023年度

「19世紀イギリスの中産階級による犬の飼育文化」

「18 世紀イングランドのチャップブックと民衆文化」
「前 415 年アテナイの神像破壊・秘儀冒瀆事件をめぐる政治的対立」
「19 世紀イギリスにおける、友愛組合と保険会社について」
「ソヴィエト連邦のスポーツ体制に関する再評価」
「ドイツ東方植民期におけるドイツ人と北西スラヴ諸族の文化接触について」
「トルコ海峡およびモントルー条約が冷戦の開始にもたらした影響について」
「徴利禁止の克服過程におけるオリーヴィとレッシウスの思想及びその背景の比較」
「フットボールの起源を探して：エピスキュロス・ハルパストンと 19 世紀パブリック・スクールのフットボール」
「オーストリア第一共和国における「共和派」パラミタリズムの理論と実践——ユリウス・ドイチュの反ファシズムと初期の共和国防衛同盟——」
「12・13 世紀イングランドにおけるフォレスト縮小の諸相」
「独ソ戦初期におけるソ連の鉄道輸送」
「ヒトラーの平和レトリックにおける第一次世界大戦の影響と戦争イメージ —1925年から1932 年の演説、著作を中心に—」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

荻野美櫻子 「ダマスコスのヨアンネスにおける αἵρεσις としてのイスラーム」〈指導教員〉菊地重仁
石光真理 「19 世紀スコットランドのナショナリズムとユニオニズム：ヴィクトリア女王のスコットランド訪問を中心に」〈指導教員〉勝田俊輔
照屋雄介 「1663/64 年トルコ戦争における神聖ローマ帝国軍」〈指導教員〉勝田俊輔
中山勝貴 「20 世紀初頭における大セルビア主義の発展と第一次世界大戦の開戦原因—セルビアのコミタジ・チェトニクに着目して—」〈指導教員〉長井伸仁
弓岡弘樹 「14 世紀イングランドにおけるタウン&ガウンの関係と王権—オックスフォードを事例として—」〈指導教員〉菊地重仁

2023 年度

橋口遼太郎 「11～12 世紀のビザンツ帝国における「ローマ人」意識の研究」〈指導教員〉菊地重仁
岸本紗季 「フルンチョフ期ソ連におけるファッションと女性の日常生活—エストニアの事例と日ソ交流を中心に—」〈指導教員〉池田嘉郎
清水栞 「15 世紀前半パレンシア市におけるムスリム奴隷解放—なぜ有力ムスリム商人は解放活動を行ったのか—」〈指導教員〉菊地重仁
中川翼 「クマン・ナ・ゲール政権の対外政策構想および戦間期におけるブリテン帝国の変容」〈指導教員〉勝田俊輔
森智子 「戦後イタリアにおける反ファシズム：イタリア社会運動（MSI）の解党を求めた Parri 法案をめぐる議論を中心に」〈指導教員〉池田嘉郎
李彦博 「フリードリヒ・バルバロッサの対ドイツ諸侯統治—イデオロギーとプラクシスの考察を通して—」〈指導教員〉菊地重仁

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

(甲) (乙)

なし

2023 年度

(甲)

松本祐生子 「第二次世界大戦期および戦後のソ連社会：レニングラード包囲をめぐる祝賀とジェンダー」
〈主査〉池田嘉郎 〈副査〉長井伸仁・勝田俊輔・土屋好古・小田原琳
内川勇太 「7 世紀から 10 世紀前半におけるイングランド人の王国の形成」
〈主査〉菊地重仁 〈副査〉橋場弦・勝田俊輔・高山博・藤崎衛

(乙)

なし

26 社会学

1. 研究室活動の概要

東京大学における社会学の歴史は、社会学が「世態学」という名で初めて講じられた1878（明治11）年に遡る。そして、1886（明治19）年には「社会学」の名で独立の学科目となり、1893（明治26）年帝国大学に講座制が導入されたとき、文科大学に社会学講座が設置され、外山正一や建部遯吾らに支えられて大きく発展した。1919（大正8）年には社会学科となり、翌1920（大正9）年には2講座になった。その後、戸田貞三のもとで社会調査を取り入れた経験科学がめざされた。

戦後の日本の社会学を牽引したのは尾高邦雄や福武直らで、1961（昭和36）年には3講座となり、1960年代には産業社会学、農村社会学、知識社会学、実験社会学（小集団論）、政治社会学、経済社会学にわたって教授陣が整えられ、現代社会を社会学の観点から包括的に教育研究する基礎が築かれた。そして、これをもとに社会学は、文化人類学などと協力しつつ文学部から独立して一つの学部となることをめざしたが、1960年代末に起こった大学闘争の中でその構想は立ち消えとなった。

1974（昭和49）年に社会心理学専修課程の創設に心理学とともに協力し、1983（昭和58）年以降は大学院総合文化研究科の創設に協力した。1984年には4講座となった。1987（昭和62）年から、社会心理学および新聞研究所と協力してふたたび学部となることをめざしたが、新聞研究所の社会情報研究所への改組により、また、東京大学全体として大学院に重点をおいて改革を進めることになったため、1990（平成2）年以降は社会学研究科の部局化に向けて努力がなされた。

しかし、1993（平成5）年になって、人文科学研究科と協議して合同で1つの研究科として部局化することがめざされ、1995（平成7）年度からは、社会学と社会心理学は社会情報研究所の大学院部分とともに、人文社会系研究科の専攻のひとつとして社会文化研究専攻を構成した。その後、社会情報学は情報学環として独立し、社会学研究室は学部では人文学科の社会学専修課程、大学院では社会文化研究専攻の社会学専門分野を担当して今日に至っている。2021年度の教員数は、教授4名、准教授3名、助教1名であり、カヴァーする領域は主として学説・理論、家族、都市、地域、移民、ジェンダー、セクシュアリティ、世代、人口、階層、文化、福祉、医療、障害などである。

毎年前期課程から進学してくる学部学生は約50名。進学してくる学生の関心は多様であり、卒業論文のテーマも広い範囲におよんでいる。必修科目、演習、特殊講義をつうじて、系統的な基礎訓練とともに領域横断的な教育に力をいれている。

学部生の卒業後の進路は、これまで新聞、放送、出版などマスコミ関係に3分の1程度の学生が就職していたが、最近では金融やメーカー、コンサルティング業界に就職する者や、国家公務員・地方公務員になる者も増えてきた。さらに学部卒業生の約1割程度は、社会学その他の大学院に進学している。大学院修士課程入学者は外国人留学生を含めて10名前後である。かつて修士課程入学者はそのほとんどが博士課程に進学していたが、修士号取得後、国家公務員、研究所研究員、あるいは民間企業に就職する者も定着してきた。院生総数は50名ほどであり、研究テーマもきわめて多様である。部局化とともに博士号取得のための指導にも力をいれており、論文博士に加えて、課程博士を輩出している。

研究室全体でかかわっている活動としては、日本社会学会の活動がある。教員全員と多数の大学院生が会員として毎年大会などで活躍しており、機関誌『社会学評論』の発行にも大きく貢献している。また、ソウル大学社会学部、国立台湾大学のそれぞれと2年に1度、国際ワークショップを重ねてきており、その都度英文の会議録を発行している。このほか、各種の社会学関連の学会や研究会の運営や活動に教員や大学院生がそれぞれ深くかかわってきている。大学院生も、若手社会学者向けの雑誌『ソシオロギス』を毎年編集・発行している。

本研究室にも留学生は多い。もっとも多いのは中国・韓国からの留学生であり、研究生として1～2年過ごしてから大学院に進学し、社会学の博士号を取得して本国に戻り、活躍している卒業生もいる。そのほかアジア諸国や欧米からの留学生が在籍している年もある。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

白波瀬佐和子

専門分野 人口の社会学

在職期間 2006年4月～2024年3月

赤川学

専門分野 社会問題の社会学

在職期間 2006 年 4 月～現在

出口剛司

専門分野 理論社会学・社会学史研究

在職期間 2011 年 4 月～現在

祐成保志

専門分野 コミュニティの社会学

在職期間 2012 年 4 月～現在

井口高志

専門分野 医療社会学 ケアの sociology 認知症研究

在職期間 2018 年 10 月～現在

高谷幸

専門分野 移民研究 国際社会学

在職期間 2021 年 4 月～現在

瀧川裕貴

専門分野 数理社会学 計算社会科学

在職期間 2022 年 4 月～現在

(2) 助教の活動

税所真也

在職期間 2021 年 4 月～現在

研究領域 家族社会学 福祉社会学 社会政策

主要業績

(著書)

単著, 税所真也, 「成年後見制度と家族」日本家族社会学会編『家族社会学事典』丸善出版, 526-527 頁, 2023.12

単著, 税所真也 (胡澎・卞显乐訳), 『成年监护社会学』世界知識出版社, 全 370 頁, 2024.2

(論文)

単著, 税所真也, 「住居をめぐる課題と成年後見業務 成年後見人等による居住環境支援のあり方」『実践成年後見』民事法研究会, 101 号, 31-41 頁, 2022.10

(書評)

単著, 税所真也, 文献紹介, 「西下彰俊著『東アジアの高齢者ケア——韓国・台湾のチャレンジ』『家族社会学研究』日本家族社会学会, 35(1)号, 94 頁, 2023.4

単著, 税所真也, 文献紹介, 「松木洋人・中西泰子・本多真隆編著『基礎からわかる社会学研究法——具体例で学ぶ研究の進めかた』『家族関係学』日本家政学会家族関係部会, 42 号, 86 頁, 2023.12

(学会発表)

国際, 税所真也, 「成年後見を活用した高齢者の看取りにおける後見人の親密性に関わる研究」第十七回日中韓社会保障国際論壇, 陝西省西安市, 2023.8.27

(シンポジウム)

国際, 税所真也, 「意定監護制度対家庭関係」, 首届老龄文明国際会議, 江苏省道德发展智库, 江蘇省無錫市, 2023.10.14

国際, 税所真也, 「Socializing Family Relationships through Co-op Voluntary Guardianship」, 台大社會系×東大社會系雙邊論壇, 台湾大学, 台北市, 2023.12.7

国内, 税所真也, 「任意後見による家族に代わる支援——伝統仏教教団がどうかかわるか」, 真言宗智山派教化を考える会, 真福寺智山教化センター, 港区, 2023.12.14

(解説・啓蒙)

税所真也, 「UTokyo BiblioPlaza 東京大学教員の著作を著者自らが語る広場『成年後見の社会学』」
https://www.u-tokyo.ac.jp/biblioplaza/ja/G_00073.html, 2022.8

(受賞)

国内, 税所真也, サントリー文化財団海外出版助成, サントリー文化財団, 2023.3

(研究テーマ)

文部科学省科学研究費補助金, 研究代表者, 「高齢社会における日本と中国の家族のあり方——成年後見制度の運用からみた社会学的研究」, 2020～2023

文部科学省科学研究費補助金, 研究代表者, 「成年監護社会学」, 2022～2023

文部科学省科学研究費補助金, 分担研究者, 「コミュニティの支援的環境評価モデルの開発: ケア専門職の支援と住民まちづくりの連携」, 2023～2025

老人保健事業推進費等補助金, 検討委員会委員, 「地域ケア会議と生活支援コーディネーターの協働に関する調査研究事業」, 2023

公益財団法人たばこ総合研究センター研究助成, 研究代表者, 「判断能力が不十分な方の嗜好品摂取に関する社会学的研究」, 2023

(他機関での講義等)

非常勤講師, 亜細亜大学都市創造学部, 「少子高齢化社会論」, 2021.4～2022.9

非常勤講師, 大妻女子大学人間関係学部, 「女性とライフコース特論Ⅱ」, 2021.4～2024.3

非常勤講師, 東京学芸大学教育学部, 「社会理論と社会システム」, 2021.10～現在

非常勤講師, 東京学芸大学教育学部, 「社会福祉調査」, 2021.10～現在

非常勤講師, 立教大学コミュニティ福祉学部, 「福祉社会論」, 2022.4～2022.9

(学会)

国内, 社会政策学会学会幹事, 2020.5～2022.5

国内, 日本社会福祉学会編集事務局『社会福祉学』臨時査読委員, 2022.4～2022.5

国内, 社会政策学会『社会政策』編集委員, 2022.5～現在

国内, 日中社会学会『日中社会学研究』査読委員, 2023.3～2023.5

国内, 比較家族史学会理事, 企画委員, 2020.11～現在

国内, 東京大学高齢社会総合研究機構・ジェロントロジーアカデミー「金融と法」委員, 2021.4～現在

国内, 福祉社会学会編集委員会『福祉社会学研究』編集委員, 2023.7～現在

(学外組織)

国内, 生命保険文化センター特別研究会「家族が多様化する時代の保険のあり方に関する研究会」委員, 2023.4～現在

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2022 年度

「文化祭における演劇企画から見る中等教育のあり方について」

「社会保険中心社会における不安定労働問題と課題—男性稼ぎ主モデルを越えて—」

「「若者のコンサマトリ化」に関する研究—映画との関わりに着目して—」

「Twitter・Instagram における自己の分析—利用者へのインタビュー調査から—」

「災害ボランティアが「地域の一員」になるまで—愛媛県宇和島市吉田町の事例から—」

「地域の観光事業に参入する「よそ者」はいかなる経験をするか—千葉県銚子市を事例として—」

「逸脱する他者の声—「こちらあみ子」に見る抑圧と排除—」

「負の記憶の継承—ミュージアムを通じた社会記憶の形成と保存—」

「BL 読者の文化社会学—ゲイ表象と読者経験をめぐって—」

「街路の整備に住民が与える影響」

「都市の商業地域とその様態の変化—築地場外市場における商業活動の変化と地域アイデンティティの形成について—」

「なぜ女性ファンは女性アイドルを応援するのか—インタビュー調査から—」

「運動部マネージャーの男女比の偏り」

「大衆の消費行動の変遷—『応援』を軸に据えた消費のかたち—」

「地方における若者の人口流出とその対策」

「大学スポーツにおけるジェンダー格差—大学女子運動部員の語りをめぐって—」

「生きづらさの自覚とクレーム申し立て活動の実践」

「オンラインの「ゼミ」という小宇宙を探る—E. ゴッフマンの相互行為秩序論を援用して—」
「農業景観を活用した観光振興のためのマネジメントとガバナンス—北海道美瑛町の事例に着目して—」
「生活保護制度への若者意識—東京大学生へのインタビュー調査を通して—」
「ソーシャルメディアは分極化を拡大するか」
「ゴフマン理論から見る現代 SNS と自己」
「ゲストハウスを中心とするライフスタイル移住者のコミュニティ形成史」
「流行語大賞から考える格差の実感—2006 年と 2021 年の比較を通して—」
「開かれた子育てのための支援に関する研究—ホームスタートの活動に着目して—」
「都市空間の「広場化」と群衆の営み—1960 年代の新宿駅周辺におけるアングラ的活動を事例に—」
「ディズニー映画における女性像の変遷」
「地方における進学と地域コミュニティ—社会教育の側面から—」
「タレントプロデュースの変遷—「ヲタ活」から「推し活」へ—」
「戦後日本社会における若者の「反抗」—不易流行に注目して—」
「現代のコンテンツ消費」
「GIGA スクール構想における教育実践の考察—メディア情報リテラシーの視点から—」
「地方都市においてスポーツクラブがもたらす地域社会再構成の可能性」
「「令和の所得倍増」は可能なのか 福祉国家としての戦後日本を概観して考える」
「摂食障害とジェンダー —摂食障害は女性の病気なのか—」
「父親の働き方と育児参加—柔軟に働く父親へのインタビューを通して—」
「都市における「創造の場」の実相——金沢市民芸術村のフィールドワークを通じて——」
「地方移住を伴う現代的なライフスタイルの考察—移住者たちの語りから—」
「「新しい」文化を地域住民はどのように受容しているのか—「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」を事例としたインタビュー調査から」
「人口減少を前提とした地域活性化戦略—関係人口に注目して—」
「Balenciaga とトレンドの社会学」
「人口減少社会の地域活性化をいかに捉えるか——「関係人口」に着目して」
「IR に関する日本の諸言説の分析」
「『動機の語彙』の観点を出発点として見た、アマチュア合唱界の現状分析」
「女性ファッション誌と「女性らしさ」の変遷」
「「メンヘラ」誕生の社会的背景とその意味の変遷」
「心の復興と震災語り部の関わり—東日本大震災を事例とした分析—」
「人生の最終段階における事前の意思決定への社会的関心—人生会議ポスター騒動のレトリック分析を中心に—」
「生活困窮者自立支援制度の現状と課題—「新しい生活困難層」の包摂という観点から—」
「戦後日本社会と余暇」

2023 年度

「スクールカーストの生成メカニズムと発生条件に関する考察—男女別学中高一貫校出身者へのインタビューを基に—」
「障害当事者運動としての文学——市川沙央『ハンチバック』にみる「異化&統合」の戦略」
「集団間紛争と「関係の絶対性」」
「日本の大学入試におけるアフターマティブアクションについて」
「地域運営組織による地域づくりの社会的意義—島根県安来市比田地区の「えーひだカンパニー」を事例として—」
「「アニメ」における商業性と作家性との関係性—劇場版『名探偵コナン』作品における事例から—」
「歩行者に優しい公共空間の意義—「ケイパビリティ」の観点から—」
「阿部定の性愛の意味論的分析—死の領域へ延長する関係性とそこにおける身体の意味—」
「二次元アイドルファンの欲求—リアルアイドルファンとの比較を通して—」
「リアリティ番組の比較と分析—テレビと視聴者・社会の関係について—」
「競技かるた界の特性と諸課題—競技かるたの世界におけるプロ化をキーワードとして—」
「非正規雇用セクターにおけるコロナ禍での賃金動向と日本型雇用の関係性」
「文化施設のカフェ・レストランに対する期待と課題—都内の 5 つの事例から、文化施設側の視点を中心に—」
「「障害者」というラベルに関する考察—トゥレット症当事者へのインタビュー調査を通して—」

「アイデンティティの批判＝批評的構成という枠組み——ジェンダー規範による「予めの排除」とその「批判」から／へ——」

「「やりがい」の明確化および、階級による労働に対する志向性の差異の提示による「やりがい搾取」の批判能力
向上一A. Giddens の再帰的近代概念と P. Bourdieu の卓越化理論を通じて——」

「同郷者集団の役割に関する研究—沖縄県人会に着目して—」

「宿泊型ゲストハウスにおける共有スペースの機能」

「音楽活動の「場」の社会的役割」

「“高校野球文化”の特徴と背景」

「障害者虐待の社会構築—虐待言説のサイクルに着目して—」

「現代日本におけるレイシズム言説の特徴—ウトロ地区放火事件に対するコメントを手掛かりに—」

「地方都市の盛り場の生態に関する社会学的考察」

「「社会保障と税の一体改革」研究の検討と今後の社会保障改革の展望」

「ポスト震災の想像力——ポップカルチャー作品の内容と表現を対象として」

「SNS におけるニュースの拡散に寄与する要素の分析」

「都市の狼狽生と個性についての考察——コミュニケーションシステム論による歌舞伎町研究の再構成——」

「承認論を通じた「まなざしの地獄」の再考察—大量殺傷事件を手がかりにして」

「新制度学派組織論における価値の位置付け—日本企業の CSR 経営の制度化—」

「演劇創作において育まれる関係性とその要因・形成プロセス—演劇界の稽古場におけるよりよい関係性構築を目指して—」

「現代の反知性主義およびコロナ禍における反知性主義的行動の要因の考察」

「所属部活動をめぐる偏見意識について」

「現代におけるアイデンティティ構築としての地域ブランディング—観光広域ブランディングを題材に—」

「大学生の就職活動におけるジェンダー差—働き方に関する意識に着目して—」

「現代の台湾にみる「国家」とネーション—若者世代の台湾出身者のインタビュー調査から—」

「アートプロジェクトによるコミュニティ形成の根幹としてアートが存在することの意義に関する考察」

「「社会」の認識と経験——見田＝真木社会学理論の体系的再構成に向けて」

「コミュニケーションの直観解釈モデルの構築と応用—道徳基盤理論との接続とブログ記事の定量的分析を通して—」

「子どもの貧困支援としての居場所づくりにおける運営者の居場所づくりに対する意識——利用者の限定—非限定を軸とした比較——」

「競技としてのボディビルを行う者の態度とそこに至る過程—現役ボディビルダーの身体のとらえ方から読み解く—」

「図書空間における文化的活動とその社会的期待—大和市文化創造拠点シリウスへのインタビューを事例に—」

「現代日本における同性婚問題の対立の分析——保守／リベラルという枠組みを超えて——」

「社会的身分としての「オタク」——「オタク」を支えるアイデンティティ——」

「美術館におけるファッションの展示に関する考察」

「男性間の序列関係と装いの関連性についての検討」

「歴史修正主義はいかに受容されていたか——『正論』読者投稿欄の分析から——」

「医療にまつわる非科学的信念保持者への態度分析」

「女性芸人の第三波フェミニズム的实践とポストフェミニズム状況への影響」

「アロマンティック/アセクシュアルはいかにして不可視化されるか—当事者の語りから—」

「日本人の境界—スポーツがもたらす作用—」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

國重遥希 「女性家事育児責任者規範の相対化を通じた男性の実践に関する検討——家事育児を主として担う既婚男性へのインタビュー調査から」〈指導教員〉高谷幸

盧秀彬 「エミール・デュルケムの科学論—社会的事実と主観の時間的・空間的構造の関係をめぐって—」〈指導教員〉出口剛司

黄釋樟 「日本における LGBT 言説の形成—2000 年代以降の新聞の分析を手がかりに」〈指導教員〉赤川学

菊地原宏太 「1980 年代が産んだ異人論——ニューアカデミズムの思潮の中で生まれた異人論の背景にある時代
的構造をめぐって——」〈指導教員〉出口剛司
神山悦士 「日本における新自由主義の生成——政策理念に着目して」〈指導教員〉出口剛司
西出哲也 「低所得世帯の大学進学者による文化的実践——「公的援助を受ける大学進学者」に着目して——」〈指導
教員〉祐成保志
李聖美 「動物倫理にもとづく菜食者の社会関係と肉食主義規範との折衝——食実践と社会活動、自己呈示のあり
方に注目して——」〈指導教員〉赤川学
鄭世暲 「「論争中の病」の経験の脱正統化と抵抗：化学物質過敏症患者に関する医療社会学的研究」〈指導教員〉
井口高志

2023 年度

若松希絵 「家族の現在——家庭教育・復学支援と家族を事例に」〈指導教員〉出口剛司
於倩 「現代日本における自殺の「原因」と「対策」はどのように語られているのか——『自殺対策白書』（2007-
2016）を中心に——」〈指導教員〉出口剛司
陳壯壯 「「住宅市場の界」における中産階級の再生産戦略」〈指導教員〉祐成保志

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

(甲)

服部恵典 「「女性向け」アダルトビデオの社会学的研究——性的主体化と抵抗可能性」
〈主査〉赤川学〈副査〉祐成保志・高谷幸・佐藤健二・瀬地山角
武内今日子 「「男」「女」に当てはまらない性のカテゴリーが可能にした実践——1990 年代から 2010 年代の性的
少数者によるカテゴリー運用から——」
〈主査〉赤川学〈副査〉白波瀬佐和子・出口剛司・井口高志・杉浦郁子
金イェジ KIM Yeaji 「＜漫画＞のデジタル化と「現地化」の文化社会学：日本のデジタルコミックにおける韓国
ウェブトゥーンを事例として」
〈主査〉出口剛司〈副査〉赤川学・高谷幸・佐藤健二・茨木正治
塩谷昌之 「変容する趣味空間の研究——鉄道に焦点を当てて」
〈主査〉佐藤健二〈副査〉赤川学・祐成保志・神野由紀・辻泉
大和冬樹 「近隣効果分析の方法論および実証に関する研究」
〈主査〉祐成保志〈副査〉白波瀬佐和子・赤川学・藤原翔・川野英二

(乙)

なし

2023 年度

(甲)

坂井愛理 「訪問鍼灸マッサージ場面における感覚表現の相互行為分析」
〈主査〉出口剛司〈副査〉赤川学・祐成保志・井口高志・西阪仰
新田真悟 「タスクとスキルにみる高齢者の職業構造に関する実証研究」
〈主査〉白波瀬佐和子〈副査〉祐成保志・瀧川裕貴・藤原翔・麦山亮太
金希相 KIM Heesang 「日本における移民の居住格差に関する研究」
〈主査〉祐成保志〈副査〉白波瀬佐和子・赤川学・高谷幸・永吉希久子
呉先珍 OH Sunjin 「不確定性のユートピア——ジグメント・バウマンにおける時間からの疎外と解放の問題」
〈主査〉出口剛司〈副査〉赤川学・井口高志・高谷幸・澤井敦
金兌恩 Kim Taeun 「日韓の高齢夫婦からみる性別役割分業に関する実証研究」
〈主査〉白波瀬佐和子〈副査〉井口高志・高谷幸・金成垣・石田浩

(乙)

落合恵美子 「親密圏と公共圏の社会学 ケアの 20 世紀体制を超えて」
〈主査〉白波瀬佐和子〈副査〉赤川学・出口剛司・瀬地山角・佐藤健二

27 社会心理学

1. 研究室活動の概要

(1) 研究分野の概要

社会心理学は、人の社会的行動や認知の規定因を実証的に研究する経験科学であり、社会的状況における個人の行動や認知、集団・組織行動、文化と心理の関係など、幅広い研究テーマを扱う。

当社会心理学研究室は、1974年4月に創設（同年に文学部の専修課程、1976年4月に大学院社会科学研究科の専攻として設置）された比較的新しい研究室である。現在は、社会文化研究専攻の社会心理学専門分野として、教授4名、助教1名、特任助教1名で運営されている（2023年度時点）。それぞれの教員が個別にラボを運営しつつ、協力しあって学部生・大学院生の教育に従事している。

各々のラボでは、一方で人の神経・生理基盤にまで分け入り、他方で社会構造や文化へと視野を広げて、旧来の社会心理学を超えた人間知の構築を目指している。いずれのラボにおいても、各教員と大学院生の共同研究が数多く行われていること、また、海外の研究者や他学問領域の研究者とのコラボレーションによる国際的・学際的研究が多数行われていることが特徴的である。教員は共同研究者とともに、さまざまな学問領域の学会においてシンポジウムやワークショップを主催している。

なお、研究室所属の教員及び院生の最近の研究に関する詳しい情報は、社会心理学研究室ホームページ（<http://www.utokyo-socpsy.com/>）およびリンク先の各教員ラボのホームページに公開されている。

(2) 大学院の専攻・コースとしての活動

所属の大学院生は、指導教員主体の研究に参加するだけでなく、自らを主研究者とする研究活動を積極的に行っており、教員はそれをさまざまな形で支援している。大学院生の研究成果は、指導教員ごとのリサーチ・ミーティングのみならず、定期的で開催される社会心理学研究室全体のリサーチ・ミーティングでも議論され、さらに、国内外の学会の年次大会での発表や、専門学術誌や学術書等への掲載というかたちで公表されている。大学院生の多くは国際的に活動しており、海外の学会において英語で口頭発表を行ったり、国際学術誌に英語論文を投稿したりしている。

(3) 学会運営、研究誌の発行など、研究室としての活動

当研究室が組織として学会運営や研究誌発行の母体となることはないが、各教員は国内外の学会活動を盛んに行っている。具体的には、国内外の学術雑誌の編集長・編集委員として、あるいは投稿論文の審査者として、心理学、社会心理学および関連する諸領域の主要な雑誌の編集に参加している。さらに、日本心理学会、日本社会心理学会、日本グループ・ダイナミクス学会、科学哲学会、科学基礎論学会、応用哲学会、人間行動進化学会などの役職者（会長・常任理事・理事等）として、学会運営にも大きな貢献をしている。また教員の3名は、日本学術会議（第一部）の連携会員を務めている。

(4) 国際交流の状況

上述の通り、各教員が種々の国際共同研究プロジェクトに参加しており、複数の学問領域にまたがる国際交流も盛んである。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

亀田達也 教授

在職期間 2014年10月～2024年3月

専門分野 社会心理学、実験社会科学

唐沢かおり 教授

在職期間 2006年10月～現在

専門分野 社会心理学

村本由紀子 教授

在職期間 2011年10月～現在

専門分野 社会心理学

大坪庸介 教授

在職期間 2021年4月～現在

専門分野 社会心理学

(2) 助教の活動

岩谷舟真

在職期間 2021年4月～2024年3月

専門分野 社会心理学

主要業績

(書籍等出版物) [共著]『多元的無知—不人気な規範の維持メカニズム』、岩谷舟真 正木郁太郎 村本由紀子、東京大学出版会、2023.12

(論文) [学術雑誌]「ナッジ vs. ブースト：人々はより合理的になれるのか?」、本田秀仁 岩谷舟真 大瀧友里奈 植田一博、『認知科学』29巻3号、pp.390-403、2022.9

[学術雑誌]「Using nudges for water demand management: A field experiment for water conservation」、Yurina Otaki Shuma Iwatani Hidehito Honda Kazuhiro Ueda、*PLOS Water*、1巻10号、e0000057、2022.10.20

[学術雑誌]「Effect of asking questions and providing knowledge on attitudes toward organic foods among Japanese consumers」、Shuma Iwatani Hidehito Honda Yurina Otaki Kazuhiro Ueda、*Frontiers in Psychology*、14巻、2023.12.27

[学術雑誌]「保護責任者遺棄致死罪で起訴された被告人の性別が一般市民の量刑判断に与える影響」、向井智哉 湯山祥 松本祐馬 田中晶子 貞村真宏 岩谷舟真 井奥智大 綿村英一郎、『パーソナリティ研究』32巻3号、pp.138-140、2024.1

[学術雑誌]「母親による児童虐待事案における量刑判断、伝統的性役割態度、非難の関連」、向井智哉 井奥智大 岩谷舟真 貞村真宏 田中晶子 松本祐馬 湯山祥 綿村英一郎、『パーソナリティ研究』32巻3号、pp.179-187、2024.3

(その他各種論著) [総説・解説 (商業誌)]「制度の活用を促すために：多元的無知の知見から」、岩谷舟真、『日本の人事部 LEADERS (リーダーズ)』11巻、2023.3

[研究発表要旨 (国際会議)]「Even those who perceive COVID-19 as low risk engage in infection prevention behavior in Japan: COVID-19 infection prevention behavior as a social norm」、Shuma Iwatani Yukiko Muramoto、*Proceedings of the Annual Meeting of the Cognitive Science Society*、45巻、pp.1717-1723、2023.7

(講演・口頭発表等) [ポスター発表]「評判低下予測と感染予防行動の関連 関係流動性の調整効果に着目した検討」、岩谷舟真 村本由紀子、日本社会心理学会第63回大会、2022.9.14

「暗黙のルールの維持メカニズム：個人の認知と社会環境の観点から」、岩谷舟真、人間科学専攻／三田哲学会 講演会、2023.2.4

「Negative peer effects from learning partners online」、Shohei Yamamoto Shuma Iwatani Koki Shimazu、実験経済学とゲーム理論研究部会、2023.7.14

「多元的無知と文化：コロナ禍の社会に着目した検討」、岩谷舟真、第16回 KG-RCSP 合同ゼミ、2024.3.6

[ポスター発表]「Even those who perceive COVID-19 as low risk engage in infection prevention behavior in Japan: COVID-19 infection prevention behavior as a social norm」、Shuma Iwatani Yukiko Muramoto、the 45th Annual Conference of the Cognitive Science Society、2023.7.27

[ポスター発表]「個人の情報処理スタイルに応じた社会規範ナッジの効果 感染症禍の外出行動に着目した検討」、岩谷舟真 村本由紀子、日本社会心理学会第64回大会、2023.9.7

[ポスター発表]「関係流動性とソーシャルメディア中毒の関連 評判低下予測とネットワーク拡大欲求の媒介効果に着目した検討」、岩谷舟真 綿村英一郎、日本心理学会第87回大会、2023.9.15

[口頭発表 (一般)]「豪雨災害時における避難行動の地域差：「外部性」の認知が避難意図に及ぼす影響」、寺澤華織 岩谷舟真 村本由紀子、日本災害情報学会第27回学会大会、2023.10.28

[シンポジウム・ワークショップ パネル (公募)]「児童相談所に関する市民の知識と態度に関する調査」、岩谷舟真、日本子ども虐待防止学会第29回学術集会滋賀大会、2023.11.26

(受賞) 優秀発表賞、「豪雨災害時における避難行動の地域差：「外部性」の認知が避難意図に及ぼす影響」、寺澤華織 岩谷舟真 村本由紀子、日本災害情報学会、2023.11

(共同研究) [科学研究費助成事業]「多元的無知—不人気な規範の維持メカニズム」、研究成果公開促進費 (学術図書)：23HP5142、日本学術振興会、東京大学、2023.4～2024.3

[科学研究費助成事業]「デフォルト・ナッジの倫理的側面についての再検討：個人の情報処理スタイルに着目して」、岩谷舟真、若手研究：23K12857、日本学術振興会、東京大学、2023.4～2026.3

金恵璘

在職期間 2019年8月～現在

専門分野 社会心理学、実験社会科学

主要業績

(講演・口頭発表等) [口頭発表]「社会情報は政治的偏見に基づくバイアスを低減できるか？—情報カスケードパラダイムを用いた検討—」、金恵璘・森隆太郎・Hugo Mercier・亀田達也、第25回実験社会科学カンファレンス、2022.10.22

[口頭発表]「社会情報は政治的偏見に基づくバイアスを低減できるか？—情報カスケードパラダイムを用いた検討—」、金恵璘・森隆太郎・Hugo Mercier・亀田達也、第15回日本人間行動進化学会大会、2022.12.11

[企画セッション発表]「社会変革基盤の共創における共生インタラクション（良い集合的決定の心理・インタラクション基盤の究明）」、金恵璘、人工知能学会全国大会 第37回、2023.6.8

[口頭発表]「社会情報は政治的偏見に基づくバイアスを低減できるか？」、金恵璘・森隆太郎・Hugo Mercier・亀田達也、日本社会心理学会第64回大会、2023.9.8

[ポスター発表]「社会情報は政治的偏見に基づくバイアスを低減できるか？情報カスケードパラダイムを用いた実験的検討」、金恵璘・森隆太郎・Hugo Mercier・亀田達也、日本心理学会第87回大会、2023.9.15

[口頭発表]「政治的偏見が生じうる場面においてインタラクションは意思決定の質を高めるか？」、金恵璘・森隆太郎・Charles de Dampierre・Hugo Mercier・亀田達也、第16回日本人間行動進化学会大会、2023.12.3

[国際ワークショップ]「Does social information improve decision making in political contexts? An experiment with the information-cascade paradigm」、Hye-rin Kim、Asian Advanced Workshop on Social Decision Making and Collective Intelligence、2023.12.17

(受賞) 奨励論文賞、「分配の正義とリスク下の意思決定：効用モデルと瞳孔反応による検討」、小谷侑輝・齋藤美松・金恵璘・小川昭利・上島淳史・亀田達也、日本社会心理学会、2022.9

若手口頭発表賞、「社会情報は政治的偏見に基づくバイアスを低減できるか？—情報カスケードパラダイムを用いた実験的検討—」、金恵璘・森隆太郎・Hugo Mercier・亀田達也、第15回日本人間行動進化学会、2022.12

特別優秀発表賞、「社会情報は政治的偏見に基づくバイアスを低減できるか？—情報カスケードパラダイムを用いた実験的検討—」、金恵璘・森隆太郎・Hugo Mercier・亀田達也、日本心理学会第87回大会、2023.9

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2022年度

「推論 (Reasoning) および論証 (Argument) の社会的な機能について フェイクニュース・子供の推論・集団的議論の概観に基づく分析」

「気候変動政策が予測に与える効果の実験的測定」

「共有現実の形成に見るエコーチェンバーと態度変化に関する検討」

「寄付行動における世代内連帯の有無及びそのメカニズムに関する研究」

「他者の信頼行動がパートナー選択に与える影響—社会的2腕バンディット課題と強化学習を用いた検討—」

「現代的性差別 (modern sexism) の軽減と、それによる行動意図の変容」

「サブタスクの存在がメインタスクのモチベーションに与える影響：暗黙理論とタスクの目的に着目して」

「国際的な政治謝罪の事例から検討する、許しを促すのに有効な謝罪の方法」

「豪雨災害時における避難行動の地域差：「外部性」の認知の差異が避難意図に及ぼす影響」

「インターネットの匿名性と非親近性がSNSの誹謗中傷に及ぼす影響」

「誤情報を信じないために——二重過程理論に基づく真実性の錯誤の低減——」

「暗黙理論がヘルプシーキングに与える影響：印象評価の2次元に着目して」

「性別が管理職としての評価に与える影響——リーダーシップ行動の2次元からの検討——」

「間接互惠状況における協力意図コミュニケーションの創発に関する実験研究」

「推測される「うちの夫」と「よその夫」の性役割意識が家事の分担や満足度に与える影響」
 「地方圏出身の若年層が居住場所に求める事柄の検討」
 「評判の蓄積が意図シグナルの進化に及ぼす影響」
 「個人情報と預かるリスク管理者に対する信頼の規定因：スマートシティ事業に関連して」
 「仕事と育児の両立支援制度のあり方が女性のワーク・ファミリー・コンフリクトに与える影響—周囲の性役割意識の認識に着目して—」

2023 年度

「学校環境における心理的安全性概念の再検討と多元的無知との関連」
 「政治的謝罪における謝罪文言と世論の評価の関係についてのアーカイブ調査」
 「2 種類の能力評価予測が少数派の意見表明意図に与える影響」
 「居住地流動性・関係流動性が自己開示や援助要請を行う他者への認知に与える影響の検討」
 「口コミ情報が商業施設への印象に及ぼす影響：ビジネスホテルの施設と従業員への口コミの効果の比較」
 「リーダーの暗黙理論がチームマネジメントに与える影響—成員の努力経験の有無と分野に着目して—」
 「謝罪が職場の人間関係に及ぼす影響の検討」
 「アイドルのレコード・CD ジャケットの化粧の変遷の分析」
 「従業員のプロアクティブ行動に対する目標設定制度の影響」
 「集団規範からの逸脱者は他者の逸脱行動を促進するのか：逸脱者の地位に着目した検討」
 「大学の部活動におけるリーダー・メンバー間の関係性が集団パフォーマンスに与える影響」
 「大学生の就職活動の面接場面と友人との交流場面における自己呈示」
 「不平等は正によって生じる新たな不平等の認知が被搾取者の公平感に与える影響」
 「確率的変動環境におけるヒトの探索的意思決定に関する実験研究」
 「親同士及び職場内のコミュニティにおける働く母親に対する評価の検討」
 「宗教集団における「使い捨てパニッシャー」の可能性：文化進化シミュレーションを用いた検討」

他、特別演習 1 名

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

栗田真帆 「被災地支援での恩送りを支える感情—感謝と負債感に着目して—」〈指導教員〉亀田達也
 井原嘉之 「チャットボットの機能認知に関する研究—悩みを開示する相手として—」〈指導教員〉唐沢かおり
 加藤由衣 「How evaluation and causal attribution affect paternity leave in Japan（評価と原因帰属が男性の育児休業取得に及ぼす効果）」〈指導教員〉村本由紀子
 高橋孝太郎 「自己制御と利他性の共通基盤の探索—遅延割引と社会割引課題を用いて—」〈指導教員〉亀田達也
 高橋茉優 「世代を超えた協力を作るには？—後続世代の存続に着目して—」〈指導教員〉亀田達也
 森隆太郎 「離れうることは集まることを助けるか？—ゲーム実験を通じた検討」〈指導教員〉亀田達也

2023 年度

安藤蒼太 「企業の謝罪方法が信頼性の知覚に与える影響」〈指導教員〉大坪庸介
 坂本遼太郎 「リスク傾向が適応度に与える影響の性別による調整効果」〈指導教員〉大坪庸介
 菅沼秀蔵 「集団での探索における認知・行動的メカニズムの検討」〈指導教員〉亀田達也
 鈴木悠祐 「フェイクレビュー存在下における、EC サイト・評判システムの有効性の検討：マルチエージェントシミュレーションと購買データを活用して」〈指導教員〉亀田達也

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

(甲)

黒田起吏 「Behavioral and neuro-cognitive bases for emergence of shared realities through interaction（相互作用を通じた共有現実の創発を支える行動・認知神経基盤）」
 〈主査〉亀田達也 〈副査〉唐沢かおり・村本由紀子・大坪庸介・本田秀仁
 内藤碧 「計算論モデリングによる集合知の認知基盤の実証的研究」
 〈主査〉亀田達也 〈副査〉唐沢かおり・村本由紀子・大坪庸介・片平健太郎

(乙)

なし

2023 年度

(甲)

ターン有加里ジェシカ 「Ideal Burden-Sharing in a Heterogeneous Group and the Reality (非対称集団におけるコスト分担の理想と現実)」

〈主査〉唐沢かおり 〈副査〉亀田達也・村本由紀子・大坪庸介・橋本博文

鄭珪熙 JUNG Kyu hee 「幸福感とシャーマンフロイデの関係—自己高揚と正義動機を中心に—」

〈主査〉唐沢かおり 〈副査〉亀田達也・村本由紀子・大坪庸介・尾崎由佳

(乙)

なし

28 文化資源学

1. 研究室活動の概要

(1) 研究分野の概要

2000 年度に創設された研究室である。正しくは文化資源学研究専攻といい、大学院のみで、学部に対応する専修課程を持たない。文化資源学と文化経営学の 2 つのコースから成る。

2 コースに再編されたのは 2015 年度からのことであり、それ以前は文化経営学、形態資料学、文字資料学（文書学・文献学）で構成されていた。後 2 者を統合して文化資源学コースとし、文化経営学コースの前に置く構成はつぎのように発想された。

世界には、「かたち」と「ことば」の膨大な蓄積がある。文書とは書かれた「ことば」、文献とは書物になった「ことば」である。多くの人文系・社会科学系の学問は、もっぱらこれら「ことば」を相手にしてきた。ところが、現代では学問領域があまりにも細分化されたばかりか、情報伝達技術の発達で「ことば」とそれを伝えるメディアとの関係を希薄なものに変えてしまった。一方、「かたち」を研究対象とする既成の分野は、本研究科においては美術史学と考古学ぐらいだが、いったん学問領域が設定されると、おそらくそこからは無数の「かたち」が視野の外へと追いやられてしまう。文化資源学では、さらに「おと」の問題も視野に入れている。ここでは「おと」という目には見えないものが、どのような「かたち」（身体、楽器、音符、楽譜、音楽学校、コンサートホール、レコード、テープレコーダー、CD、音楽配信サイトなど）をともなう生まれ、伝わるのかをも考えようとしている。

「文化資源学 Cultural Resources Studies」（resource は泉に臨むという意味）とは、いわば既存の学問体系の側に立つことよりも、体系化のもとになった資料群の中に分け入ることから始まる。文化を根源に立ち返って見直し、資料群から多様な観点で新たな情報を取り出し、社会に還元することを目指している。具体的には、史料館、文書館、図書館、博物館、美術館、劇場、音楽ホール、文化政策、文化行政、文化財保護制度などの過去と現在と未来を考えようとするものだ。

2022 年度担当教員（文化資源学＝中村雄祐教授、野村悠里准教授、高岸輝教授（美術史学と兼任）、西村明教授（宗教学・宗教史学と兼任）、吉田寛准教授（美学・芸術学と兼任）、文化経営学＝小林真理教授、松田陽准教授、大向一輝准教授（次世代人文学開発センターと兼任）、アンネグレート・ベルクマン客員准教授、藏田愛子助教、さらに 2023 年度よりバーバラ・ガイルホン客員教授）の専門分野は、文化資源学が既成の学問領域を横断するトランス・ディシプリナリーな性格を有することを反映して、美学・芸術学、美術史学、博物館学、音楽学、演劇学、芸能史、書物史、社会学、中国語・中国文学、政策科学、法学、歴史学、国際協力論、開発研究、文書学、考古学などと多彩である。さらに、学内では史料編纂所、総合研究博物館、東洋文化研究所、埋蔵文化財調査室と連携し、学外に対しては、国立西洋美術館、国文学研究資料館から併任教授を招いている。

(2) 大学院専攻・コースとしての活動

2022 年度の修士課程入学者は 7 人（うち社会人学生が 5 人）、博士課程入学者が 2 人、2023 年度の修士課程入学者は 10 人（うち社会人学生が 4 人）、博士課程入学者が 2 人（うち社会人学生が 1 人）であり、社会人に対して門戸を開いている専攻である。それは、大学を社会に対して広く開いていこうとする意思表示であり、本研究科にあっては文化資源学研究専攻がその最先端にある。

社会人学生は、民間の企業に勤めている者や、国公立の文化機関等を職場にしている。社会人が大学に戻って再教育を受けることや、学部から直接にあがってきた学生に対しては在学中から社会の現場に出るようなインターンシップなどの制度を今後とも充実させていきたいと考えている。

また特筆すべき活動として以下のものが挙げられる。

・文化資源学フォーラムの開催

「文化資源学フォーラムの企画と実践」という授業を通じて、学生の企画により、一般に広く文化資源学の課題を問いつけるフォーラムを、毎年開催してきた。2022 年度のテーマは「伝統芸能を未来に継承するには 一国立劇場おきなわの事例を通して」、2023 年度は「紙上座談会：「推し」文化を語る 一将来の学術研究に向けて」であった。これらを含め、すべての回の開催記録が研究室ホームページに掲載されている。

(3) 学会運営、研究誌の発行など

2002 年に本研究室を中心として学内外の文化資源学に関心を持つ研究者、実務家の集まりとして文化資源学会を設立した。また機関誌『文化資源学』を年一回発行し、2022 年 6 月に第 20 号、2023 年 6 月に第 21 号を刊行した。2022 年度の会員数は 325 人である。

(4) 国際交流の状況

2022 年度研究生に 1 名の外国人留学生（イタリア）を受け入れている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

中村 雄祐（文化資源学）
野村 悠里（文化資源学）
高岸 輝（文化資源学／美術史学）
西村 明（文化資源学／宗教学宗教史学）
吉田 寛（文化資源学／美学芸術学）
小林 真理（文化経営学）
松田 陽（文化経営学）
大向 一輝（文化経営学／次世代人文学開発センター）

(2) 助教の活動

藏田 愛子

在職期間 2022 年 4 月～現在

研究領域 文化資源学

主要業績

（書籍等出版物）[分担執筆]『蘭花百姿—東京大学植物画コレクションより』、東京大学総合研究博物館編、寺田鮎美 藏田愛子 池田博 清水晶子 邑田仁 邑田裕子 根本秀一 遊川知久 中島睦子 松原始 西野嘉章 執筆、誠文堂新光社、2022.5.20

[単著]『画工の近代—植物・動物・考古を描く』、藏田愛子、東京大学出版会、2024.1.31

（論文）[大学研究機関紀要]「描かれた花菖蒲—明治神宮御苑花菖蒲図譜を手がかりに」、藏田愛子、『神園』27 号、pp.34-46、2022.5.3

[論文集（書籍）内論文]「植物学者と絵画の周辺」、藏田愛子、『ユリイカ 特集—牧野富太郎の世界』55 巻 5 号、pp.211-217、2023.3

（その他各種論著）「画工の仕事—渡部鉄太郎と高屋肖哲が描いた植物画」、藏田愛子、東京大学総合研究博物館編『蘭花百姿—東京大学植物画コレクションより』、pp.17-24、2022.5.20

「東京美術学校出身者による学術見本の制作に関する調査研究—佐藤醇吉関連資料の調査を中心に—」、藏田愛子、『鹿島美術研究（年報第 39 号別冊）』、pp.38-46、2023.7

「美術展覧会の中の植物」、藏田愛子、展覧会図録『練馬区立美術館コレクション+ 植物と歩く』、pp.62-66、2023.7

（受賞）東京大学第四回而立賞、2023.4

（共同研究）[科学研究費助成事業]「近代日本の植物画に関する基礎的研究」、藏田愛子、基盤研究（C）：22K00160、日本学術振興会、東京大学、2022.4

（社会貢献活動）[コメンテーター] セミナー・ワークショップ、オンライン講演会＋ワークショップ「いつからでも始められる人文情報学」（大向一輝氏講演）へのコメント、東京大学文化資源学研究室、2022.9.11

[講師] セミナー・ワークショップ、令和 5 年度学芸員専修コース「サイエンス&アート：植物標本と植物画」、講義「歴史的植物画とそのアーカイブ化」を担当、藏田愛子、東京大学総合研究博物館、2023.11.13

(3) 外国人教員の活動

特任准教授 Bergmann Annegret
在職期間 2020 年 4 月～2023 年 3 月
研究領域 文化経営学・演劇史

特任教授 Barbara Geilhorn
在職期間 2023 年 10 月～現在
研究領域 文化経営学・演劇学

主要業績

（書籍出版物）[共著] Barbara Geilhorn (with Linda Flores, eds), 『Literature After Fukushima. From Marginalized Voices to Nuclear Futurity』 Routledge、2023

[共著] Barbara Geilhorn (with Judith Arokay and Kristina Iwata-Weickgenannt, eds.), 『Bunron』 10、2023 (Online)

[共著] Barbara Geilhorn (with Judith Arokay and Kristina Iwata-Weickgenannt, eds.), 『Bunron』 9、2022 (Online)

<https://hasp.uni-heidelberg.de/journals/bunron/issue/view/1137>

(論文) Barbara Geilhorn, Between Trauma Processing, Emotional Healing, and Nuclear Criticism—Documentary Theatre Responding to the Fukushima Disaster. In: (with Linda Flores, eds): Literature After Fukushima. From Marginalized Voices to Nuclear Futurity. Routledge, 109-23、2023

<https://www.routledge.com/Literature-After-Fukushima-From-Marginalized-Voices-to-Nuclear-Futurity/Flores-Geilhorn/p/book/9781032258577>

Barbara Geilhorn, (with Linda Flores): Introduction. In: (with Linda Flores, eds): Literature After Fukushima. From Marginalized Voices to Nuclear Futurity. Routledge, 1-8、2023

<https://www.routledge.com/Literature-After-Fukushima-From-Marginalized-Voices-to-Nuclear-Futurity/Flores-Geilhorn/p/book/9781032258577>

(講演・口頭発表等) Barbara Geilhorn, Cultural exchange between Tōhoku and the urban centers – The triple disaster as a trigger of cultural decentralization, “Decentering Japanese Performance” lab, University of California, Santa Barbara, 2-5 June、2022.2.6

Barbara Geilhorn, Co-organizer of the International Symposium Art in the Countryside: Symposium on Art and Regional Revitalization through Case Studies from Japan (with Gunhild Borggreen University of Copenhagen) at the DIJ Tokyo, 12-14 August、2022.8

Barbara Geilhorn, A Small Global City in the Making? – The Toyooka Theater Festival in the context of global cultural flows and rural revitalization. Art in the Countryside: Symposium on Art and Regional Revitalization through Case Studies from Japan, DIJ Tokyo 12-14 August、2022.8.14

Barbara Geilhorn, Co-organizer of the 4th Tanaka Symposium in Japanese Studies Humans and Nature in Crisis: Japanese Literature and Environmental Humanities (with Linda Flores) at Oxford Pembroke College, 28 October、2022.10

Barbara Geilhorn, Arts and Regional Revitalization in Japan. AAS-in-Asia in Daegu, 24-27 June、2023.6.25

3. 卒業論文等題目

(1) 修士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

文化資源学専門分野

八柳サエ 「幕末の横浜における西洋人と装肖像画の成立と展開—イタリア人蚕種商人旧蔵の矢内舎柳甫による作例を中心に—」〈指導教員〉高岸輝

加藤奈月 「中国の文献における珊瑚と琅玕の関係」〈指導教員〉野村悠里

山内棕子 「日本における絵本原画展の変遷と原画保存の意義」〈指導教員〉野村悠里

文化経営学専門分野

高口葵 「地域メディアから構想するアーカイブズの可能性 『地域雑誌 谷中・根津・千駄木』を題材として」

〈指導教員〉松田陽

森本清香 「子どもの文化芸術体験機会に関する研究：茨城県公立美術館を事例として」〈指導教員〉小林真理

2023 年度

文化資源学専門分野

重信祥太 「近世以降における古墳と地域との関係性～東京 23 区内に墳丘が現存する古墳を事例にして～」〈指導教員〉松田陽

文化経営学専門分野

松本隼樹 「自治体文化行政における職員の専門性に関する研究」〈指導教員〉小林真理

岡本彩 「文化資源と自然資源を扱うユネスコプログラムの重複登録に関する調査研究—日本におけるユネスコ世界ジオパーク、ユネスコエコパーク、世界遺産に着目して—」〈指導教員〉松田陽

河野隼司 「著作権法改正の政治力学—令和 2 年度著作権法改正に着目して—」〈指導教員〉小林真理

立石訓人 「公立劇場・音楽堂の経営への事業評価の作用に関する研究」〈指導教員〉小林真理

渡邊倫 「日本人移民・移住者が地域に遺した文化資源に関する調査研究」〈指導教員〉松田陽

(2) 博士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

(甲)

文化資源学専門分野

渡邊麻里 「歌舞伎<イヤホンガイド>の誕生—音声メディアの展開と解説文化—」

〈主査〉小林真理 〈副査〉中村雄祐・野村悠里・古井戸秀夫・神山彰

文化経営学専門分野

武田康孝 「洋楽放送に関する文化経営学的考察—組織体制と番組制作者の視点から—」

〈主査〉小林真理 〈副査〉中村雄祐・野村悠里・渡辺裕・細川周平

李貞善 LEE Chungsun 「記憶の場としての国連記念公園：戦争墓地の文化遺産化」

〈主査〉松田陽 〈副査〉小林真理・西村明・本田洋・木宮正史

菅野幸子 「文化政策の形成過程における影響要因——1970 年代の英国にみる文化政策の構造転換とその現代的意義——」

〈主査〉小林真理 〈副査〉中村雄祐・松田陽・河島伸子・片山泰輔

(乙)

なし

2023 年度

(甲)

文化資源学専門分野

高橋舞 「バッハ鍵盤作品における演奏の継承と変遷—楽譜資料および録音資料に基づく演奏研究—」

〈主査〉吉田寛 〈副査〉中村雄祐・小林真理・大向一輝・太田峰夫

(乙)

なし

29 韓国朝鮮文化

1. 研究室活動の概要

本研究室は2002年4月1日、人文社会系研究科附属文化交流研究施設朝鮮文化部門を母体に開設された。大学院のみの独立専攻で、学部専修課程は設けられていない。大学院レベルにおいては、日本で初めて開設された韓国朝鮮文化に関する総合的な教育・研究組織である。

(1) 研究分野の概要

韓国朝鮮を研究対象とする歴史学1名、言語学1名、文化人類学1名、社会学1名の合計4名の教員で構成される。また、外国人客員教員（特任准教授）1名が在籍している。多様な方法論によって韓国朝鮮文化の解明に取り組み、総合的な韓国朝鮮文化研究を目指している。各教員は、文献資料の分析と現地での実地調査や資料収集の双方を重視しながら研究・教育を行なっている。

(2) 大学院の専攻・コースとしての活動

2002年度に修士課程（定員12名）が開設され、2004年度から博士課程（定員6名）が増設された。2007年度までは、専攻内は韓国朝鮮歴史社会コース、韓国朝鮮言語思想コース、北東アジア文化交流コースの3コースに分かれていたが、2008年度より韓国朝鮮歴史文化コース、韓国朝鮮言語社会コースの2コースに改組した。

専攻全体が有機的な関連をもって運営されており、総合的な韓国朝鮮文化の教育が行われている。学生には研究言語としての韓国朝鮮語に関する十分な運用能力が求められ、実力が不十分な学生に対しては支援プログラムを準備している。

各教員は学部教育にも関与し、専攻研究分野と関係の深い東洋史学、言語学、社会学など、各専修課程の講義・演習を担当している。

(3) 研究室としての活動

1. 東京大学コリア・コロキウム

2003年度より国内外の韓国朝鮮に関する専門家による講演会を主催している。一般市民にも開放し、公開で行なっている。2022年度からは、これまでの実績を踏まえつつも、本専攻の教育研究活動とより密接に連携した形で伝統と現代の両面から韓国朝鮮の文化・社会に対する関心を喚起し、専門的な理解を深めるための機会として本事業を位置づけなおし、積極的に展開することとした。2022年度はオンラインで3回、2023年度は対面・オンライン併用で3回開催した。

2. 講演記録の刊行

『東京大学コリア・コロキウム講演記録』2022年度（2023年3月）、2023年度（2024年3月）

3. 紀要の刊行

研究室の紀要『韓国朝鮮文化研究』第22号第1分冊（2023年3月）・第2分冊（2023年5月）、第23号（2024年3月）を刊行した。

(4) 国際交流の状況

ソウル大学校（韓国）、高麗大学校（韓国）、釜山大学校（韓国）、成均館大学校（韓国）、イリノイ大学（米国）と交流協定を締結している。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

韓国朝鮮歴史文化コース

教授 六反田豊 韓国朝鮮中世近世史

韓国朝鮮言語社会コース

教授 福井玲 韓国朝鮮語学・言語学

教授 本田洋 社会人類学・韓国朝鮮文化研究

准教授 金成垣 社会学・社会政策論

准教授 伊藤智ゆき 言語学・音韻論・音声学

特任准教授 李義鍾 韓国朝鮮語学・言語学（2021年4月1日～2024年3月31日）

(2) 助教の活動

澁谷 秋 (2021 年 4 月 1 日～2024 年 3 月 31 日)

研究領域：韓国朝鮮語学・書誌学

主要業績：

(論文) 澁谷秋、「色彩名詞召請の語彙変遷過程について」、『韓国朝鮮文化研究』22 巻 1 号、2023.3.10、79-89 頁

(非常勤講師) 東京大学東洋文化研究所、2022.4～、学習院大学、2023.4～

(学会・委員活動) 韓国国語学会、2022.6～

(3) 外国人教員の活動

特任准教授：李義鍾

在任期間：2021 年 4 月 1 日～2024 年 3 月 31 日

研究領域：韓国語学

担当講義：韓国朝鮮語文法研究 (3)、韓国朝鮮文化交流演習、韓国朝鮮語運用法 2

主要業績：

(論文) 李義鍾・朴鎮浩、「選択疑問文と離接の關係に関する言語類型論的考察」、『言語』vol.45、no.3、韓国言語学会、2023.9、829-857 頁

李敏・李義鍾、「非典型的疑問文の韓中対照研究」、『瀛洲語文』vol.55、瀛洲語文学会、2023.10、69-91 頁

李義鍾・朴鎮浩、「同意および共感の回答表現「그러게」の意味と使用条件」、『言語』vol.48、no.3、韓国言語学会、2024.3、93-125 頁

李義鍾、「副詞「吳」の「不容」用法について」、『韓国学研究』vol.88、高麗大学校韓国学研究所、2024.3、113-148 頁

(学会発表) 李義鍾、「不可能性の意味の下位類型と具現」、第 17 回韓国言語類型論学会夏季学術大会 (韓国)、ソウル大学、2022.8.26

李義鍾 朴鎮浩、「選択疑問文と離接に関する一考察」、2022 韓国言語学会冬季学術大会 (韓国)、オンライン、2022.12.10

3. 卒業論文等題目

(1) 修士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

韓国朝鮮歴史文化コース

竹内誉貴 「朝鮮仁祖期の君臣関係—君臣間の政治議論から見た王権の性格—」(指導教員) 六反田豊

韓国朝鮮言語社会コース

劉崇雨 「韓国の家庭祭祀実践と家族の再構築——プロテスタント信者の事例を中心に」(指導教員) 本田洋

石川峻 「朝鮮語に変則用言と周辺用言の再構に関して」(指導教員) 福井玲

檜作奈々子 「現代韓国における男女の意識の隔たりをどう捉えるか —江南駅殺人事件と安熙正性暴力事件に見る社会構造的要因—」(指導教員) 金成垣

劉国強 「現代平安北道方言における社会言語学的研究—龍川方言の命令形を中心に—」(指導教員) 福井玲

2023 年度

韓国朝鮮言語社会コース

武田光司 「韓国語の原因・理由表現の使用条件についての考察 —後行節のモダリティと文末形式を中心に—」(指導教員) 伊藤智ゆき

浦本紗希 「日韓共作小説における翻訳の意味—「愛のあとにくるもの」を題材に—」(指導教員) 本田洋

渡邊優夏子 「国民基礎生活保障法以前の韓国の貧困—『保健福祉 70 年史』の分析を通して—」(指導教員) 金成垣

中川咲恵 「在日コリアン若者世代のアイデンティティを捉え直す—韓国学校卒業生の事例から—」(指導教員) 本田洋

(2) 博士論文執筆者・題目一覧

2022 年度

(甲)

韓国朝鮮歴史文化コース

金兌垠 KIM Taeun 「東アジアにおける『東醫寶鑑』の成立と医学思想に関する研究—道教医学と儒教思想の反映様相に着目して—」

〈主査〉六反田豊 〈副査〉本田洋・横手裕・川原秀城・長谷部英一

韓国朝鮮言語社会コース

許秦 XU Qin 「現代中国延辺朝鮮語の音響特徴に対する実験音声学的研究—若い世代の話者を中心に—」

〈主査〉福井玲 〈副査〉金成垣・長屋尚典・伊藤智ゆき・李勝勲

(乙)

なし

2023 年度

(甲)

韓国朝鮮歴史文化コース

Smimov Pavel 「高麗時代官僚制度研究」

〈主査〉六反田豊 〈副査〉本田洋・佐川英治・森平雅彦・豊島悠果

韓国朝鮮言語社会コース

澁谷秋 「『續三綱行實圖』研究」

〈主査〉福井玲 〈副査〉本田洋・六反田豊・河崎啓剛・藤本幸夫

(乙)

なし

30 次世代人文学開発センター

1. センター活動の概要

1966年（昭和41年）に文学部各専修課程研究室や講座を超えて新しい研究を展開するために文学部附施設として創設された文化交流研究施設が前身であり、改組により2005年（平成17年）から現在の名称となった。センターは人文社会系研究科・文学部に所属し、研究を主体とした活動を行なう。したがって、センターにはほかの研究室のように学部学生・大学院生定員はない。センター主任は2005年（平成17年）から小佐野重利教授、2013年度（平成25年度）から小島毅教授、2019年度（令和元年度）から芳賀京子教授、2023年度（令和5年度）から再び小島教授が務めている。2018年度（平成30年度）に以下の3部門に再編成された。

a. 文化交流学部部門（〈東アジア海域思想文化〉〈地中海形象文化〉）

旧文化交流研究施設「基礎理論部門」の活動理念を発展的に受け継ぎ、「先端構想部門」の時期を経て、2018年度（平成30年度）より現在の名称になった。複数の専門領域にわたる研究、複数の地域文化を対象にする研究、あるいは諸地域間の文化交流の研究など、特に領域横断的で国際的な研究を行い、かつ、それを公開発信していくことを目的とする。教育面では、学部の「文化交流演習」「文化交流特殊講義」（非常勤講師によるものを含む）を開講するほか、外国人研究者による講演会やシンポジウムを開催して古代ローマ考古遺跡に関する発掘成果や、造形資料の電子化媒体による公開のための研究プロジェクトなどを発信してきた。

文化交流研究施設の頃から継続している文化交流研究懇談会は、2022～2023年度（令和4～5年度）には第258回から第269回までを開催し、年度末に退職する教員が講演した。2006年度（平成18年度）より開催している文化交流茶話会も継続し、第63回から第67回までを実施し、新任教員が各自の研究について紹介した。これは研究科所属教員の教育内容・方法についての研究・研修（ファカルティ・ディベロップメント）も兼ねている。その内容も含め、センター紀要として『文化交流研究』第36号（2023年3月）、第37号（2024年3月）を刊行した。そのほか本部門には多分野交流演習プロジェクトの事務局も置かれており、多分野交流演習ニューズレターを発行している。

現在は人文学応用連携推進室と協力関係にあり、また科学研究費補助金学術変革領域「尊厳学の確立」の東大プロジェクト室を置いている。

b. 国際人文学部門

国際人文学部門は、2018年（平成30年）に設置され、日本語教育、国際教育、後期教養教育をはじめ、各種プロジェクトへの参画を通して人文学及び隣接諸分野の国際連携に資する研究と教育を行っている。

人文社会系研究科・文学部には外国人留学生が数多く在籍しており、勉学及び研究に必要な高度な日本語運用能力の習得に向けて日本語及び日本文化の教授法開発を行うとともに、帰国後に大学教員を目指す留学生や母国で日本語を教えていた留学生、卒業後・修了後の進路として日本語教員を考えている日本人学生のニーズに応じて日本語教師教育に関する研究開発を行っている。加えて、東京大学の百五十年史編纂、ヒューマニティーズ・リエゾン、日立東大ラボのプロジェクトに参画するとともに、人文社会系研究科・文学部の留学生特別講座プログラム、大江健三郎文庫、情報メディア室の諸業務を行っている。

教育面では、大学院・学部の授業や夏期・冬期特別プログラム、留学生特別講座プログラムを担っている。「日本語教育学概説」（学部は文化交流演習Ⅴ）、「日本語教育学演習」（学部は文化交流演習Ⅵ）では、日本語教授法に関する専門的な知識と技能を教授している。また、大学院留学生を対象とした「日本語アカデミック・ライティング1」「同2」「同3」「同4」を開講している。2015年度（平成27年度）から開始された後期教養教育では、人文社会系研究科・文学部が積極的に協力して多くの授業を提供している。夏期・冬期特別プログラムでは、日本人学生と欧州の学生がともに日本国内及び英国における歴史文化遺産等を体験的に学び、相互に国際交流を深めている。留学生特別講座プログラムでは、日本の社会や文化に関するショートレクチャーを多分野に亘って実施している。

専任の鎌田美千子准教授のほか、日立東大ラボの唐沢かおり教授（社会心理学）、百五十年史編纂の鈴木淳教授（日本史学）が兼務教員を務めている。

c. 人文情報学部部門

デジタル化技術の革新とインターネットの急速な発展は、人文社会学における知の保存形態と発信の方法とを大きく変革し、大学・図書館・博物館等に個別に所蔵される知を、広大な一つの地平へと開き出しつつある。過去から継承される多様で膨大な文化資源に立脚する人文社会学の領域にとって、この変化にいかに対応しうるかは、学問の将来を決定しかねない重要な課題である。本部門は、この課題に対応し次世代人文社会学に備えるべく、2008年（平成20年）に設置された萌芽部門「データベース拠点・大蔵経」の5年間の活動を踏まえつつ、拡充改組を進め、現在に至った。前身の「データベース拠点・大蔵経」は、2007年（平成19年）に設置され、2012年（平成24年）から拡大改組して「人

文情報学拠点」として創成部門に移った。その後、2018年（平成30年）、人文情報学部門として独立し、情報学に本格的に対応できる体制を整えた。教育面では「人文情報学概論」「人文情報学特殊研究（学部は特殊講義）」を過去10年にわたって開講するとともに、大学院部局横断型教育プログラム「デジタル・ヒューマニティーズ」を全学に提供している。受講生は、本研究科のあらゆる専門分野のみならず、法学、経済学、教育学、学際情報学府、工学、情報理工、医学等、全学におよぶ点に特色がある。学外に対しても、日本における人文情報学（デジタルヒューマニティーズ）の構築、国際学会連合との関係形成を通して、日本の人文学の国際的な地位向上に重要な役割を果たしている。研究面では、大蔵経のデジタルテキストコーパスを基盤としつつ、京都大学人文科学研究所、国立情報学研究所、アメリカ、ドイツ、フランス等の諸大学研究所で構築された諸知識基盤と構造内在的に連携し、文字、および画像資料による世界最先端のデジタル知識基盤のモデルを提供している。本部門の兼担教員としては、鉄野昌弘教授（日本文学）、小林正人教授（言語学）、高橋典幸教授（日本史学）、中村雄祐教授（文化資源学）、高岸輝教授（美術史学）、高橋晃一准教授（インド哲学仏教学）がおり、大向一輝准教授と協働して上述の事業を推進している。下田正弘教授は2022年度（令和4年度）で定年退職した。

2. 構成員・専門分野

(1) 教員（専任、兼担および特任教員）

- 文化交流学部門
 - 小島毅教授（東アジア海域交流）
 - 芳賀京子教授（地中海形象文化）
- 国際人文学部門
 - 唐沢かおり教授
 - 鈴木淳教授
 - 鎌田美千子准教授
- 人文情報学部門
 - 下田正弘教授（～2023年3月）
 - 鉄野昌弘教授
 - 中村雄祐教授
 - 小林正人教授
 - 高橋典幸教授
 - 大向一輝准教授
 - 高岸輝教授
 - 高橋晃一准教授（2023年4月～）

(2) 助教の活動

- 文化交流学部門
 - 太田泉 フロランス 助教
 - 在職期間 2021年12月～現在
 - 研究領域 西洋中世美術史
 - 主要業績
 - （論文） Izumi Florence OTA, “A French Royal Reliquary with the Image of the *Arma Christi*, the so-called Libretto”, *The Proceedings of the CIHA Florence Congress*, (August 2021) pp. 341-343. Bologna: Bononia University Press.
 - 太田泉 フロランス、「フランス中世のパネル型聖遺物容器研究—《リブレット》を中心に」、サントリー文化財団「若手研究者による社会と文化に関する個人研究助成（鳥井フェローシップ）」研究助成報告論考、財団 Web サイト公開、2021.6
 - 太田泉 フロランス、「ヴァロワ朝フランス王シャルル5世由来の携帯用聖遺物容器《リブレット》の素材と銘文に関する一考察」、『鹿島美術研究』（年報別冊）第38号、2021.11
 - （学会発表）国内、太田泉 フロランス、「掌のなかの聖堂—サント・シャペルを持ち運ぶ」、「宝物とそのいれもの：収納・収蔵の比較美術史」、2021.12.18
 - （他機関での講義等）兼任講師、立教大学、全学カリキュラム「キリスト教美術」、2020.9～2021.3

水野博太 特任助教

在職期間 2020 年 6 月～2023 年 3 月

研究領域 日本思想史、中国思想史

主要業績

(著書) 共著、水野博太、牧角悦子・町泉寿郎編『講座 近代日本と漢学 第 4 巻 漢学と学芸』(戎光祥出版) 第Ⅱ部第 1 章「井上哲次郎の東洋哲学と服部宇之吉の儒教倫理」、80-99 頁、2020.3

共著、Shaun O'Dwyer (ed.), Chang Kun-chiang, Eddy Dufourmont, Han Shuting, Jiang Dongxian, Kang Haesoo, Lee Yu-Ting, Mizuno Hirota, Alexandra Mustăţea, Park Junhyun, Masako Racel, Kyle Michael James Shuttleworth, Song Qi, Yamamura Shō, *Handbook of Confucianism in Modern Japan*, MHM Limited, 2022.2

(論文) 水野博太、「井上哲次郎における「日本哲学」の存在証明とその失敗」、『日本思想史学会』、52、109-125 頁、2020.9

(学会発表) 国内、水野博太、「井上哲次郎における「日本哲学」国際発信の試み—国際東洋学会議における発表論文を中心に—」、日本儒教学会 2020 年度大会、オンライン、2020.8.22

国際、水野博太、「光と影の描き方—服部宇之吉と東京帝国大学における漢学および「支那哲学」、国際シンポジウム「近代日本の中国学と光と影」(東北大学大学院国際文化研究科主催)、オンライン、2021.1.11

国内、水野博太、「明治期における漢学教育をめぐる議論」、第 34 回 HMC オープンセミナー「古典教育をめぐる議論：19 世紀の日米における事例から考える」、オンライン、2021.3.26

国際、水野博太、「島田重礼—新時代における「腐儒」の役割—(パネル「明治時代の学術知と儒学）」、東アジア文化交渉学会第 13 回年次学会、オンライン、2021.5.8

国内、水野博太、「福澤諭吉における「会議」と「演説」、第 38 回 HMC オープンセミナー「語る力が権力を作る?—歴史からの問い—」、オンライン、2021.7.9

国内、水野博太、「井上哲次郎の見果てぬ夢——東西比較哲学と「日本哲学」、EAA シンポジウム「明治日本における東アジア哲学の起源」、オンライン、2021.9.14

(講演録) 共著、水野博太、松方冬子・水野博太・後藤晴美・井坂理穂『Humanities Center Booklet vol. 13 語る力が権力を作る?—歴史からの問い—』(東京大学ヒューマニティーズセンター)、「福澤諭吉における「会議」と「演説」、15-20 頁、2022.3

(他機関での講義等) 非常勤講師、昭和女子大学、「日本思想史」、2021.4～

非常勤講師、学習院大学、「思想史講義」、2021.4～2022.3

非常勤講師、明治大学、「前近代の東洋思想史」、2022.9～

非常勤講師、桜美林大学、「中国語文言文・漢文入門」、2023.4～

非常勤講師、東洋大学、「中国の古典(思想)」、2023.4～

(学会) 国内、日本儒教学会、幹事、2021.4～2024.3

八幡さくら 特任助教

在職期間 2023 年 10 月～2024 年 3 月

研究領域 哲学

主要業績

(論文) 八幡さくら「シェリング芸術哲学の展開——次文献の編纂状況と近年の研究から」、『MORALIA (モラリア)』 30 号、pp.55-75、2023.11

(その他各種論著) [書評] 八幡さくら「フィリップ・ラクー＝ラバルト／ジャン＝リュック・ナンシー著『文学的絶対』」『週刊読書人』3525 号、p.3、2024.2.2

(講演・口頭発表等) [口頭発表(一般)] Sakura Yahata, 'Dante and Schelling: Archetype for the Modern Literary Art.' 47th Annual Conference of German Studies Association, Montreal, 2023.10.7

Sakura Yahata, 'Stimmung als ästhetischer Begriff: Schelling und die zeitgenössische Landschaftsmalerei.' Internationale Schelling-Tagung: Natur - Geschichte - Kunst. Schellings Philosophie im Zeitalter des Anthropozäns, University of Tokyo, 2023.12.1

[口頭発表(招待・特別)] 八幡さくら「アートによる風景の変化：モエレ沼公園の事例から」、関西工学倫理研究会、開催大学、2024.3.2

[合評会] 八幡さくら「NPO 法人国立人文研究所 2023 冬のブックトークシリーズ 井奥陽子『近代美学入門』を読む」、評者、オンライン会議、2023.12.26

○ 国際人文学部門

福井拓也 助教

在職期間 2021 年 12 月～2023 年 3 月

研究領域 日本近代文学

主要業績

(共著)『文学国語 指導書 総説・言語活動編』、福井拓也分担執筆箇所「アンソロジーを作る」・「小説を脚本に書き換える」、pp.47-58、東京書籍、2023.3

慶應義塾大学編集委員会『久保田万太郎と現代』、福井拓也分担執筆箇所「『運命』の作り方—万太郎の仕掛け」、平凡社、pp.334-350、2023.10

(論文) 福井拓也、「泉鏡花「註文帳」と万太郎脚色」、『国語と国文学』99 巻 7 号、pp.50-66、2022.7

福井拓也、「神にませばまこと美はし那智の滝—高浜虚子と『ホトトギス』」、『国語と国文学』100 巻 7 号、pp.80-94、2023.7

「戦後の久保田万太郎の自己表象—「三の酉」と『流寓抄』」、『上智大学国文学紀要』41 号、pp.1-32、2024.3

「ひとりよがりな諸表現—志賀直哉「クローディアスの日記」から郡虎彦、武者小路実篤」、『近代文学合同研究会論集』19 号、pp.4-23、2024.3

(非常勤講師) 明治大学国際日本学部、「日本語表現（文章表現）」、2022.4～、「日本語表現（口頭表現）」、2022.9

笠原真理子 助教

在職期間 2023 年 4 月～現在

研究領域 オペラ・ミュージカル

主要業績

(書籍等出版物) [分担執筆]『新国立劇場《アイダ》パンフレット』、「生誕 100 年ゼッフィレッリの遺産」、公益財団法人 新国立劇場運営財団、2023.4.5

「EAA Forum 22 死から生の価値を問い直す」、三浦隼暉 笠原真理子 一色大悟 柳幹康 石井剛 上田有輝、2023.9

(講演・口頭発表等) [公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「少女マンガとオペラ：あずみ棕・池田理代子プロ・里中満智子の《ニーベルングの指環》を題材に」、笠原真理子、HMC リエゾントーク V：日本の中のオペラ／オペラの中の日本、2023.6.16

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「オペラとマンガ——容姿の描写から考えよう」、HMC 第 94 回オープンセミナー ヒューマニティーズセンターって何？——若手研究者の活動、紹介します、2023.8.2

[公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「テキストを飛び出して考えよう——多次元のオペラ演出の未来」、HMC リエゾントーク VIII：境を超える人文学、2023.10.28

(受賞) フランス語スピーチコンテスト（上級部門最優秀賞）、Cafetalk、2024.1

(共同研究) [戦略的研究プロジェクト]「3 次元人文学研究プラットフォーム」、大向一輝 小川潤 中村雄祐 笠原真理子、情報・システム研究機構、2022～2023

[科学研究費助成事業]「時間を伴う芸術の再演における再現性とその差分」、平諭一郎 笠原真理子 小川潤、基盤研究 (C)：23K00189、日本学術振興会、東京藝術大学、2023.4～2026.3

[東京大学連携研究ヒューマニティーズセンター協働研究]「開かれた人文学のための文化資源デジタルプラットフォーム」、中村雄祐、大向一輝、中村寛、笠原真理子、真鍋陸太郎、藤本貴子、平諭一郎、小川潤、杉本史子、鈴木親彦、関慎太郎、東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター、2022.10～2025.9

[東京大学連携研究ヒューマニティーズセンター協働研究]「『顔』は何を語るのか——過去から未来へ」、永井久美子、高岸輝、梶谷真司、鈴木敦命、出口智之、中村寛、笠原真理子、水野博太、平澤加奈子、上田竜平、藤田弥世、鈴木親彦、東京大学連携研究機構ヒューマニティーズセンター、2023.1～2025.3

(社会貢献活動) [運営参加・支援、実演]「ローム クラシック スペシャル 小学生からのクラシックコンサート 2023」進行補助、2023.5.5

(学術貢献活動) Carmen Abroad Project、2021.3.17～

菊間晴子 助教

在職期間 2023 年 4 月～現在

研究領域 日本近現代文学、表象文化論

主要業績

- (書籍等出版物) [単著] 菊間晴子『犠牲の森で―大江健三郎の死生観』、東京大学出版会、2023.3
- [分担執筆] 村井まや子、熊谷謙介編著『動物×ジェンダー―マルチスピーシーズ物語の森へ (神奈川大学人文学研究叢書 50)』、青弓社、2024.2 (担当：第1部第1章 菊間晴子「共苦による連帯とその失敗―大江健三郎「泳ぐ男」における性差と動物表象の関係を手がかりに」、pp.26-52)
- (論文) [学術雑誌] 菊間晴子「大江健三郎「と」死 (総特集 大江健三郎)」、『ユリイカ』55 巻 10 号、pp.42-53、2023.6
- [学術雑誌] 菊間晴子「「受胎小説」の引カー『ハンチバック』論」、『文學界』77 巻 9 号、pp.180-183、2023.8
- [学術雑誌] 菊間晴子「戦後文学における「励まし」としての谷川俊太郎―大江健三郎を参照項に (総特集 92 年目の谷川俊太郎)」、『ユリイカ』56 巻 3 号、pp.345-354、2024.2
- (その他各種論著) [新刊紹介] 菊間晴子、芳川泰久 (著)『村上春樹とフィクショナルなもの「地下鉄サリン事件」以降のメタファー物語論』、REPRE (表象文化論学会ニューズレター) 45 号、2022.6
- (講演・口頭発表等) [シンポジウム] 菊間晴子「「女性神話」が暴かれる―「アナベル・リイ」をめぐる声の重なり注目して」、EAA シンポジウム「いま、大江健三郎をめぐる」、2022.12.4
- [シンポジウム] 菊間晴子「大江文学における「魂のこと」とは何か―「書き直し」を手がかりに」、第22回 東京大学ホームカミングデイ文学部企画「大江健三郎を語る視座」、2023.10.21
- [講義] 菊間晴子「死生観から考える大江健三郎」、朝日カルチャーセンター新宿教室、2023.10.28
- (非常勤講師) 昭和女子大学総合教育センター、2021.10～2023.3、明治学院大学文学部フランス文学科、2022.4～、青山学院大学、2022.9～
- (学会・委員活動) [委員歴] 表象文化論学会広報委員、2023.11～

吉田夏美 助教

在職期間 2023 年 4 月～現在

研究領域 日本近現代文学、谷崎潤一郎、占領期の関西メディア

主要業績

- (論文) [大学研究機関紀要]「谷崎潤一郎の戦後京都表象：文化都市論と「磯田多佳女のこと」」、吉田夏美、『東京大学国文学論集』19 巻、pp.75-92、2024.3
- (講演・口頭発表等) [口頭発表 (一般)]「〈疎開〉の語りかた―谷崎潤一郎『疎開日記』論―」、吉田夏美、東京大学国語国文学会、2022.4.23
- (共同研究) [科学研究費助成事業]「谷崎潤一郎を視座とした占領期関西のメディア研究―文化論を中心に―」、吉田夏美、研究活動スタート支援：23K18643、日本学術振興会、東京大学、2023.8～2025.3
- (非常勤講師) 津田塾大学、2021.4～現在に至る
- (学会・委員活動) [委員歴] 昭和文学会、会務委員、2020.6～2022.6

夏木大吾 特任助教

在職期間 2020 年 4 月～現在

研究領域 先史考古学

主要業績

- (論文) 萩野はな・福田正宏・夏木大吾・國木田大・斉藤譲一・熊木俊朗・太田圭・張恩恵・米田穰、「稚内市豊岩地区における縄文遺跡群について」、『東京大学考古学研究室研究紀要』37、91-102 頁、2024.3
- (動向) 夏木大吾、「縄文時代草創期・早期」、『北海道考古学』60、27-36 頁、2024.3
- (学会発表) 国内、夏木大吾・太田圭・市川岳朗・出穂雅実・國木田大・佐藤宏之・米田穰、「北海道北見市緋牛内 20 遺跡の調査報告」、第22回北アジア調査研究報告会、北海道大学、2023.2.11
- 国内、萩野はな・福田正宏・夏木大吾・出穂雅実・國木田大・斉藤譲一・太田圭・張恩恵・西村広経・崔桐赫・熊木俊朗、「北海道稚内における新石器／縄文時代遺跡の実態調査 (2021～2022 年度)」、第22回北アジア調査研究報告会、北海道大学、2023.2.11
- 国際、Natsuki Daigo; Sato Hiroyuki; Izuhō Masami、Behavioral differences between Terminal UP and Incipient Jomon foragers in Hokkaido、Engaru Metro Plaza、2023.7.3
- 国際、Natsuki Daigo、Microblade and Bifacial Point Technology for Late and Terminal Upper Paleolithic in Hokkaido, Northern Japan、INQUA 2023 Roma、Sapienza University of Roma、2023.7.18
- 国内、夏木大吾・萩野はな・福田正宏、「道北オホーツク海沿岸域における縄文時代居住生活史」、第23回北アジア調査研究報告会、東京大学、2024.3.3
- (他機関での講義等) 一般向け講座、利尻富士町教育委員会、「利尻神社下遺跡発掘体験・説明会」、2023.5.20

一般向け講座、遠軽町教育委員会、第 23 弾 GeoCafe 「旧石器から縄文文化へ～タチカルシュナイ遺跡 M-I 地点発掘調査報告会」、2023.6.16

非常勤講師、東京都立大学、「旧石器／縄文時代移行期の考古学」、2023.10～2024.2

塚原浩太郎 特任助教

在職期間 2022 年 4 月～2024 年 3 月

研究領域 日本近代史

主要業績

(書籍等出版物) [分担執筆] 『「歴史総合」をつむぐ：新しい歴史実践へのいざない』、歴史学研究会、塚原浩太郎「図像史料を読み取る」、東京大学出版会、1 オンラインリソース (x, 285p)、2022.4

(論文) [学術雑誌] 「二大政党における県下支部の構成：静岡県を事例に」、塚原浩太郎、『選挙研究 / 日本選挙学会 編』38 巻 1 号、pp.21-32、2022.6

[学術雑誌] 「初期男子普通選挙における運動：その空間性について」、塚原浩太郎、『史学雑誌 / 史学会 編』131 巻 8 号、pp.1324-1346、2022.8

(その他各種論著) [書評、文献紹介等] 「2021 年の歴史学界 回顧と展望 (担当：政治・外交 4)」、千葉功 宮間純一 大江洋代 青木健史 飯島直樹 塚原浩太郎 西山直志 市川大祐 榎一江 石井晋 木村直恵 北川恵海 長志珠絵 菅原薫仁 山田大生 長谷川怜 小林未央子、『史学雑誌』131 巻 5 号、2022.6

[書評] 井上敬介著『立憲民政党の地方組織と北海道一自由民主党への道』、吉川弘文館、2022 年、塚原浩太郎、『選挙研究』38 巻 2 号、pp.75-76、2023.1

(講演・口頭発表等) [口頭発表 (一般)] 「六全協後における共産党の地方組織—静岡県東部を事例として—」、塚原浩太郎、静岡県近代史研究会、2023.11.18

[シンポジウム・ワークショップ パネル (公募)] 「選挙区のなかの石橋湛山」、塚原浩太郎、第 10 回石橋湛山研究学会、2023.12.16

(非常勤講師) 成蹊大学文学部、2023.4～、立教大学文学部、2023.4～、学習院大学文学部、2023.4～、青山学院大学 文学部、2023.4～

(学会・委員活動) [所属学協会] 日本選挙学会、2022.9～、静岡県近代史研究会、2023.12～

○ 人文情報学部門

塚越柚季 助教

在職期間 2023 年 4 月～現在

研究領域 言語学 (サンスクリット)、図書館情報学、人文社会情報学

主要業績

(論文) [研究会、シンポジウム資料等] 「文字単位 n-gram の翻訳によるヴェーダ・サンスクリットの連声解除」、塚越柚季、『じんもんこん 2022 論文集』2022 巻、pp.33-38、2022.12.2

[学術雑誌] 『リグ・ヴェーダ』の文書間類似度比較：機械学習と n-gram 分析による詩人の言語使用の特定」、塚越柚季、『情報処理学会論文誌』65 巻 2 号、pp.348-355、2023.2.15

[研究会、シンポジウム資料等] 「デジタルサンスクリット辞書によって追加学習された大規模言語モデルを用いたサンスクリット辞書の横断検索」、井上敬介著『立憲民政党の地方組織と北海道一自由民主党への道』、吉川弘文館、2022 年、塚越柚季、研究報告人文科学とコンピュータ (CH)、2023-CH-133 巻、7 号、pp.1-4、2023.9.23

[研究会、シンポジウム資料等] 「日本語方言談話資料の TEI による構造化の試み」、中川奈津子 岡田一祐 永崎研宣 北崎勇帆 王一凡 曹芳慧 藤原静香 塚越柚季 小川潤 片倉峻平 左藤仁宏 王雯璐 石田友梨 宮川創 佐久間祐惟 塩井祥子 井上慶淳 村瀬友洋 関慎太郎 嵩井里恵子 渡邊眞儀 中町信孝 幾浦裕之、『じんもんこん 2023 論文集』2023 巻、pp.83-90、2023.12.2

[その他学術会議資料等] 「サンスクリット文献『リグ・ヴェーダ』の韻律構造にもとづく クラスタ分析」、塚越柚季、言語処理学会第 30 回年次大会 発表論文集、pp.88-93、2024.3

[研究会、シンポジウム資料等] 「サンスクリット文献『リグ・ヴェーダ』の韻律構造にもとづくクラスタ分析」、塚越柚季、大向一輝、言語処理学会第 30 回年次大会発表論文集、pp.88-93、2024.3

(講演・口頭発表等) [口頭発表 (一般)] 「文字単位 n-gram の翻訳によるヴェーダ・サンスクリットの連声解除」、塚越柚季、人文科学とコンピュータシンポジウム 2022、2022.12.10

- [公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「言語学における機械学習、AIの可能性」、塚越柚季、フィールド言語学ワークショップ：第22回文法研究ワークショップ「文法研究とデジタル・ヒューマニティーズ (1)」、2023.3.20
- 「Analyzing Text Similarity in Vedic Sanskrit Texts: A Bipartite Approach Using Stylometry and Text Reuse Detection」、So Miyagawa Yuzuki Tsukagoshi Yuki Kyogoku Kyoko Amano、DH2023 Workshop – SIG-DLS Seven Years on、2023.7.10
- [口頭発表 (一般)]「Comparative Analysis of Vedic Sanskrit Documents Using Doc2Vec and Transformer Models」、Yuki Kyogoku Yuzuki Tsukagoshi So Miyagawa Kyoko Amano、DH2023 Workshop – SIG-DLS Seven Years on、2023.7.10
- [口頭発表 (一般)]「デジタルサンスクリット辞書によって追加学習された大規模言語モデルを用いたサンスクリット辞書の横断検索」、塚越柚季、人文科学とコンピュータ研究会、2023.9.23
- [公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「画像としてのテキストの扱いかた」、塚越柚季、HMC 第103回オープンセミナー 朝鮮本と画像処理の現在地、2024.2.15
- [口頭発表 (招待・特別)]「ヴェーダ文献テキストの作成とその困難—「同じ語」とはなににか—」、塚越柚季、Exploring the Potential of Utilizing Data from Sanskrit Literature、2024.2.19
- [口頭発表 (招待・特別)]「サンスクリット辞書による大規模言語モデルのファインチューニングについて」、塚越柚季、名古屋大学「デジタル人文社会科学研究推進センター」設置記念シンポジウム「AIで切り拓く人文学の未来」、2024.3.28
- (受賞) 学生奨励賞、「文字単位 n-gram の翻訳によるヴェーダ・サンスクリットの連声解除」、人文科学とコンピュータ研究会、2022.12
- (共同研究) [科学研究費助成事業]「ヴェーダ文献テキストの構造化およびテキスト間の言語的関係の解明」、塚越柚季、研究活動スタート支援：23K18646、日本学術振興会、東京大学、2023.8～2025.3
- 「AI加速の文献学：サンスクリット文献学への大規模言語モデルの応用と知識の拡充」、塚越柚季、AIセンター融合研究促進費、東京大学、次世代知能科学研究センター、2023.10～2024.9
- (非常勤講師) 放送大学 東京文京学習センター、2023.4～
- (学会・委員活動) [所属学協会] 言語処理学会、2024.1～

3 1 死生学・応用倫理センター

1. センター活動の概要

「死生学・応用倫理センター」は、グローバルCOE「死生学の展開」ならびに「応用倫理教育プログラム」の後継組織として、2011年4月に人文社会系研究科附属施設として設けられた。それに伴い「上廣死生学・応用倫理講座」（旧称「上廣死生学講座」）は死生学・応用倫理センターの下部組織として位置づけられることになった。

センターの運営は運営委員会によっておこなわれている。また研究科附属施設であるため、委員会には研究科長が同席し、1名の副研究科長がオブザーバーとして参加している。各年度の委員は下記の通りである。

2022年度：池澤優（センター長）、古荘真敬、小島毅、横手裕、井口高志、増記隆介、鈴木晃仁、堀江宗正、会田薫子、早川正祐

2023年度：堀江宗正（センター長）、古荘真敬、池澤優、小島毅、横手裕、井口高志、増記隆介、鈴木晃仁、会田薫子、早川正祐

死生学・応用倫理センターの活動は、リカレント教育、部局横断型教育プログラム、国内外の研究集会、若手研究者の育成の四つを柱とする。

- ① リカレント教育：上廣死生学・応用倫理講座による医療・ケア従事者のための死生学セミナー、臨床倫理セミナーなど。これらはグローバルCOEの活動として始まり、それを更に継承、拡充してきた。アカデミズムを市民に開いていく社会貢献活動の一環として位置づけられる。

（詳細は上廣死生学・応用倫理講座の頁を参照）

- ② 部局横断型教育プログラム：プログラム名は「死生学・応用倫理教育」である。2002年以来、文学部は「応用倫理教育プログラム」を提供してきた。それを死生学と結合して、学部・大学院双方において全学的に開かれた部局横断型教育プログラムへと拡充し、展開している。

2022年度

堀江宗正ほか	「死生学概論」（死生学の射程）
池澤優ほか	「応用倫理概論」（応用倫理入門）
早川正祐	「死生学演習Ⅰ」（病いの語りをめぐる倫理）
池澤優	「死生学演習Ⅱ」（死生学基礎文献講読）
鈴木晃仁	「死生学演習Ⅲ」（患者の歴史と倫理Ⅰ）
会田薫子	「応用倫理演習Ⅰ」（質的研究法入門）
池澤優	「応用倫理演習Ⅱ」（環境倫理文献講読）
鈴木晃仁	「応用倫理演習Ⅲ」（患者の歴史と倫理Ⅱ）
会田薫子	「死生学特殊講義Ⅰ」（臨床死生学・倫理学の諸問題Ⅲ）
会田薫子	「死生学特殊講義Ⅱ」（臨床死生学・倫理学の諸問題Ⅳ）
会田薫子	「死生学特殊講義Ⅲ」（臨床死生学特論）
早川正祐	「死生学特殊講義Ⅳ」（共感とケアの哲学）
早川正祐	「死生学特殊講義Ⅴ」（自律についての関係的なアプローチ：現代行為論・自由論の一展開）
早川正祐	「死生学特殊講義Ⅵ」（認識をめぐる不正義と責任：現代認識論の一展開）
乗立雄輝	「死生学特殊講義Ⅶ」（死生をめぐる偶然と確率の問題）
澤井敦	「死生学特殊講義Ⅷ」（死と不安の社会学）
古荘真敬	「死生学特殊講義Ⅸ」（死生をめぐる実存哲学の諸問題）
轟孝夫	「応用倫理特殊講義Ⅰ」（技術時代の倫理—ハイデガー哲学の視点から）
吉永明弘	「応用倫理特殊講義Ⅱ」（都市の環境倫理）
福永真弓	「応用倫理特殊講義Ⅲ」（食と場所の環境倫理）
村上靖彦	「応用倫理特殊講義Ⅳ」（現象学的な質的研究の方法—ヤングケアラーへのインタビュー調査などをもとに）
北條勝貴	「応用倫理特殊講義Ⅴ」（マイノリティーの環境史／倫理学）
鈴木晃仁	「応用倫理特殊講義Ⅵ」（医療者の歴史と倫理）
福嶋揚	「応用倫理特殊講義Ⅶ」（気候崩壊の時代を生き延びる～人新世の倫理・経済・宗教）
大塚類	「臨床教育現象学概論」（具体事例に基づき臨床現象学を学ぶ）

赤林朗、瀧本禎之、中澤栄輔、宇田川誠	「生命・医療倫理Ⅰ」
池田真理、キタ幸子、森崎真由美	「家族と健康」
芳賀猛	「生命倫理」
根本圭介	「技術倫理」
小松美彦	「科学技術リテラシー論Ⅰ」（「〈反延命〉主義」の歴史的現在—「医」の倫理とリスクコミュニケーション）
鈴木貴之	「応用倫理学概論」（功利主義と応用倫理学）

2023 年度

堀江宗正ほか	「死生学概論」（死生学の射程）
鈴木晃仁・池澤優ほか	「応用倫理概論」（応用倫理入門）
早川正祐	「死生学演習Ⅰ」（病いの語りをめぐる倫理）
鈴木晃仁	「死生学演習Ⅲ」（患者の歴史と倫理Ⅰ）
会田薫子	「応用倫理演習Ⅰ」（質的研究法入門）
池澤優	「応用倫理演習Ⅱ」（環境倫理文献講読）
鈴木晃仁	「応用倫理演習Ⅲ」（患者の歴史と倫理Ⅱ）
堀江宗正	「応用倫理演習Ⅳ」（環境思想研究）
会田薫子	「死生学特殊講義Ⅰ」（臨床死生学・倫理学の諸問題Ⅲ）
会田薫子	「死生学特殊講義Ⅱ」（臨床死生学・倫理学の諸問題Ⅳ）
会田薫子	「死生学特殊講義Ⅲ」（臨床死生学特論）
早川正祐	「死生学特殊講義Ⅳ」（共感とケアの哲学）
早川正祐	「死生学特殊講義Ⅴ」（自律についての関係的なアプローチ:現代行為論・自由論の一展開）
早川正祐	「死生学特殊講義Ⅵ」（認識をめぐる不正義と責任：現代認識論の一展開）
乗立雄輝	「死生学特殊講義Ⅶ」（死生をめぐる諸問題についての偶然と確率の視点からの考察）
古荘真敬	「死生学特殊講義Ⅷ」（死生をめぐる実存哲学の諸問題）
堀江宗正	「死生学特殊講義Ⅸ」（スピリチュアリティ研究）
山田慎也	「死生学特殊講義Ⅹ」（葬送儀礼の変容と死生観）
轟孝夫	「応用倫理特殊講義Ⅰ」（技術時代の倫理—ハイデガー哲学の視点から）
吉永明弘	「応用倫理特殊講義Ⅱ」（都市の環境倫理）
福永真弓	「応用倫理特殊講義Ⅲ」（食と場所の環境倫理）
村上靖彦	「応用倫理特殊講義Ⅳ」（現象学的な質的研究の方法）
北條勝貴	「応用倫理特殊講義Ⅴ」（歴史実践における口承／環境／叙述）
鈴木晃仁	「応用倫理特殊講義Ⅵ」（医療者の歴史と倫理）
福岡揚	「応用倫理特殊講義Ⅶ」（破局のなかの希望～人新世の倫理・経済・宗教）
池澤優	「応用倫理特殊講義Ⅷ」（東アジアの死生学・応用倫理へ）
大塚類	「臨床教育現象学概論」（具体事例に基づき臨床現象学を学ぶ）
池田真理、キタ幸子、森崎真由美、山路野百合	「家族と健康」
瀧本禎之、中澤栄輔、森克美	「生命・医療倫理Ⅰ」
芳賀猛	「生命倫理」
根本圭介	「技術倫理」
小松美彦	「科学技術リテラシー論Ⅱ」（日本における優生学の歴史と現在——ポピュラーサイエンスと科学ジャーナリズムの視点から）
石原孝二	「応用倫理学概論」（応用倫理学の基礎と諸領域）
斎藤幸平	「現代哲学特殊研究Ⅰ（Ⅰ）」（脱成長とは何か）

- ③ 国内外の研究集会：21 世紀 COE、グローバル COE を通して、極めて多くの国際シンポジウム、研究集会が開かれたが、それを通して死生学に関する国際的なネットワークができつつあり、それを維持、発展させていくためにも、年に数回の国際シンポジウムと研究集会を行っていく。ただし、2022 年度に関しては新型コロナウイルス感染症の余波もあり、大きな研究集会を開催することはできなかった。2023 年度からは「Sustainability と人文知」研究基盤がセンターの事業として位置づけられ、数多くの研究集会とシンポジウムをおこなっている。

2023 年度「Sustainability と人文知」研究会

4 月 7 日	堀江宗正	地域と食をめぐるサステイナビリティの問題系
4 月 28 日	鎌田東二	地域と人文知——京都伝統文化の森プロジェクト（特別公開研究会）
5 月 19 日	秋山聡	新宮市（熊野地域）と人文社会系研究科の地域連携
6 月 2 日	森先一貴	先史時代はサステイナブルか——食料獲得社会の考古学
6 月 23 日	竹内昌治	培養肉の未来——社会と文化への影響（17:15 開始）
7 月 14 日	太田和彦	食から構想するサステイナブルな社会
10 月 6 日	篠原雅武	空間論から見た地域のサステイナビリティ
10 月 20 日	梶川 裕矢	持続可能な食料システムへの転換に向けた連携
11 月 17 日	福永真弓	食をめぐっての倫理と人間らしさ
3 月 30 日	シンポジウム「能登半島地震と地域のサステイナビリティ」	

- ④ 若手研究者の育成：COE プログラムの場合と同様、特任研究員を雇用し、センターの運営を担当してもらうとともに、将来の死生学・応用倫理を担う若手研究者を育成する。体制としては特任研究員 5 名（うち 2 人は上廣死生学・応用倫理講座所属）を雇用することとしている。特任研究員育成のためにグローバル COE の機関誌『死生学研究』を『死生学・応用倫理研究』と改称した上で、継続して発行し、成果を発表する場と位置づけている。

死生学応用倫理専門分野の創設について

2022 年度から、人文社会系研究科基礎文化研究専攻のなかに死生学応用倫理専門分野（死生学応用倫理研究室）が創設された。今まで死生学・応用倫理センターの所属だった教員は、上廣死生学・応用倫理講座の特任教員をのぞき、死生学応用倫理専門分野の所属になった。つまり、特任教員以外には死生学・応用倫理センターには専属教員はいなくなった。センターの運営は研究科長が指名する運営委員によって行われる。ただし、現状では、死生学応用倫理専門分野所属の教員は、運営委員ともなっている。

なお、死生学応用倫理研究室は弥生総合研究棟三階の 302・303 室に置かれることが決定した。

2. 構成員・専門分野

(1) 所属教員

会田薫子、池澤優（2022 年度センター長）、鈴木晃仁、早川正祐、堀江宗正（2023 年度センター長）、田村美紀（特任助教）

(2) 特任研究員

丸山文隆、陳健成、矢口直英、坂井愛理、野瀬彰子、孫婧

(3) 事務補佐員

安野裕美

3 2 北海文化研究常呂実習施設

1. 実習施設活動の概要

当施設は、人文社会系研究科では本郷キャンパスの外にある唯一の施設である。施設が所在する北海道北見市常呂町は、オホーツク海の沿岸、北海道東部で最大の河川の一つである常呂川の河口に位置している。この川と海によってもたらされる豊かな資源に支えられて、この地には旧石器時代から近世アイヌ期に至る約 2 万年もの間、多数の先史文化の遺跡が連綿と遺されてきた。特に国の指定史跡である史跡常呂遺跡は、カシワやナラの林の中に 2,500 を超える竪穴住居跡が埋まりきらずに窪みとして残っているという、大規模かつ特異な遺跡である。

この地域における文学部の調査研究活動は 1955 年に開始された。端緒はアイヌ語方言の研究を目的とした言語学の調査であったが、1957 年からはこの地域の先史文化の解明を目的とした考古学的な調査が開始され、以後半世紀の間、発掘・測量などの考古学調査が毎年行われてきた。また考古学・言語学以外にも、開拓民の宗教への関わりかたを究明しようとする宗教学の調査なども行われている。その後、1967 年からは助手 1 名が文学部考古学研究室から派遣され、1973 年には施設として正式に発足した。現在、施設の建物としては、研究室、資料陳列館、学生宿舎、資料保存センター（旧・学生宿舎）が存在し、教授・助教各 1 名、有期雇用職員（管理人等）2 名が現地のスタッフとして活動を行っている。活動の核となるのは考古学実習を兼ねた発掘調査であり、本郷の考古学研究室と協力しながら、毎年夏から秋にかけて施設周辺の遺跡群を対象とした発掘調査を実施している。また、2004 年度からは一般講義として博物館学実習が毎年夏に当施設で開講され、考古学専修以外の学生も展示製作等の実習を受講している。ほかに、2014 年度から 2023 年度まで文学部夏期特別プログラムの後半部分が常呂実習施設で開講され、東大の学部学生と海外の学生が地域の文化資源を体験するプログラムを通じて交流している。資料陳列館では常設展や企画展等の博物館活動もおこなっており、2013 年度には資料陳列館を含む常呂実習施設全体が、博物館法の規定する博物館相当施設（改正博物館法では指定施設）に指定されている。

半世紀に及ぶ当地域での調査成果は 14 冊の報告書として刊行され、北海道の考古学研究の基礎をなす成果として高く評価され、広く利用されている。また近年は、環オホーツク海沿岸地域を中心とした北方地域との比較考古学研究を重要な研究課題とし、ロシア連邦の研究者や本学の考古学研究室の教員などと協同しながら調査を実施している。それらの成果についても「東京大学常呂実習施設研究報告」と題した 21 冊の報告書によって刊行してきたが、これは今まで調査実績がきわめて少なかった北方地域の実態を明らかにしたものとして、高い評価を受けている。

北海道に位置する当施設は、その活動において地域との連携を重視してきた。当施設に隣接した史跡常呂遺跡は北見市によって史跡公園「ところ遺跡の森」として整備され、屋外の復元竪穴住居・ガイダンス施設・埋蔵文化財センターを備えた公園として一般公開されているが、当施設は教育委員会が管轄するこの史跡公園と一体となって教育普及活動を推進している。さらに 2000 年度からは東京大学文学部公開講座と銘打った出前講座を北見市で開講し、2023 年度までに 27 回を数えている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

熊木 俊朗 研究領域 東北アジア考古学

(2) 助教の活動

太田 圭

在職期間 2021 年 4 月～現在

研究領域 日本考古学

主要業績

（書籍等出版物）[分担執筆]『東日本穀物栽培開始期の諸問題』、設楽博己編、「第Ⅱ部調査編 -1（太田圭・佐藤祐輔・佐藤由紀男・設楽博己・轟直行・西村広経・根岸洋・守屋亮・山下優介）、総論（太田圭・國木田大・佐々木由香・設楽博己・山下優介・米田穰）」、雄山閣、p.481〈pp.153-170、pp.268-306、pp.327-450、pp.465-479 担当〉2023.3

[分担執筆]『国立歴史民俗博物館総合展示第 1 展示室特集展示「北の大地が育んだ古代：オホーツク文化と擦文文化」解説冊子』、林部均 熊木俊朗 太田圭 國木田大、「2 擦文文化とは何か」、東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設・国立歴史民俗博物館、p.22〈pp.10-14 担当〉2023.11.14

- [分担執筆]『オホーツクの古代文化：東北アジア世界と北海道・史跡常呂遺跡』、東京大学文学部常呂実習施設 考古学研究室、「コラム」、新泉社、p.215 (pp.46-47、pp.86-87 担当) 2024.3.25
- (論文[論文集(書籍)内論文]「総論 東日本における穀物栽培開始期の諸問題」、太田圭 國木田大 佐々木由香 設楽博己 山下優介 米田穰、『東日本物栽培開始期の諸問題』、pp.465-479、2023.3
- [大学,研究機関紀要]「縄文時代中期末葉から後期前葉における土器群と遺構の関係について—福島県域における屋外土器埋設遺構の分析とその位置づけ—」、太田圭、『東京大学考古学研究室研究紀要』36 号、pp.1-48、2023.3
- [論文集(書籍)内論文]「古代東北北部・中部太平洋側地域における穀物利用の—様相」、太田圭、『東日本における穀物栽培開始期の諸問題』、pp.153-169、2023.3
- [大学,研究機関紀要]「北海道島東部オホーツク海側地域における紡錘車の基礎的検討」、太田圭、『アーキオ・クレイオ』21 号、pp.1-22、2024.3
- [大学,研究機関紀要]「レプリカ法による北上市域出土土器の圧痕調査」、太田圭 佐々木由香 山下優介 小久保竜也 岩田貴之 工藤美樹、『北上市立埋蔵文化財センター紀要』8 号、pp.39-58、2024.3
- [大学,研究機関紀要]「レプリカ法による美幌町域出土土器の圧痕調査とその意義」、太田圭 佐々木由香 小久保竜也 八重柏誠、『美幌博物館研究報告』31 号、pp.9-22、2024.3
- (その他各種論著) [速報, 短報, 研究ノート等 (学術雑誌)] 「古代以前の土器圧痕からみた雑穀利用」、佐々木由香 太田圭、『季刊考古学』159 号、pp.49-51、2022.4
- [速報, 短報, 研究ノート等 (学術雑誌)] 「日本列島北部におけるレプリカ法による土器圧痕の研究」、太田圭、『考古学ジャーナル』776 号、pp.40-43、2022.12
- [研究発表要旨 (全国大会,その他学術会議)] 「2022 年度北海道北見市大島 2 遺跡発掘調査報告」、熊木俊朗 太田圭 中村雄紀、『第 22 回北アジア調査研究報告会』、pp.1-4、2023.2
- [研究発表要旨 (全国大会,その他学術会議)] 「北海道北見市緋牛内 20 遺跡の調査報告」、夏木大吾 太田圭 市川岳朗 出穂雅実 國木田大 佐藤宏之 米田穰、『第 22 回北アジア調査研究報告会』、pp.9-12、2023.2
- [研究発表要旨 (全国大会,その他学術会議)] 「北海道稚内における新石器／縄文時代遺跡の実態調査 (2021-2022 年度)」、萩野はな、福田正宏、夏木大吾、出穂雅実、國木田大、斉藤譲一、太田圭、張恩恵、西村広経、崔桐赫、熊木俊朗、『第 22 回北アジア調査研究報告会』、pp.17-20、2023.2
- [総説・解説 (その他)] 「擦文文化とは何か」、太田圭、「北の大地が育んだ古代—オホーツク文化と擦文文化—」展示解説冊子、pp.10-14、2023.11
- [速報, 短報, 研究ノート等 (大学,研究機関紀要)] 「稚内市豊岩地区における縄文遺跡群について」、萩野はな 福田正宏 夏木大吾 國木田大 斉藤譲一 熊木俊朗 太田圭 張恩恵 米田穰、『東京大学考古学研究室研究紀要』37 号、pp.91-102、2024.3
- [その他記事]「レプリカ法による土器圧痕の調査」、太田圭 佐々木由香 領塚正浩 小久保竜也 山下優介、『国指定史跡曾谷貝塚総括報告書』、pp.152-158、2024.3
- [総説・解説 (商業誌)] 「コラム 縄文時代の漆製品からみた常呂川河口遺跡の漆塗櫛」、太田圭、『オホーツクの古代文化：東北アジア世界と北海道・史跡常呂遺跡』、pp.46-47、2024.3
- [総説・解説 (商業誌)] 「コラム 北日本におけるレプリカ法による土器圧痕調査」、太田圭、『オホーツクの古代文化：東北アジア世界と北海道・史跡常呂遺跡』、pp.86-87、2024.3
- [研究発表要旨 (全国大会,その他学術会議)] 「2023 年度北見市大島 1 遺跡発掘調査報告」、熊木俊朗 太田圭 中村雄紀、『第 23 回北アジア調査研究報告会』、pp.39-42、2024.3
- [研究発表要旨 (全国大会,その他学術会議)] 「道東オホーツク海側内陸部における擦文文化の検討へむけて—土器圧痕調査からの展望—」、太田圭 林正之 小久保竜也、『第 23 回北アジア調査研究報告会』、pp.51-54、2024.3
- (講演・口頭発表等) [公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等] 「常呂における地域連携活動について」、太田圭、第 21 回ホームカミングデイ文学部企画「文学部による地域連携の試み—人文学応用連携の促進を目指して—」、東京大学文学部、東京大学本郷キャンパス、2022.10.15
- [口頭発表 (一般)] 「北海道稚内における新石器／縄文時代遺跡の実態調査 (2021-2022 年度)」、萩野はな 福田正宏 夏木大吾 出穂雅実 國木田大 斉藤譲一 太田圭 張恩恵 西村広経 崔桐赫 熊木俊朗、第 22 回北アジア調査研究報告会、北アジア調査研究報告会実行委員会、北海道大学 (札幌)、2023.2.11

- [口頭発表（一般）]「北海道北見市緋牛内 20 遺跡の調査報告」、夏木大吾 太田圭 市川岳朗 出穂雅実 國木田大 佐藤宏之 米田穰、第 22 回北アジア調査研究報告会、北アジア調査研究報告会実行委員会、北海道大学（札幌）、2023.2.11
- [口頭発表（一般）]「2022 年度北海道北見市大島 2 遺跡発掘調査報告」、熊木俊朗 太田圭 中村雄紀、第 22 回北アジア調査研究報告会、北アジア調査研究報告会実行委員会、北海道大学（札幌）、2023.2.11
- [公開講演、セミナー、チュートリアル、講習、講義等]「北海道島における植物利用研究とレプリカ法による土器圧痕調査」、太田圭、学術変革領域研究（A）「土器を掘る」領域公開セミナー、文部科学省 科学研究費補助金研究 学術変革領域研究（A）領域番号：20A102 土器を掘る：22 世紀型考古学構築と社会実装をめざした技術開発型研究、オンライン（Zoom）、2023.11.15
- [口頭発表（一般）]「2023 年度北見市大島 1 遺跡発掘調査報告」、熊木俊朗 太田圭 中村雄紀、第 23 回北アジア調査研究報告会、北アジア調査研究報告会実行委員会、東京大学本郷キャンパス、2024.3.3
- [口頭発表（一般）]「道東オホーツク海側内陸部における擦文文化の検討へむけて—土器圧痕調査からの展望—」、太田圭 林正之 小久保竜也、第 23 回北アジア調査研究報告会、北アジア調査研究報告会実行委員会、東京大学本郷キャンパス、2024.3.3
- （その他（データベース・作品等））「北海道北見市緋牛内 20 遺跡の発掘調査」、夏木大吾 太田圭、2022.6～5、2022.9～10
- 「北海道北見市大島 2 遺跡の発掘調査」、熊木俊朗 太田圭、2022.8～9
- 「北海道稚内市珊内 5 遺跡の発掘調査」、福田正宏 夏木大吾 國木田大 太田圭、2022.10
- 東京大学大学院人文社会系研究科附属常呂資料陳列館第 12 回企画展「縄文晩期の東北海道—幣舞式土器から続縄文初頭へ—」、太田圭 熊木俊朗、2022.11～12
- 「静岡県浜松市堀谷洞窟遺跡の発掘調査」、近藤恵 藤田祐樹 久野正博 太田圭、2022.12
- 「常呂川下流域の古代文化を解く」、北海道映像記録株式会社 東京大学常呂実習施設、2023.4
- 「北海道北見市吉井沢遺跡の発掘調査」、夏木大吾 太田圭、2023.6
- 「北海道北見市大島 1 遺跡の発掘調査」、熊木俊朗 太田圭、2023.8
- 東京大学大学院人文社会系研究科附属常呂資料陳列館第 13 回企画展「岐阜ⅡA 群土器とは何か—縄文前期平底押型文土器の成立—」、熊木俊朗 太田圭、2023.8～10
- 「北の大地が育んだ古代—オホーツク文化と擦文文化」国立歴史民俗博物館第 1 展示室特集展示・東京大学文学部「人文学における国際的地域・社会連携の推進」プログラム関連事業、林部均 村木二郎 熊木俊朗 太田圭、2023.11～2024.2
- 「静岡県浜松市堀谷洞窟遺跡の発掘調査」、近藤恵 藤田祐樹 久野正博 太田圭、2023.12
- （共同研究）[科学研究費助成事業]「類北海道島における縄文／弥生移行期の植物利用の解明—道東・道北における圧痕調査—」、太田圭、学術変革領域研究（A）：23H03908、日本学術振興会、東京大学、2023.4～2025.3
- [科学研究費助成事業]「北からの視点・考古科学分析・広域比較に基づく日本古墳築造の総合的研究」、菊地芳朗 藤澤敦 高瀬克範 太田圭 鈴木琢也 福永伸哉 村上由美子 佐々木由香 臼杵勲、基盤研究（A）：23H00010、日本学術振興会、福島大学、2023.4～2028.3
- [科学研究費助成事業]「生業動態からみた擦文文化の分布拡大要因」、國木田大 高瀬克範 熊木俊朗 太田圭 江田真毅、基盤研究（B）：23H00689、日本学術振興会、北海道大学、2023.4～2028.3
- （学会・委員活動）[所属学協会] 北海道考古学会、2023.5～、岩手考古学会、2023.10～
- [委員歴] 北海道古代集落遺跡群専門家委員会、作業班員、2022.12～2023.12

3 3 上廣倫理財団死生学・応用倫理寄付講座

1. 寄附講座活動の概要

本講座は、公益財団法人上廣倫理財団を出捐団体とする寄付講座「上廣死生学講座」として2007（平成19）年度から第1期5年間の活動を行ったのち、2012（平成24）年度から「上廣死生学・応用倫理講座」として寄付講座第2期の活動を行い、2017（平成29）年度からの5年間は寄附講座第3期の活動を行い、2022（令和4）年度から5年間の寄附講座第4期の活動を開始した。

第1期は、次世代人文学開発センターに属し、グローバルCOE「死生学の展開と組織化」の活動を行ったが、第2期はグローバルCOE「死生学の展開」ならびに「応用倫理教育プログラム」の活動を継いで2011（平成23）年度に発足した「死生学・応用倫理センター」に属して、死生学の臨床にかかわる面および応用倫理の一領域である臨床倫理を中心に活動を進め、第3期の5年間および第4期の最初の2年間においても継承・発展的に活動した。本講座は特任教授1名、特任准教授1名に加えて、2020（令和2）年度から上廣倫理財団からの追加寄附により特任助教1名も雇用していただき、2022・2023（令和4・5）年度もその体制で活動させていただいた。なお、教員に加え、2013（平成25）年度以降は特任研究員も若干名雇用いただいている。

本講座の統括監督者は、2022・2023（令和4・5）年度は池澤優教授（宗教学・死生学）であり、池澤教授は2022（令和4）年度は本講座の上部組織である死生学・応用倫理センターのセンター長でもあった。同センター長は、2023（令和5）年度は堀江宗正教授（宗教学・死生学）に引き継がれた。本講座第4期5年間の活動目的については次のように規定している。

本講座は、東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センターの中にあつて、

- (a) 医療・介護の臨床現場を中心とする人間の生活の場において、人生の物語りをつくりつつ生きている人々の生活に即した臨床死生学と現実の諸問題に即した倫理的あり方を実践的に研究し、研究成果の社会への還元が現実の人々の人生をより豊かにすることに貢献し、またその還元する活動が同時に研究活動でもあるような実践的学問を展開し、かつ、
- (b) 研究成果を社会に還元する活動として社会人対象の「リカレント教育」を行い、また、学生・院生を対象として、研究を背景にした部局横断型「死生学・応用倫理プログラム」の一翼を担うことを目的とする。

この目的に応じて、本講座の活動は、1)実践的研究活動、2)学部・大学院教育、および3)社会貢献（リカレント教育その他、実践的研究と連動するもの）、4)国際交流から成っている。1)実践的活動および3)リカレント教育に関しては、2020（令和2）年度から2022（令和4）年度のコロナ禍のなか、次善の策としてオンラインによるセミナー・研修会を実施したが、総じて参加者満足度と利便性が高く、特に遠隔地の医療・介護従事者から大変好評であったため、2023（令和5）年度も継続した。

上記に関する2022・2023（令和4・5）年度の実績概要は次のとおりである。

1) 実践的研究活動

上廣死生学・応用倫理講座では本講座がスタートした2007（平成19）年度から医療・介護従事者を対象に臨床倫理セミナーを行っている。臨床倫理セミナーは臨床倫理の基礎および事例検討法に関する講義と、事例検討の演習（グループワークおよび全体会での発表と成果の共有）によって構成されている。

2022（令和4）年度は疫病禍が続くなか、臨床倫理セミナーの開催は限定的なものとならざるを得なかった。対象者である医療・介護従事者が、新型コロナウイルス感染症の患者の治療とケアおよび地域における感染予防活動のために忙殺され、また、集会による対面セミナーの実施が感染拡大の原因となることが危惧されたため、対面セミナーの開催を見合わせざるを得ない地域が多かったためである。2023（令和5）年度は少しずつ対面セミナーを開催した。こうした状況において、当講座が2020（令和2）年度に医療・介護従事者の自習用に作成し公開したe-learning用の研修教材が役立つ（http://clinicalethics.ne.jp/cleth-prj/cleth_online/）。

2022（令和4）年度のオンラインの臨床倫理セミナーは、金沢大学附属病院が中心となる北陸地区および諏訪中央病院と諏訪赤十字病院が中心となる諏訪地区の医療・ケア従事者を対象に開催し、また、日本医療ソーシャルワーカー協会とも協働で開催した。北陸地区臨床倫理事例検討会および日本医療ソーシャルワーカー協会臨床倫理研修会では、上記のe-learningコンテンツを予習教材として活用して頂いた。

2023（令和5）年度は、臨床倫理セミナーを全国7か所で開催したが、うち4か所はポスト・コロナで初めての開催となった。上記7か所のうち6か所では対面開催の再開もなかった。

また、2023（令和5）年度に当講座の臨床倫理テキストの第二弾である『ACPの考え方と実践—エンドオブライフ・ケアの臨床倫理』（会田薫子編）を東京大学出版会から刊行した。日本では厚生労働省が2018（平成30）年度からエンドオブライフ・ケアの意思決定支援に関して advance care planning（ACP）の実践を推奨しているが、ACPは北米由来であり、英語圏諸国の翻訳版では日本社会に合わないところがあるため、同書では日本の思想と文化的な特徴および法・制度を踏まえた日本型のACPの考え方と実践の方法を提示している。同書の構成は以下のとおり。執筆陣は当講座員および本講座の臨床倫理プロジェクトの共同研究者と臨床現場の医療・ケア専門職。

【理論編】

第1章 医療倫理と臨床倫理の基礎	会田薫子（東京大学）
第2章 ACPとは	会田薫子
第3章 ACPの目米における異同一文化的特点の相違点と留意点	会田薫子
第4章 エンドオブライフ・ケアの臨床倫理	会田薫子
第5章 エンドオブライフ・ケアをめぐる法とガイドラインの理解	樋口範雄（東京大学/武蔵野大学）
第6章 和辻倫理学を医療・ケアの意思決定支援に活かす	宮村悠介（大正大学）
第7章 「自律」と「関係の自律」	日笠晴香（岡山大学）
第8章 タイミングの倫理と共同意思決定プロセス	早川正祐（東京大学）
第9章 ケアの現象学の視点から—特にハイデガーに着目して	田村未希（東京大学）
コラム1 本人の意向を尊重する共同意思決定のために	秋葉峻介（山梨大学）
コラム2 「触れる」ケアとコミュニケーション	坂井愛理（東京大学）
コラム3 ケアの現場における直観—「直観」と「直感」	野瀬彰子（東京大学）

【実践編】

第1章 認知症を有する高齢者の場合	三浦久幸（国立長寿医療研究センター） 高梨早苗（国立長寿医療研究センター）
第2章 超高齢者の場合	吉岡佐知子（松江市立病院）
第3章 がん患者の場合	山本瀬奈（大阪大学大学院医学系研究科）
第4章 慢性呼吸不全患者の場合	竹川幸恵（大阪はびきの医療センター）
第5章 慢性心不全患者の場合	仲村直子（神戸市立医療センター）
第6章 慢性腎不全患者の場合	大賀由花（山陽学園大学看護学部）
第7章 神経難病患者の場合	丸木雄一（埼玉精神神経センター）
第8章 救急・ICUにおける対話のあり方	伊藤香（帝京大学救命センター）
第9章 老人保健施設にて	西川満則（社会福祉法人愛光園相生）
第10章 特別養護老人ホームにて	島田千穂（佐久大学 人間福祉学部）
第11章 歯科医と歯科衛生士の役割	阪口英夫（陵北病院歯科）
第12章 介護支援専門員の役割	清水直美（千葉市あんしんケアセンター）
第13章 在宅医療・病院医療の連携	小豆畑丈夫（小豆畑病院）
第14章 MSWの役割：病院にて	岡村紀宏（西岡病院）
第15章 倫理的な問題への対応のヒント	平川仁尚（あいち健康科学総合センター）

2) 部局横断型教育プログラム「死生学・応用倫理」への参加

学部横断型の教育プログラムに貢献する授業を担当し、コア授業の一つである「死生学概論」と「応用倫理概論」についても本講座スタッフが参画した。

2022（令和4）年度

死生学概論〔死生学の射程〕（会田・早川各1回担当）	Aセメスター	木曜2限
応用倫理概論〔応用倫理入門〕（会田は1回担当）	Sセメスター	金曜3限
会田 死生学特殊講義〔臨床死生学特論〕	Aセメスター	火曜6限
会田 死生学演習〔質的研究法入門〕	Sセメスター	火曜5限
会田 死生学講義〔臨床死生学・倫理学の諸問題Ⅲ〕	Sセメスター	水曜6限
会田 死生学講義〔臨床死生学・倫理学の諸問題Ⅳ〕	Aセメスター	水曜6限
早川 死生学演習〔病いの語りをめぐる倫理〕	Sセメスター	水曜2限
早川 死生学特殊講義〔共感とケアの哲学〕	Sセメスター	木曜3限
早川 死生学特殊講義〔自律について関係的アプローチの展開〕	Sセメスター	木曜4限
早川 死生学特殊講義〔認識をめぐる不正義と責任：現代認識論の一展開〕	Aセメスター	木曜2限

2023（令和5）年度

死生学概論〔死生学の射程〕（会田・早川各1回担当）	A セメスター	木曜2限
応用倫理概論〔応用倫理入門〕（会田は1回担当）	S セメスター	金曜3限
会田 死生学特殊講義〔臨床死生学特論〕	A セメスター	火曜6限
会田 死生学演習〔質的研究法入門〕	S セメスター	火曜5限
会田 死生学講義〔臨床死生学・倫理学の諸問題V〕	S セメスター	水曜6限
会田 死生学講義〔臨床死生学・倫理学の諸問題VI〕	A セメスター	水曜6限
早川 死生学演習〔病いの語りをめぐる倫理〕	S セメスター	水曜2限
早川 死生学特殊講義〔共感とケアの哲学〕	S セメスター	木曜3限
早川 死生学特殊講義〔認識をめぐる不正義と責任：現代認識論の一展開〕	A セメスター	木曜2限
早川 死生学特殊講義〔自律について関係的アプローチの展開〕	S セメスター	木曜4限

3) 社会貢献

リカレント教育《医療・介護従事者のための死生学》「基礎コース」として行うセミナーや、エンドオブライフ・ケアに関するシンポジウム、臨床倫理セミナー、「臨床死生学・倫理学研究会」等の研究会を催して、研究成果の社会還元に努めた。さらに、特任教授の会田は招待講演等の依頼を多数こなした。また、特任准教授の早川も、医学・看護学系団体からの招聘にて複数の講演を行った。講演のテーマはいずれにおいても研究成果を核とするものである。

★リカレント教育セミナー★

本講座が2007（平成19）年度からその中核として活動してきたリカレント教育《医療・介護従事者のための死生学》「基礎コース」を発展的に継続している。リカレント教育とは生涯教育の一形態である。同コースは臨床現場の専門職が死生に関する理解を深め、日々の医療とケアに活かしていくために研鑽を積む場であり、死生学研究の臨床現場への学知の窓でもある。2022・2023（令和4・5）年度はオンラインにて夏季セミナーと春季シンポジウム、「臨床死生学・倫理学研究会」を各年10回開催した。以下、具体的な内容を報告する。

◇《医療・介護従事者のための死生学》「基礎コース」セミナー（夏季セミナー）

日時：2022（令和4）年9月18日（日） 9:30～17:00

開催形態：Zoomを利用したリアルタイム講義

参加者数：約500名

<プログラム>

〔概論〕死生学コア／死生学トピック

池澤優「死生学とは何か―《死者性》の視点から」

〔概論〕臨床死生学コア／臨床死生学トピック

会田薫子「臨床死生学と臨床倫理」

〔特論〕死生学トピック／臨床死生学トピック

鈴木晃仁（東京大学大学院人文社会系研究科 死生学応用倫理専門分野 教授）

「昭和戦前期の精神科病院と二人の朝鮮人患者」

〔特論〕臨床死生学トピック

早川正祐「タイミングと対話の哲学―共同意思決定に向けて」

〔演習〕死生学演習

会田薫子「カンファレンスの方法―『臨床倫理の考え方と実践』から」

◇《医療・介護従事者のための死生学》「基礎コース」セミナー（夏季セミナー）

日時：2023（令和5）年9月17日（日） 9:30～17:00

開催形態：Zoomを利用したリアルタイム講義

参加者数：約400名

<プログラム>

〔概論〕死生学コア

池澤優「死生学とは何か―《死者性》の視点から」（前年度の講演動画）

〔特論〕臨床死生学トピック

早川正祐「タイミングの倫理と共同意思決定プロセス」

〔特論〕死生学トピック

鈴木晃仁「江戸時代の歌舞伎と精神疾患患者」

〔概論〕臨床死生学コア

会田薫子「臨床死生学と臨床倫理」

〔演習〕死生学演習

会田薫子「カンファレンスの方法—積極的な安楽死を望む患者のケースを例として」

★シンポジウム★

▼「医療・介護従事者のための死生学」春季セミナー

シンポジウム「ACPの考え方と実践—本人を人として尊重する意思決定支援」

日時：2023（令和5）年3月5日（日）13:00～17:00

開催形態：Zoom ウェビナーによる開催

参加登録者数：1,221名

当日参加者数：1,018名

2010（平成22）年度から会田が企画・実施してきたエンドオブライフ・ケア(end-of-life care: EOLC)に関するシンポジウムは、2012（平成24）年度に会田が上廣死生学・応用倫理講座に所属してから、「医療・介護従事者のための死生学」春季セミナーとして位置付けられている。これは当講座の研究課題の1つであるEOLCの充実に関するもので、今回は前年度のシンポジウム「呼吸不全の在宅緩和医療とACPの役割」の成果を引き継ぎ、その発展形として、「ACPの考え方と実践—本人を人として尊重する意思決定支援」と題して実施した。ACPはadvance care planningの略語であり、EOLCの意思決定支援のための取り組みである。医療・ケアを受ける本人の意向を把握し尊重するために、本人を中心として、意思決定に関わる家族等と医療・ケアチームが適切に対話のプロセスをすすめることが求められており、それがACPの適切な実施につながるとされている。

しかし、その臨床実践にはまだまだ困難が伴っており、理由の1つは文化的な背景にあるとみられる。そもそもACPは米国・カナダなど英語圏諸国からの模倣で導入されたが、英語圏諸国のACPは英語圏の文化と法・制度を前提としている。しかし、日本はその前提を共有しているとはいえない。そのため、英語圏の論文から翻訳学習しようとして困難さに直面しているのではないかと思われる。

そこで、今回のシンポジウムでは、意思決定に関わる文化的特徴と法・制度等に関する相違を踏まえ、日本でACPを実践する際の考え方と具体的な対応のあり方について検討した。特に意思決定支援に難渋しやすい超高齢者や神経難病患者、救急患者のケースを取り上げた。また、地域連携における介護支援専門員の役割や、在宅医療と病院医療の連携のあり方も検討した。今回のシンポジウムも会田の研究活動との関連で、一般社団法人日本老年医学会との共同主催とし、広範な発信を目指した。今回のシンポの反響は大きく、その成果を踏まえ、『ACPの考え方と実践—エンドオブライフ・ケアの臨床倫理』を東京大学出版会から刊行することとなった。

＜シンポジウムのプログラム＞

総司会：田村未希（東京大学大学院人文社会系研究科 上廣死生学・応用倫理講座 特任助教）

【座長提題】

会田 薫子（東京大学大学院人文社会系研究科 上廣死生学・応用倫理講座 特任教授）

【講演】

会田 薫子（東京大学大学院人文社会系研究科 上廣死生学・応用倫理講座 特任教授）

「ACPの文化的な多様性—自らと自ずから」

吉岡佐知子（松江市立病院 看護局長、老人看護専門看護師）

「超高齢者のためのACP—日々のケアがACP」

丸木雄一（社会福祉法人「シナプス」埼玉精神神経センター理事長/センター長、埼玉県会 副会長）

「筋萎縮性側索硬化症から学ぶACP」

伊藤香（帝京大学医学部附属病院 高度救命救急センター 病院准教授）

「緊急ACP—救急現場での意思決定支援」

大城京子（和ひ咲び 副所長 主任介護支援専門員）

「地域とつなぐアドバンス・ケア・プランニング—ACP実践におけるケアマネジャーの役割」

小豆畑丈夫（医療法人社団青燈会 小豆畑病院 理事長・院長 日本在宅救急医学会発起人・理事）

「地域における在宅医療と病院医療の連携から見えてきた、ACPのあり方」

【コメント】

早川正祐（東京大学大学院人文社会系研究科 上廣死生学・応用倫理講座 特任准教授）

「ケアの倫理の視点から」

【Q&A】

▼「医療・介護従事者のための死生学」春季セミナー

シンポジウム「認知症を有する人のための緩和ケアと意思決定支援—エンドオブライフ・ケアのあり方」

日時：2024（令和6）年3月17日（日）13:00～17:00

開催形態：Zoom ウェビナー（リアルタイム）

事前登録者数：1,364名

当日参加者数：1,081名

恒例のエンドオブライフ・ケア(end-of-life care: EOLC)に関するシンポジウムは、「医療・介護従事者のための死生学」春季セミナーとして位置付けられている。これは当講座の研究課題の1つであるEOLCの充実に関するものである。今回は前年度のシンポジウム「ACPの考え方と実践—本人を人として尊重する意思決定支援」を成果を活かし、さらに発展させ、厚生労働科研の研究課題と連動させることで、政策的な意義を深めるべく企画した。

本シンポは、一般社団法人日本老年医学会と当講座が共同主催した。本シンポは当講座の《医療・介護従事者のための死生学》基礎コースの春セミナーとして会田が企画した。事前登録者数1,364名および当日の参加者1,081名（重複カウントなし）とともに、当講座の行事として過去最大の規模となった。

本シンポは会田が3年間にわたって参画した厚生労働科学研究費研究事業「療養場所の違いに応じた認知症者のエンドオブライフ・ケア充実に向けての調査研究—COVID-19流行の影響も踏まえて」（課題番号21GB0101、研究代表者：国立長寿医療研究センター在宅医療・地域医療連携推進部長 三浦久幸氏）の研究成果発信の場としても位置付けられ、2024（令和6）年1月1日に施行された「認知症基本法」のもと、時宜を得た開催となった。シンポの当日は当講座が事務局となった。

本シンポは二部構成で、第一部「より良い緩和ケアのために」では、まず重度認知症を有する人のための苦痛評価プロトコルの開発についての発表がなされた。従来、苦痛を言語化しない人は苦痛を経験していないとみなされがちであったが、表情やバイタルサイン等を含めた苦痛評価法の活用によって苦痛の経験を把握し、緩和ケアを提供できることが示された。苦痛緩和は患者が基本的人権の一環として享受すべきものであり、そうして人権擁護することによって意向の表明力も向上するという認識が、この研究開発につながっている。また、日本では未だ十分認識されていない認知症を有する人のスピリチュアルペインとケアについての講演もあり、大きな反響を呼んだ。

第二部「意思決定支援の現状と課題—SDMとACPのあり方」では、まず、全国の訪問看護ステーションと介護老人保健施設および療養病棟の看護職を対象として実施された調査結果が報告された。この調査で、いずれの療養場所においても、認知症を有する本人の意思決定能力が評価されないまま家族の意向が重視されている現状が明らかにされた。次いで、在宅医療・介護の現場に関してケアマネジメントの観点から、食事や衣類の選択など、敢えて語られることのない日常の細々とした意思決定とその支援の積み重ねが、やがて重要な医療行為や法律行為などの非日常の意思決定の礎になるということが事例にもとづいた講演で語られた。その後、特別養護老人ホームで看取りを実践した先駆者としての経験を踏まえた老年社会学者が、看取りケアマネジメントにおける介護支援専門員と生活相談員、看護職、医師などケアチーム内での役割分担と協働のあり方の確認と見直しが急務だと述べた。最後に、急性期病院における対応についての講演でも、「丁寧な日常生活援助が緩和ケア」という認識をもつことの重要性が議論された。

<シンポジウムのプログラム>

総合司会：早川正祐（東京大学大学院人文社会系研究科 上廣死生学・応用倫理講座）

【座長提題】

三浦久幸（国立長寿医療研究センター在宅医療・地域医療連携推進部）

会田薫子（東京大学大学院人文社会系研究科 上廣死生学・応用倫理講座）

【講演】

第一部「より良い緩和ケアのために」

平原佐斗司（東京ふれあい医療生活協同組合研修・研究センター）

「重度認知症の方の苦痛評価プロトコルについて」

平川仁尚（あい健康の森健康科学総合センター健康開発部）

「認知症の人の尊厳とスピリチュアルケア」

第二部「意思決定支援の現状と課題—SDMとACPのあり方」

小松亜弥音（国立長寿医療研究センター老年社会科学研究部）

「認知症を有する人と家族への意思決定支援：実態調査報告」

石山麗子（国際医療福祉大学大学院医療福祉学研究科）

「在宅医療・介護の現場にて—ケアマネジメントの観点から」

島田千穂（佐久大学人間福祉学部）

「高齢者介護施設にて」

高梨早苗（国立長寿医療研究センター在宅医療・地域医療連携推進部）

「急性期病院における意思決定支援の現状と課題—SDM と ACP の進め方」

【コメント】

早川正祐「ケアの倫理の視点から」

【Q & A】

本シンポも大変好評であり、事後の参加者アンケート(n=599)では参加者満足度が96%、「新たな知識、理論や考え方の習得に役立った」、「まあまあ役立った」と回答した参加者が合計100%と、参加者の評価が非常に高かった。

今後もよりよい医療とケアを実現し、本人らしい人生の集大成を支援するため、先進的な臨床実践に学びながら、臨床現場における問題を解決するための道を探っていくことができればと考えている。そのためにも、高い志をもって職務を遂行している全国の医療・ケア従事者のお声に耳を傾け、協働を推進してまいりたい。

★臨床死生学・倫理学研究会★

2022（令和4）年度

〔前期〕

1. 4月20日（水）

「集学的痛みセンターの誕生までの道のりとその意義」

加藤実（春日部市立医療センター ペインクリニック科、日本大学医学部麻酔科学系麻酔科学分野 臨床教授）

2. 5月11日（水）

「在宅医療における意思決定支援—MSW の役割」

阿部葉子（在宅ケアクリニック川岸町医療ソーシャルワーカー、居宅介護支援事業所かわざし町 主任介護支援専門員）

3. 5月25日（水）

「ハイデガーの「死」の概念と他者理解の問題—ケアの現象学に向けて」

田村未希（東京大学大学院人文社会系研究科 死生学・応用倫理センター 上廣講座 特任助教）

4. 6月15日（水）

「慢性腎臓病・透析医療における SDM(shared decision-making)の現状と課題」

小松康宏（群馬大学大学院医学系研究科 医療の質・安全学講座 教授）

5. 6月29日（水）

「身体抑制のないケアを目指して」

出村淳子（金沢大学附属病院 看護部 副看護部長（臨床倫理担当））

〔後期〕

6. 10月12日（水）

「COVID-19 パンデミックと公衆衛生倫理」

大北全俊（東北大学大学院医学系研究科・医療倫理学分野 准教授）

7. 11月2日（水）

「おたるワンチーム（ICT）を活用した終末期医療の取り組み」

高村一郎（高村内科医院 院長）

8. 11月16日（水）

CKM（保存的腎臓療法）の現状と今後の課題」

岡田浩一（埼玉医科大学 腎臓内科 教授）

9. 12月7日（水）

「“弱さ”の倫理学」

宮坂道夫（新潟大学大学院 保健学研究科 教授）

10. 12月21日（水）

「“老年的超越”の現在」

増井幸恵（東京都健康長寿医療センター研究所 福祉と生活ケア研究チーム 研究員）

2023（令和5）年度

〔前期〕

1. 4月19日（水）

「チーム KISA2 隊の軌跡と奇跡」

守上佳樹（よしき往診クリニック院長、総合内科医・老年病専門医 KISA2 隊（Kansai Intensive Area Care Unit for SARS-CoV-2 対策部隊）オヤカタ）

2. 5月10日（水）

「患者さんに寄り添うということ——ケアの倫理を实践する」

石垣靖子（北海道医療大学 名誉教授（看護学））

3. 5月24日（水）

「認知症の人と家族ケアのパラダイムシフト」

清家理（立命館大学スポーツ健康科学部 教授（応用健康科学・社会医学・老年学）、MSW）

4. 6月7日（水）

「精神科リエゾンの視点からみたがん療養——患者、家族の言葉から見えるもの」

赤穂理絵（東京女子医科大学医学部精神医学講座 准教授）

5. 6月28日（水）

「透析の見合わせと終了に関する法的視点」

小川義龍（小川綜合法律事務所 所長、弁護士）

〔後期〕

6. 10月11日（水）

「重い精神疾患をもつ人の医療上の意思決定への関わり」

井藤佳恵（東京都健康長寿医療センター 福祉と生活ケア研究チーム 研究部長、精神科医）

7. 10月25日（水）

「患者が医療者に望むこと——33年の活動経験から」

山口育子（認定NPO法人ささえあい医療人権センターCOML 理事長）

8. 11月8日（水）

「神経難病高齢者のエンドオブライフ・ケア」

高道香織（国立病院機構医王病院 北陸脳神経筋疾患センター、老人看護専門看護師）

9. 12月6日（水）

「口から支えるエンドオブライフ」

大野友久（浜松市リハビリテーション病院 歯科部長、歯科医）

10. 12月20日（水）

「死別の悲しみを学ぶ——悲嘆学入門」

坂口幸弘（関西学院大学人間福祉学部 教授、悲嘆と死別の研究センター センター長）

上記の研究会もコロナ禍を契機としてオンラインにて開催するようになったが、次第に全国からアクセス数が増え、2023（令和5）年度は年間で延べ約4,275名が上記の研究会に参加した。

4）国際交流

2023年10月16日・18日に死生学・応用倫理センター上廣講座主催で、“Exploring New Dimensions of Empathy and Care Ethics: Cross-cultural and Cross-field Dialogues”＝「共感とケアの倫理の新たな次元を探究する：異文化間対話と異分野間対話」と題する国際シンポジウムを開催した。開催にあたっては、公益財団法人上廣倫理財団の2023年度国際シンポジウム助成を受けた。

基調講演者として現代倫理学の分野で世界的に著名な Michael Slote 教授（マイアミ大学）をお迎えし、徳認識論の分野で著名な Heather Battaly 教授（コネティカット大学）、ケア認識論や比較ケア倫理学の第一人者である Vrinda Dalmiya 教授（ハワイ大学）にもご講演いただいた。また国内からは若手・中堅の研究者を中心に招聘した。

基調講演者の Slote 教授の講演は16日、18日の両日に行われた。講演では、ケアの倫理における共感概念、また心の哲学における信念概念や合理性概念が、yin-receptivity と yang-purposiveness の相互補完的な働きによって新たに捉え直された。その結果、ケアの倫理の発想が、陰陽の発想によってどのように豊かに再解釈できるのかが明らかにされた。

16日は基調講演の他に6つの発表が行われた。Anton Sevilla-liu 氏（九州大学准教授）は、和辻哲学の魅力と問題性を、ケアの倫理が重視する個別性・具体性・受容性の観点から明らかにした。石原悠子氏（立命館大学准教授）は、ケアの倫理においてまだ十分に着目されていない「遊び」という要素について、上田閑照やガダマーの議論と比較しつつ

考察を行った。河野哲也氏（立教大学教授）は、間合いに含まれる緊張感が、どのようにケアを触発し促進するのかを明らかにした。飯塚理恵氏（学術振興会特別研究員／関西大学）は、Slote氏の受容性に関する見解をさらに発展させ、受容性が認識的徳であることを示す議論を展開した。Heather Battaly氏（コネティカット大学教授）は、他者志向的な認識的ケアと自己志向的な認識的ケアがあることを示し、両者のバランスを取ることが重要であることを示した。Vrinda Dalmiya氏（ハワイ大学教授）は、微生物や土壌へのケアを含む持続型農業によって、ケア・エートスが培われ、共感性を豊かに育むことができると論じた。

18日も基調講演の他6つの発表が行われた。早川正祐（本講座特任准教授）は、共感には、相手のタイミングやペースを尊重する働きがあり、その共感の機能によって自律尊重も可能になると論じた。宮原克典氏（北海道大学特任講師）は、「認知は自らの行動・行為によって構成される」とするenactivismの立場から、共感の身体性や技能的な側面を明らかにした。田村未希（本講座特任助教）は、共感が現象学の歴史においてどのように扱われてきたのかを論じた上で、共感をハイデガーのmoodの観点から考察した。坂井愛理（本講座元特任研究員）は、マッサージにおける会話分析の観点から、相手に触れながらの会話によってケアがどのように促進されるのかを分析した。富岡薫氏（慶應大学助教）は、現代日本におけるケアの倫理の受容の状況を明らかにし、「女性が自分自身の声を取り戻すこと」というケアの倫理の当初の方向性が曖昧にされている現況の問題性を鋭く指摘した。阿部裕彦氏（独立研究者）は、Slote氏の受容性の概念やopen-mindednessの概念が、認識論においてどのような重要性和含意をもつのかを明らかにした。

参加者各々が自らの専門分野における研究蓄積を、ケアの倫理と有機的に関連づけることで、ケアの倫理の新たな次元を提示することができた。

Program

October 16th

09:00-09:10	Opening remarks
09:10-10:00	Talk 1: Anton Sevilla-Liu, "Care Ethics and Empathy in Watsuji and the Kyoto School of Philosophy"
10:10-11:00	Talk 2: Yuko Ishihara, "(Care)Ethics of Play: Ueda Shizuteru's Zen Buddhist Account"
11:10-12:25	Keynote speech 1: Michael Slote, "Care Ethics and Beyond: New Roots for Care Ethics"
12:25-13:10	Lunch break
13:10-14:00	Talk 3: Tetsuya Kono, "Ma'ai and Caring"
14:10-15:00	Talk 4: Rie Iizuka, "Towards Establishing Intellectual Receptivity as an Epistemic Value"
15:00-15:20	Coffee break
15:20-16:10	Talk 5: Heather Battaly, "Epistemic Care, Self-Care, and Subsistence"
16:10-17:00	Talk 6: Vrinda Dalmiya, "Care Ethics and Virtue Epistemology: Empathy and "Ethos" "
18:00	Banquet: Restaurant SAKURA (The International House of Japan. B1)

October 18th

09:00-09:50	Talk 7: Seisuke Hayakawa, "Timeliness, Respect, and Empathic Caring"
10:00-10:50	Talk 8: Katsunori Miyahara, "On Respect in Empathy: An Enactive Proposal"
11:00-12:15	Keynote speech 2: Michael Slote, "Care Ethics and Beyond: A Larger Picture"
12:15-13:00	Lunch break
13:00-13:50	Talk 9: Miki Tamura, "A Phenomenological Conception of Empathy: The Significance of Mood"
14:00-14:50	Talk 10: Eri Sakai, "Receptivity in Practice: Conversation Analysis of Pain Display within Massaging Session"
14:50-15:05	Coffee break
15:05-15:55	Talk 11: Kaoru Tomioka, "Care Ethics as a Feminist Theory"
16:05-16:55	Talk 12: Hirohiko Abe, "Why Be Open-minded?: Epistemic Justification in Testimonial Sentimentalism"
16:55-17:00	Closing remarks

2. 構成員・専門分野

(1) 所属教員

会田 薫子	特任教授	臨床倫理学、臨床死生学、医療社会学
早川 正祐	特任准教授	行為論、倫理学、臨床死生学

(2) 特任助教の活動

田村 未希

在職期間 2020 年 7 月～

研究領域 哲学（現象学）

主要業績

（著書）[共著] 田村未希，第一部 理論編 第 7 章「ケアの現象学の観点から」、会田薫子編著『ACP の考え方と実践—エンドオブライフケアの臨床倫理』（東京大学出版会、2024.3.25）

（学会講演・研究会発表等）国内，Miki TAMURA, “The Phenomenological Conception of Empathy: The Significance of Mood,” at the International House of Japan, in Japan, October 2023. (2023.10.18, The International Conference: Exploring New Dimensions of Empathy and Care Ethics: Cross-cultural and Cross-field Dialogues (organized by Uehiro Division, Center for Death & Life Studies and Practical Ethics, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo), at the International House of Japan, 口頭発表)

国内、田村未希、講演「真の共感を求めて」(2023.5.19、キリスト教週間早朝礼拝、国際基督教大学、口頭発表)

国内、田村未希、研究発表「ハイデガーの「死」の概念と他者理解の問題—ケアの現象学に向けて」(2022.5.25、臨床死生学・倫理学研究会、東京大学本郷キャンパス、オンライン研究会、口頭発表)

（社会的活動）学会

哲学会（2011.4～現在）、会計監査（2023.4～現在）

日本哲学会（2016.4～現在）

日本現象学会（2012.11～現在）

ICU 哲学研究会（2009.4～現在）

ハイデガー研究会（2009.4～現在）、運営委員（2022.9～現在）

ハイデガー・フォーラム（2009.4～現在）、実行委員（2021.9～現在）

実存思想協会（2011.4～現在）、幹事（2013.9～現在）

京都ヘーゲル読書会（2009.4～現在）、幹事（2023.4～現在）

（他大学・他部局への出講）

日本赤十字社看護大学 看護学部 非常勤講師「哲学と倫理」担当（2021 年度～現在）

日本赤十字社看護大学 看護学部 非常勤講師「生命倫理」担当（2022 年度～現在）

国際基督教大学 教養学部 非常勤講師「後期近代哲学史」担当（2022 年度～現在）

(3) 特任研究員

坂井 愛理 特任研究員 社会学

34 多分野交流プロジェクト研究

多分野交流プロジェクト研究は、本研究科がその長い歴史のなかで培ってきた学問諸分野の個々の成果を基礎にしながら、各領域間での交流を行ない、人文・社会系の学問に新たな活力を与えようとするものである。いずれの講座においても、専門もさまざまに異なる、まさに多分野からの学生が参加しており、そういった意味でこのプロジェクトは、教員にとってはもちろんのこと、今後の学界の発展を担っていくべき若い大学院生たちにとっても、よき創造的な刺激の場として機能している。

このプロジェクトは、1995年（平成7年）4月に大学院が改組され、いわゆる「大学院重点化」が行なわれた際に、その改革の中核的な位置を占めるものの一つとして発足した。すでに1993年度（平成5年度）より部分的に試行されてはきたが、1995年度（平成7年度）の正式な発足により、本プロジェクトは人文社会系研究科の専任教員に加え、15名の客員教員（併任教授5名、連携教授・助教授10名）の参加を得て、本格的にスタートした。発足に際しては、〈人間と価値〉、〈歴史と地域〉、〈創造と発信〉、〈社会と環境〉という4つの大テーマが立てられ、それぞれのグループの主査のもとに、多くの人文社会系研究科所属教員と複数の客員教員（1プロジェクト平均3～4名）が集まって共同研究の態勢を整え、博士課程の大学院生の参加を得て、共同研究が進められた。なお2000年度（平成12年度）からは、より広範な大学院生の参加を認めるべきであるという考え方から、院生は博士課程に限定せず、修士課程院生の参加も認めている。

1999年度（平成11年度）からは、発足当初の4つの基本的なテーマに限らず、柔軟に様々なテーマに対応することによって、本プロジェクトの持つ潜在的な可能性をさらに追求することになった。この年に設けられた〈情報と文化：文化資源と人文社会学〉は、新設を計画していた「文化資源学」専攻を準備するためのプロジェクトであり、院生のほかに、文化資源学ワーキング・グループ全員と、本学以外の諸文化機関の専門家が参加した。また2002年度（平成14年度）の「人間の尊厳、生命の倫理を問う」は、同年新設の「応用倫理教育プログラム」の一環をなす演習としても認定された。このように多分野交流プロジェクト研究は、人文社会系における新しい研究領域を開拓していくための重要な役割を担うようになっており、これは本プロジェクトにとって新たな重要な展開といえよう。また、2011年（平成23年）3月11日に発生した東日本大震災とそれに続く原子力発電所の事故についても、「生命をめぐる科学と倫理」において主題的に論じられることとなり、この多分野交流プロジェクトは学問が実社会へと還元・発信されていく場としての機能をも果たすようになった。

2013～2017年度（平成25～29年度）には身体論、2014～2018年度（平成26～30年度）には日本の近代学術受容の問題を扱うプロジェクト、2019～2022年度（令和元～4年度）には戦前の『哲学雑誌』にかかわるプロジェクトが開講され、2023年度（令和5年度）に始まった「文化史におけるスピノザ」に引き継がれている。また2019年度（令和元年度）から新領域創成科学研究科の教員たちを加えて「サステイナビリティと人文知」、2021年度（令和3年度）からは学内のギリシア・ローマ・インド・中国・日本の古代研究者の集う「古代学交流」が始まった。

なお、多分野交流プロジェクト研究の成果を伝える手段として、毎年ニューズレターが発行されている。ニューズレターにはプロジェクト案内の他、関連エッセイなども掲載されている。

開講されたプロジェクトは以下の通り。

2022年度（令和4年度）

戦前の『哲学雑誌』を読む（鈴木泉）
サステイナビリティと人文知（堀江宗正）
古代学交流（芳賀京子）

2023年度（令和5年度）

文化史におけるスピノザ（鈴木泉）
サステイナビリティと人文知（堀江宗正）
古代学交流（芳賀京子）